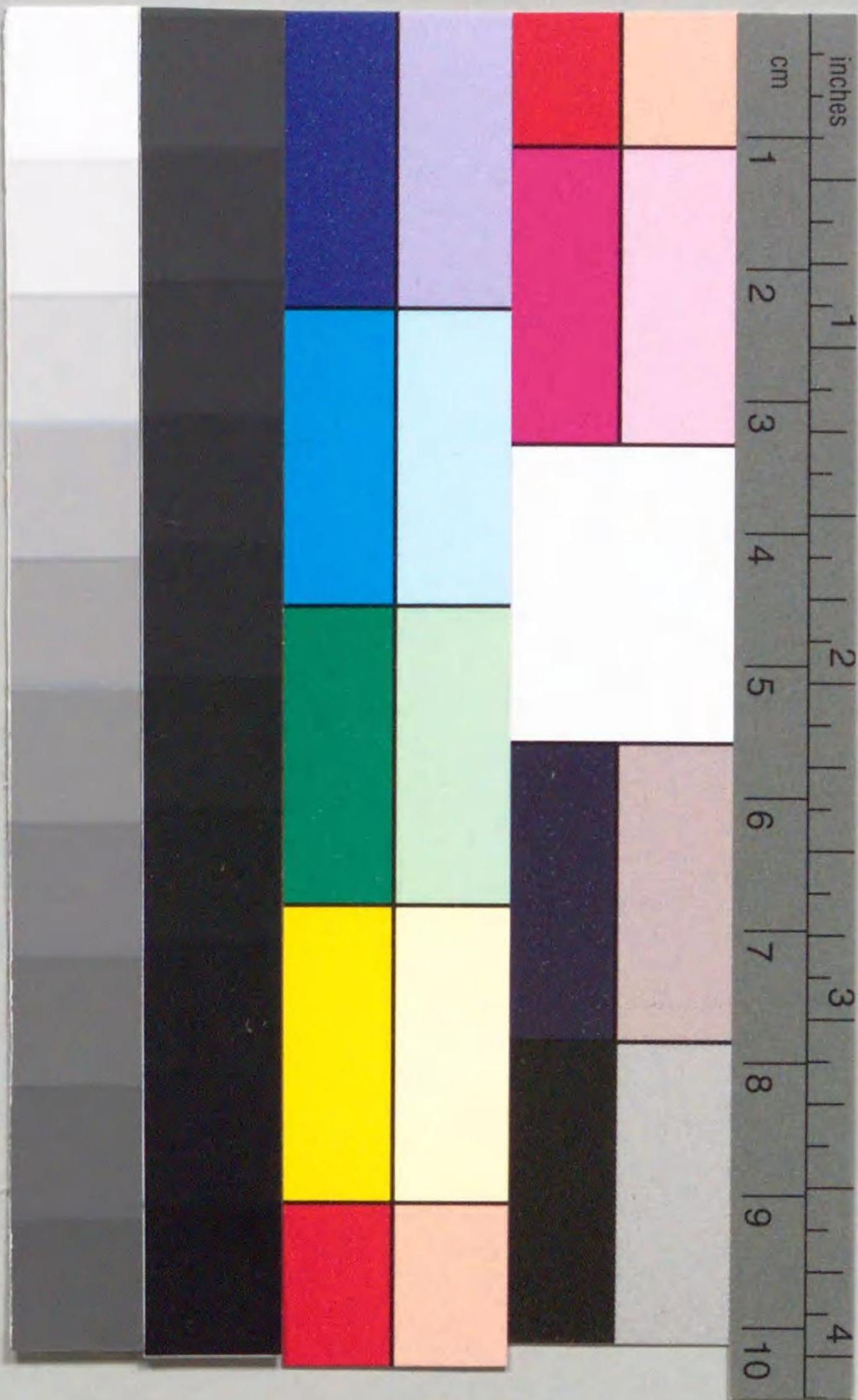


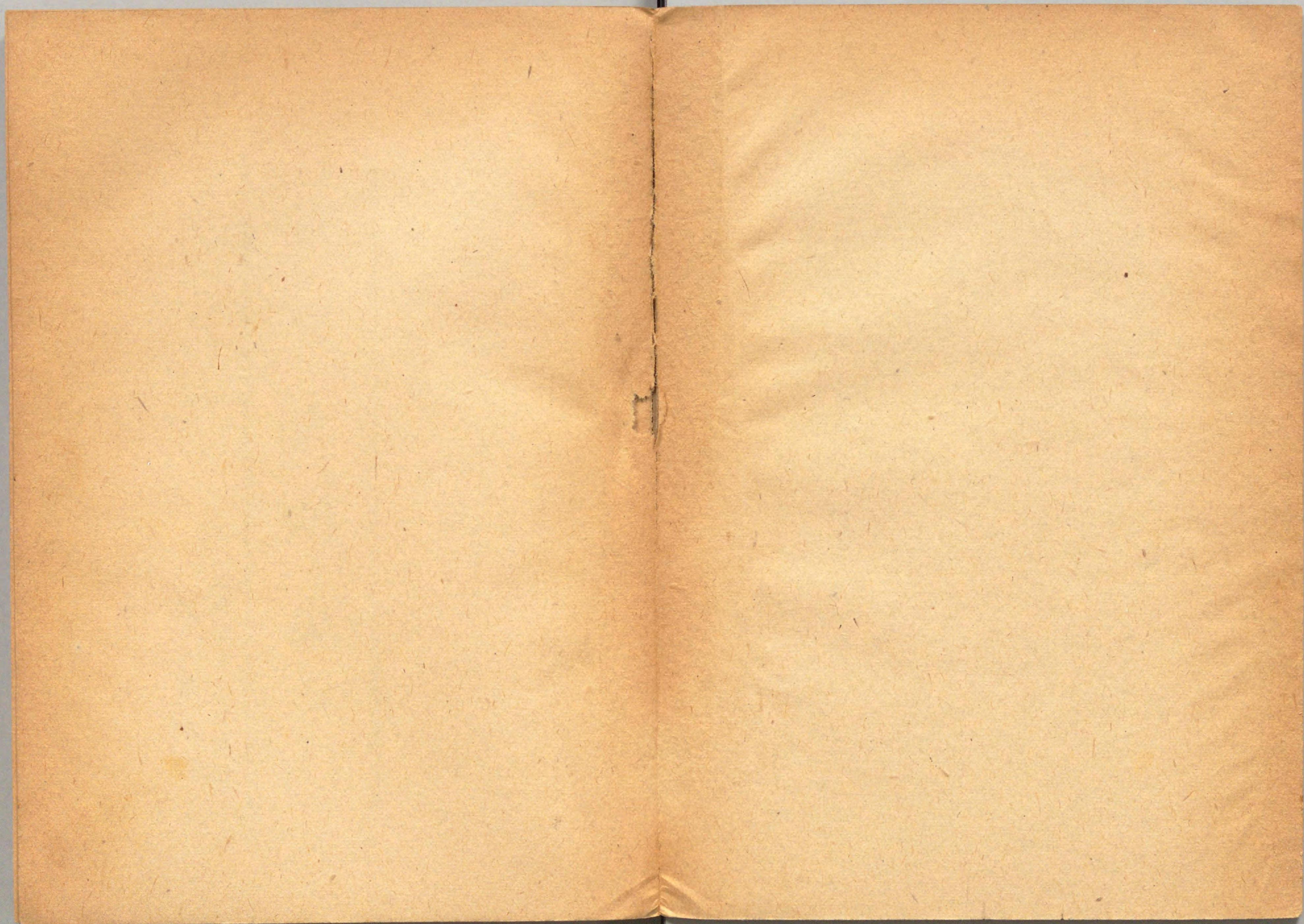
世界文明史

下卷

一氏義良著

高山書院





一氏義良著

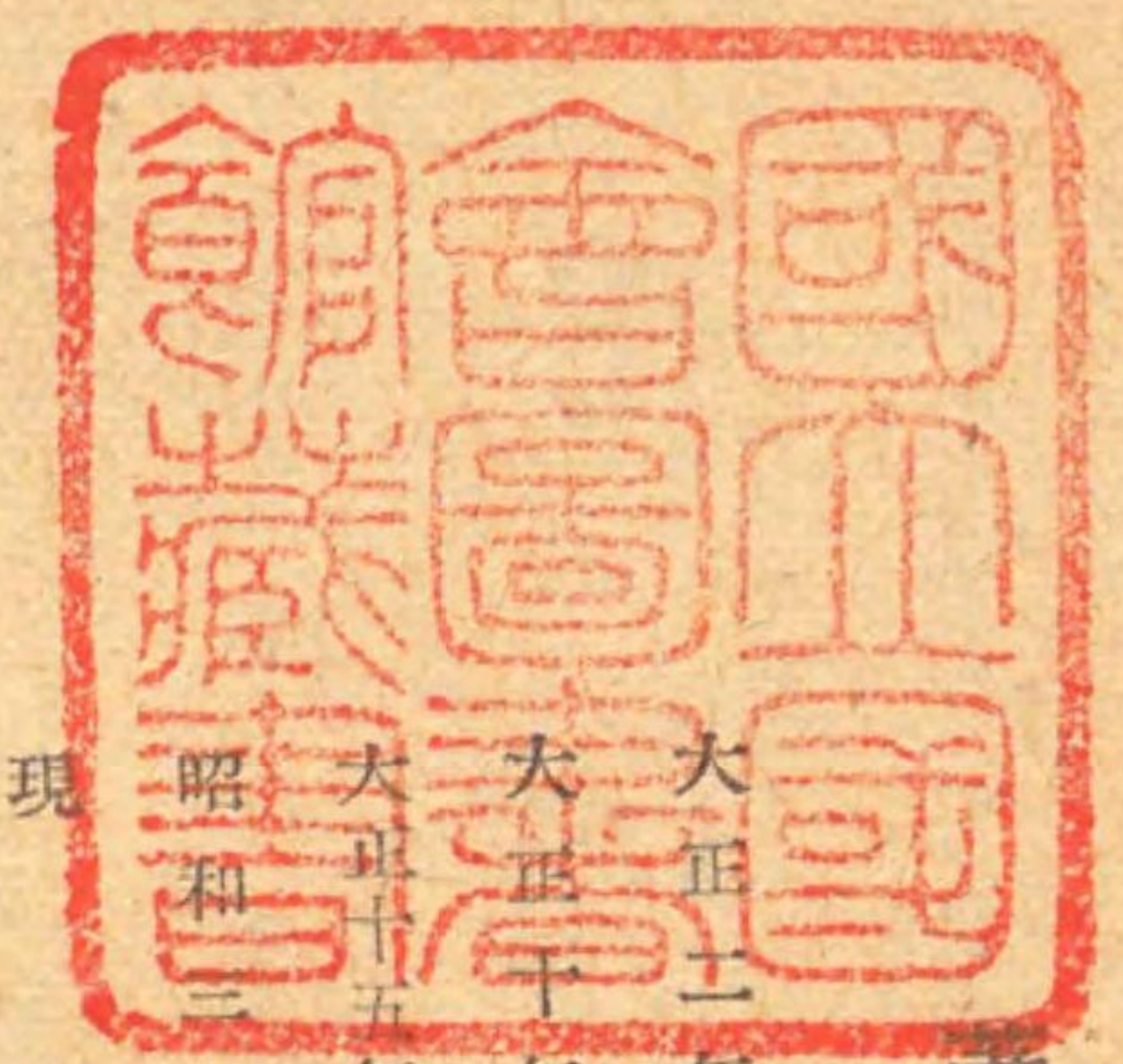
世界文明史 下

「青少年文化叢書」

高山書院刊

20
I
1

著者略歴



大正二年、早稻田大學英文科卒業
大正十年、史學研究のため歐洲留學
大正十五年、古代史料見學のため渡歐
昭和三年、帝國美術學校教授
現在、著述に従事



29191

はじめに

みなさん、人間は、十萬年か五十萬年かの、ずつとずつと大昔には、まだ人間にならない、お猿のようなものでありました。ことばもなく道具もなく、家も着物もありませんでした。それがだんだん少しずつ進歩したのです。はじめに、ことばができました。また、石や木や骨などでつくった道具をつかうようになりました。その道具で家をつくり、着物をつくるようになり、つた。それから火をたくようになりました。火で食物を焼いたり、煮たりしました。また石を火でとかして、金属の道具をつくるようになりました。また粘土で形をつくり、それを火で焼いて陶器をつくりました。こんどは字をかんがえました。その字を筆、ペン、墨、インキで、紙などにかきました。それを手紙や本にしました。畫もかきはじめました。彫刻もはじめました。美術ができました。木や竹や皮で、笛や太鼓をつくり、金属で鐘などをつくり、それらを鳴らして、歌をうたいました。音楽がはじまつたのです。いろんなお伽ばなしや、物語や、詩や小説もできました。文學も進みました。芝居(劇)もできました。

人間は、はじめは裸でいました。それが、獣の毛皮を着るようになり、さらには毛や麻や綿などの糸を紡ぎ、のちには蠶をかつて絹糸をつくり、これを織り、美しく染めて、着物をつくるようになりました。いろんな模様をつけたり、刺繍（ぬいとり）を飾つたりもしました。靴や下駄や、帽子ができました。家も、もとは洞穴に住んだのです。それが、木や竹や、石や煉瓦の家をつくりました。のちには鐵やコンクリートを材料にして、りつばな、大きな、高さの高い、百階以上もある大建築をたてるようになりました。

そのぐらいなことではありません。もつとすばらしいものを、人間はたくさん、つぎつぎと發明したり、考えたり、つくつたりしました。車、舟、汽車、汽船、自動車、飛行機。その外の動く力や蒸氣や電氣の應用——たとえば時計、機械、電燈、電車、電話、ラディオ、テレビジョンなどです。いろんな學問も發達しました。あらゆる方面で、あらゆる驚くべき無数のことを、つぎつぎと行い、またそれを積みかさねてきました。

みなさん、これが文明なのです。それではなぜ人間は數十萬年もの長い長い間、こんな文明のしごとをやつてきたのでしょうか。それは外でもありません。どうしたならば人間は、みんな幸福に平和に愉快に生きてゆけるかということだけを考へて、そのために役立つことを、つぎつ

ぎと發明し、考案し、そして文明を進歩させ、積み重ねてきたのであります。

みなさん、すべての人間の幸福と平和のために、力をあわせて働こうではありませんか。それには、みなさん、まず、これまでの人間が、どんな文明のしごとを積み重ねてきたかということ、を、ざつと、ふりかえつて見ようではありませんか。わたくしのかいた、このそまつな本が、そのため、みなさんのお役にたてば、まことに仕合せであります。

一九四八年一月一日

著

者

もくじ

はじめに

I 近世の文明(上)

1	聖フランシスコ	一
2	三人の畫家	六
3	キリスト教徒の争い	九
4	シエイクスピヤ	四
5	魔法の針	一八
6	火薬のばくはつ	二
7	しばられた本	二四
8	コロンブス	六

9 アメリカ發見……………三

II 近世の文明(下)……………四〇

1 國民の國をつくる……………四〇

2 おどけた國王……………四〇

3 笛を吹く王さま……………四〇

4 船をつくつた王子……………四〇

5 ワシントン……………四〇

6 科學の夜あけ(上)……………四一

7 科學の夜あけ(下)……………四一

8 思想の力(上)……………四二

9 思想の力(下)……………四二

III 現代の文明(上)……………四六

1 自然にかえれ(上)……………四六

2 自然にかえれ(下)……………四六

3 フランス大革命……………四六

4 人權宣言……………四七

5 せいひのひくい大將……………四七

6 セントヘレナの悲劇……………四七

7 めくらの音樂家……………四七

8 音の天才たち……………四七

9 第三帝國……………四七

IV 現代の文明(下)……………四八

10 赤十字社……………四八

11 リンカーン……………四八

12 不思議な時代……………四八

13	ジェームズ・ワット	一五二
14	機械の時代	一五六
15	ラデイオまで	一六一
16	産業革命	一六五
17	労働問題	一七〇
18	第二十世紀の文明	一七七



I 近世の文明(上)

1 聖フランシスコ

十字軍だの百年戦争だのと、血なまぐさい争いに夢中になつていゝうちに、暗黒時代とされていた中世のヨーロッパへ、だんだんあかるい光がさしこんできました。精神の上にも物質の上にも、新しい、いきいきした近代のすがたをあらわしました。はじめの近代主義は、イタリアのルネッサンスです。ルネッサンスとは、「うまれかわる」という意味で、くらしいやみにあつたヨーロッパが、再びギリシャ、ローマの昔のような、あかるい、ほがらかな、文明の世界に、うまれかわることです。それはイタリアの、その頃さかえたフィレンツェ(フロレンス)、ジェノア(ジュネーヴ)、ヴェネツィヤ(ヴェニス)などの都會で、宗教、文學、美術など精神文明にあらわれしました。それらはいずれも、人文主義ヒューマニズムをもととしています。人文主義とは「人間はたがいに愛しあわなくてはならない」という心もちで、生きることです。その心をもつた、二人のお話。一人は

フランシスコ（^{セント}聖フランシスコ）（一一八二—一二二六）。もう一人はダンテ（一二六五—一三二一）であります。

イタリヤで、その頃もつともさかえたフィレンツェに近く、ウブリアという廣い美しい野の北によつた小高い丘の上に、アッシジという小さい町があります。そのサン・フランシスコ寺という大きなお寺は、今も有名であります。この寺こそ、近代のはじめ、一ばんたつとい、キリスト教の聖者といわれるサン・フランシスコのいたお寺です。今も、お墓がそこにあり、おまいの人がたえず聖者の徳をほめたたえています。

この聖者は、アッシジの富んだ家に生まれました。少年時代にはたいへんぜいたくで、絹の着物の外は着ませんでした。そしてわがままで亂暴でした。そのため、両親はもとより、みなが困つていました。この人が愚かであつたからではなく、家が富んでいたのも、世の中の事がらや苦勞といふことを知らなかつたからです。ところが、二十歳の頃、大病をして、もう死ぬるばかりになりました。その時、じつと考えました。すると、じぶんのこれまで行つたことが、みなまちがつていたため、多くの人にめいわくをかけたことに気づきました。そこで、「じぶんは今死んではならない。じぶんの精神力でこの大病をなおして、こんどは世の中の人々のために、やくだつ、よろこばれることをたくさんして、これまでの罪をつぐなわなくてはならぬ」と、かたく決心を

しました。だんだん病氣がよくなりました。それから、すつかり人間がちがつたようになって、信心深いまじめな、キリスト教徒になりました。まず、じぶんのもつている一切のものを、困つている人たちにあたえてしまいました。キリストは、まずしい者は幸いである。その人は、神がわかるのだ」といいました。かれも、ほんとうのまずしい者にならなくては、人間として生きることはできないとさつたのです。そして、富んだ父の家を出でて、アッシジの小さな寺に入り、ほかの坊さんたちと一しよに、あらゆる苦勞をしました。まいにち、帽子もかぶらず、はだしのまま、破れた着物をきて、暑さ寒さもかまわず、村々をまわりました。そして、人さえ見れば、「人間はよいことを考え、よいことを行わねばならない。じぶんのことよりも、他人のことをせねばならない。争つてはならぬ、怨んではならぬ。自慢をしてはならぬ」と、熱心に説教をしました。それをきくと、人々は、じぶんの行つたことが、どんなにわるく、また恥すべきことを知りました。そしてみな、サン・フランシスコに従つて、帽子もなく、はだしのまま、人々に、よいことの教を傳えてあるきました。

ある日のこと、かれはいつものように、村の人に教を傳えるため、丘のお寺をおりて歩きました。道ばたに雀だの、鳩だの、小鳥がたくさん遊んでいるのを見ました。かれは、その小鳥の方

へ行つて、手で招くと、小鳥は、かれのぐるりに集まつてきました。かれは、しずかにいいました。「みなさん、神さまを忘れてはなりませんよ。神さまは、みなさんに美しい、また便利な羽をあたえてくださいました。また、昨日も今日も明日も、みなさんが生きるために、食べ物をおたえてくださるのです、みなさん、行つて神さまにお禮を申しなさい。」そよいいながら、小鳥のあたまをしずかになでました。じつときいていた小鳥は、一しよにばらばらとたちあがりました。そして空高くまいながら、あたかも神を讚美するかのよう、かがやく日に向つて、聲ほがらかにうたいました。

かれの教によつて、これまで、じぶんのことばかりを考えていた人々も、人間はみな兄弟である、ますしい者、苦しい者、あわれな者を助けなくてはならないと、しみじみ感じました。そこで、神の愛によつて、世の中をあかしく、よくする考えが、すすんひろがりました。かれの教がもとになつて、フランシスコ派という、キリスト教のりつばな一派が今もつすいています。

サンフランシスコの頃から、数十年を経たのちのこと、フィレンツェにダンテ（一二六五—一三二一）という人がありました。この人はキリスト教の坊さんではなく、その頃の最もすぐれた學者で、また詩人でありました。この頃、フィレンツェは、たいへん繁昌しました。富んだ人がたくさん

ありました。世界の文學とか、美術とか、學問とか、文明は、ここに集まつたかと思われるほどでした。近代の光は、まずここからかがやきそめたといわれます。中でも、ダンテの美しい、花やかな、あかるい詩が、最も人々をひきつけました。かれの代表的な、きわめてすぐれた長い詩は、有名な「神曲」であります。これは、キリスト教徒のまじめな、信心深い生活と、人間の愛と同情とをほめたたえたものでした。これまでの中世の人々は、くらく、じみな、みじめな生活が、ほんとうの生活のように思つていたので、ダンテの詩ができた頃から、明るく、元氣よく、

力強く、愉快で、お互に愛しあい、助けあうことが、一ばん大切だと、氣づくようになりしました。このサン・フランシスコの神の愛と、ダンテの人間の愛とから、近代のよろこびである文明がひろがったのです。これを、人文主義ヒューマンイズムのはじまりとし、またルネッサンスのおこりとします。



第1圖 ダンテ

2 三人の畫家

イタリヤのルネッサンス文明は、第十五、六世紀の頃、美術の上に、春の花がばつとさきそろうように、あらわれました。ダンテと同じ頃、フィレンツェに、ジョットー（一二七六一—一三三七）というすぐれた畫家がありました。ダンテの友人で、かれの肖像をかいています。ことに、アッシジのお寺の、サン・フランシスコ傳をかいた壁畫が、最も有名です。文學には、ダンテののち、ペトラルカ（一三〇四—一三七四）と、弟子のボッカチオ（一三一三—一三七五）とが、古代のローマ、ギリシャ藝術を研究して、人文主義を發展させました。これによつて、動きのある、自由で、ありのままの、いきいきとした近代の詩や小説がひらけました。美術は、彫刻もありましたが、繪畫がさかんでありました。ジョットーののち、畫家にフラ・アンジェリコ（一三八七—一四五五）、ボッチチェリ（一四四〇—一五一〇）などの、すぐれた人々がたくさんありました。中にも、ルネッサンスの三大畫家といわれるレオナルド・ダ・ヴィンチ（一四五二—一五一九）、ミカエル・アンジェロ（一四七二—一五六四）、ラファエル（一四八三—一五二〇）がありました。彫刻家には、ドナテルロ（一三八六—一四六六）と、このミカエル・アンジェロが最も知られます。いずれも、第十五世紀の末頃から、つぎの世紀のはじめ、花やかなしごとをしました。

レオナルド・ダ・ヴィンチはイタリヤのヴィンチで生まれました。この人は、ただの畫家でなく、音楽も、詩も、彫刻もうまく、數學、物理學にもすぐれて、都市を防ぐ城をきすいたり、大砲を發明したり、いろんな興味をもっていました。器械の考案はかれの最もとくいとするところで、五百年も昔、飛行機の發明にたいへん苦心をしました。ついにできあがらなかつたけれど、すでに考えていたことは、驚くべきであります。かれののこした一ばんすぐれたものは、畫であります。數は、多くのこりませんが、「最後の晚餐」、「モナ・リザ・ジョコンダ」などは、不朽の傑作であります。「最後の晚餐」は、ミラノの、あるお寺の食堂の壁に、五年もかかつてかいた苦心の作です。キリストが、十二人のお弟子（使徒）と共に、旅の宿で、夕飯をたべている圖です。この時、十二使徒にまじつている、イスカリオテのユダが、キリストをにくむ者からお金をもらつて、しばらせる約束をしていました。この夕飯を最後にして、キリストはしばられ、間もなく十字架にかけられました。

ミカエル・アンジェロは、九十歳までも、たいへん長いきをした人でした。かれは、大きな畫だの、彫刻だのをのこしています。ローマのサン・ペテロ（聖ピエトロ）大寺にある、ヴァティカンという法皇宮殿のシステムン禮拜堂の天井と壁とに、大きな畫をかきました。天井畫は十三

年かかり、壁畫は七年かかりました。いずれも、おおぜいの人間を、大きく、いきいきと、かいてあります。キリスト、その外、聖書（新約全書と舊約全書と）のおもなことがらをかいてあります。こんなに大きくて、こんなに勢いのよい畫をかいた人は、外にありません。かれは、かきはじめると夜もひるもつすけて、手を休める間がないくらいでした。天井畫をかく時は、高い梯子の上に板をのせてのり、片手に畫筆をもち、片手に聖書をよみながら、口には畫飯のパンと水とを含んで、働いたとのことです。また、かれは畫家であるよりも彫家でありましたから、多くのすぐれた大理石の大彫刻をのこします。外の彫刻家は、まず粘土で原型をつくつてから、それを手本にして、石とかブロンズ（青銅）とかに、うつして造りますが、かれは、いきなり、堅い石をすんすん彫つていくのでした。畫でも彫刻でも、力のあふれた勢いにみちたものです。かれも畫と彫刻だけでなく、建築もやるし、詩もつくりました。この頃の藝術家は、すべてに通じて、みなすぐれていたのです。

ラファエルも、すぐれた畫家でした。かれら三人は同じ頃のイタリヤにいました。ミカエル・アンジェロとラファエルとは、畫で競技をしました。かれのかいたマドンナの畫には、美しいものがたくさんあります。マドンナとはもとイタリヤ語で、「奥さま」ということですが、ここで

は、幼ないキリストを抱いた母マリヤのすがたです。この時代に一ばん多くかかれたのは、マドンナの畫です。ラファエルのは、母と子との愛を、最もやわらかく、ふくよかにあらわしています。ドイツのドレスデン畫堂に、かれのシステイン・マドンナといわれる傑作は、一室に、この畫だけを、ほんもののマドンナのように、うやうやしく飾つてあります。ラファエルは若くて死にましたが、多くの畫が、ヨーロッパ、アメリカの美術館などにあります。

3 キリスト教徒の争い

イタリヤ・ルネッサンスにつづいてフランドル（今のオランダ、ベルギー）、ドイツなどでも、美術や文學の、近代精神がさかんになりました。その頃、人の心のもとには、キリスト教がありました。それも、サン・フランシスコの教などから、愛をもととする人文主義がさかんとなり、そのため、宗教にもたいへんな變化がありました。十字軍のように、キリスト教がイスラム教などに對してでなく、同じキリスト教で争いました。これまでの考え方の人々と、新しい愛と自由との考え方の人々とが、戦争をはじめたのです。宗教戦争といえます。宗教は、人間にほんとうのことを教え、人間を救うものであります。キリスト教は、「神は愛である」と、となえたのが、

お互のにくみあいとなり、戦争となつたのです。その頃、オランダのエラスムスなど、キリスト教の人文主義をとなえ、わけてマルティン・ルーテル（ルッター）（一四八三—一五四六）が、思いきつた宗教改革の運動をおこしたのです。

キリスト教で、キリストの代理のように尊敬される人が、イタリアのローマにいます。法皇（ポポロ）といひます。その頃の法皇は、レオ十世でした。かれはローマのサン・ペテロ大寺を新しく建て直し、世界最大、最美の寺にしようとしました。この寺は、もともとサン・ペテロという、キリストの弟子で、殉教者となつた人が十字架にかけられたあとへ、ローマ帝國最初のキリスト教皇帝、コンスタンティヌスが建てたものです。キリストのことばに、「この岩の上に、われはわが寺を建てる」とあります。その「岩」のことを、ラテン語で「ペテロ」といふのです。今、レオ十世の命令で、この



第2圖 サン・ペテロ大寺（ローマ）

寺を建てなおすことになり、ラファエル、ミカエル・アンジェロも働きました。ローマにいくと高い高い半圓形の屋根（ドーム）が、どこからでも見えます。これが、サン・ペテロ大寺の大屋根です。もとミカエル・アンジェロが考案したもので、うしろの、ヴァチカン宮殿には、かれのシスティン禮拜堂の天井畫や壁畫もあります。この大寺と宮殿は、法皇の領として、イタリアと別な獨立國になつています。

ここに一つの問題がおこりました。こんな大きな、美しい寺を造るには、たいへんな費用がかかります。ローマはもとより、イタリア半島をすつかり賣つても、費用の何分の一にしかならぬほどです。法皇は、ヨーロッパのすべての人に、この費用の寄附を命令しました。ヨーロッパ人の大多數は、キリスト教徒ですから、いやでもおうでも、寄附をしなくてはなりません。しかし、その頃の人民は、各地の王や貴族などに、すいぶんいじめられ、たいへん困つていました。寄附などをするわけにいきません。けれども、法皇は、いろいろな名をつけて、貧しい人たちに寄附をさせようとしています。もし、しなければ、いじめられて、いきていられないひどい目にあわされます。それで、みな、途方にくれてしまいました。

すると、ドイツのサクソニヤ大學の、キリスト教の先生に、マルティン・ルーテルという坊さ



第3圖 ルーテル

しました。しかし、ルーテルは、あべこべに、その命令の手紙を破いて、焼きすてました。ルーテルの意見をきいて、賛成する者が、ドイツはもちろん、オランダ、イギリスにも、たくさんできました。人々は、ほんとうのキリスト教徒は、「無法な法皇にしたがつてはならぬ。じぶんたち、正しい者の集まる別なキリスト教會をつくるべきだ」となえました。キリストの教は、法皇のからだや、サン・ペテロ大寺にあるのではなく、キリストのことばと、その精神とにあるのだと、信じたからであります。

そういう意見がさかんになると、法皇はますます腹をたてました。スペイン王チャールス五世にたのんで、ルーテルをこらしめようと思いました。スペイン王は、きわめて信仰のあつい法皇信者で、またスペイン、ドイツ、オーストリアの、最も勢の強い皇帝であつたのです。

チャールス五世は、ルーテルに、「ヴォルムスまで来い」といいました。ルーテルは、「いじめないならば行こう」と答えてあいました。皇帝はかれに、「今までの考えをすてて、法皇におわびをしろ」と命じました。しかし、ルーテルは、ききませんでした。皇帝の味方の、ある國王は、「ルーテルのような悪い者は、金の棒にのせて焼殺してしまえ！」とさげびました。その頃、宗教上の意見のちがいで、焼き殺された者が多かつたのです。しかし皇帝は、約束を守つて、ルーテルを、いじめませんでした。ルーテルはそれから長い間、ドイツのある城にかくれていました。外に出ると、だれに殺されるかわからないからです。その間に、ルーテルの正しい考は、ヨーロッパの大部分にひろがりました。ついに、キリスト教は、二つに分れました。一つは、もともとおり法皇をいただく考え。これをカトリック教(天王教)、また舊教といえます。もう一つは、ルーテルの派です。これをプロテスタント教、また新教といえます。(新教は、のちいくつもの派に分れました。またこの兩派の外に、前に東ローマ帝國のギリシヤ教(また正教)派があり、おもに東ヨーロッパ

にひろまりました。

ルーテル以来、數百年の間、二つの宗派の争いがつずき、しばしばはげしい戦になりました。ただ宗教上ばかりでなく、國と國、また國王や法皇の、政治上いろいろなわけからでした。この争いの間に、キリスト教は兩派とも、ますます發達しました。世界各國民の心の、よりどころとなりました。日本へも約百年前、舊教に屬するイエスイト派（耶蘇會）により、キリスト教が傳わりました。

4 シェイクスピア

第十六世紀にも、宗教の争いはつずきました。中にもイギリスではげしかつたのです。イギリスはヨーロッパ西北の島國で、大陸のフランスとドーヴァー海峡をへだてます。イングランドとスコットランドとの二部から成つた、一つの島と、アイルランド島との、二大島です。古代ローマ植民地で、早くからアングロ・サクソン民族がいました。第九世紀のはじめ統一され、よくおさまつていました。第十一世紀の頃、スカンディナヴィヤ半島からきた、ノルマン人に征服されました。この頃から、イギリス國とイギリス語（英語）とが定まりました。しかし、第十三世紀に



第4圖 シェイクスピア

國王がうまくおさめなかつたので、坊さんや貴族が、王にせまり、人民に相談せずには租税をとつたり、人民を罪にしたりすることをやめる法律を定めさせました（一二一五）。有名なマグナ・カルタ（大憲章）です。イギリスの憲法のもとで、世界最初の憲法は、これです。この時からイギリスは民主主義の形をとり、立憲國となりました。貴族の外、州や市の代議士を召集して、國會を開きました（一二六五）。イギリス國會のはじめ、世界國會のはじめです。これによつて、王、貴族がかつてに専制政治を行わなくなり、憲法による民主政治が、はじまつたのです。

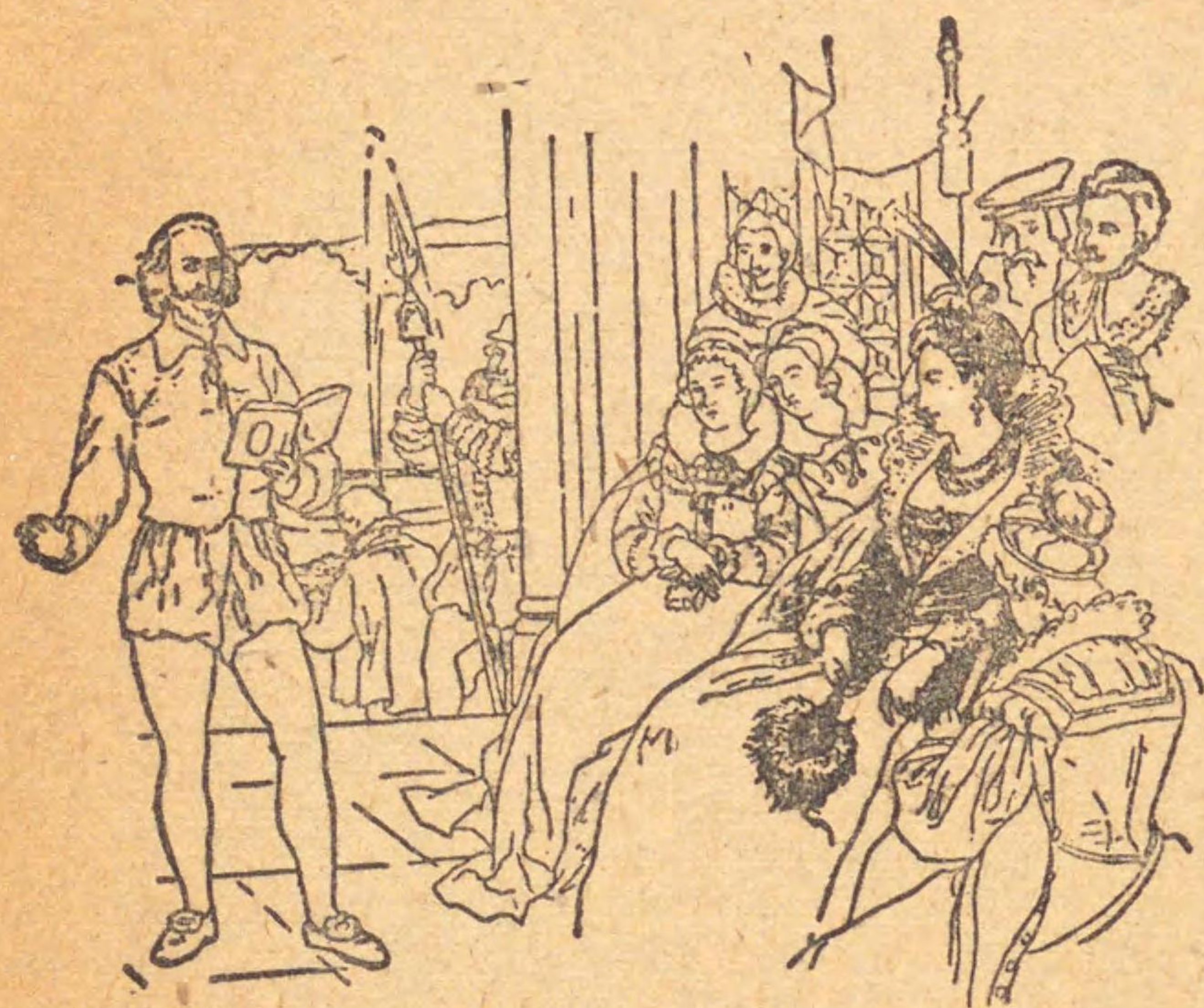
第十五世紀の中頃から、ランカスター家とヨーク家と二派に分れ、貴族も二派に分れ、三十餘年も、内亂がつずきました。ヨーク家は白ばら、ランカスター家は赤ばらを、しるしに用いたので、「ばら戦争」といいます。この戦のため、貴族の力が弱まり、國王の中央集權政治になりました。

そこへまた第十六世紀頃、新教、舊教の争いでごたごたしました。エリザベス女王（一五五八—一六〇三）

の時、やつとしすまりました。その頃、スペイン（イスパニヤ）は、たいへん強い無敵艦隊をもつてイギリスを攻めました。これを破りました。そのため、イギリスは海の上でいばつていたイスパニヤにかわり、海上権をにぎり、インド、アメリカまで、さかんに活動しました。ついに、世界至るところに、船で商業をいとなみ、また、廣大な植民地をえました。それによつて、ヨーロッパの文明は、地球のあらゆるところへひろがりました。

エリザベス女王の頃、イギリスはすんすんさかになり、富みました。文明が大いに高まりました。文學、哲學がさかんで、詩人のスペンサー（一五五二）、哲學者のフランシス・ベーコン（一五六一）などありました。中にも、シェイクスピア（一五六一）は、イギリス文學上、最も有名であります。かれは政治家でも、軍人でも、宗教家でもありません。芝居の脚本をかいて、世界一とされる大文豪であります。脚本とは、芝居の、登場人物のセリフ、シグサなどをかいたものです。讀物でもありません。

シェイクスピアは、ストラットフォード・オン・エヴオンという、いなかの町に生まれました。父はまじしい人で、教育もなく、じぶんの名さえかけませんでした。かれも、六年間、いなかの小學校へ行つただけの、いたすら少年でありました。青年になつて、都のロンドンに出て働いてい



第5圖 エリザベス女王の前で自分の脚本を讀む
シェイクスピア

るうちに、芝居を見に行く人の馬や馬車のせわをはじめました。じぶんもだんだん芝居がおもしろくなつて、舞臺でつまらぬ俳優になりました。しかしどうしてもうまくつとまりません。すぐやめました。その頃、イギリスの芝居は幼稚で、「かきわり」（背景）もなかつたのです。森の景色をあらわすかわりに、「このところ森」と紙にかいてはつたり、家ならば「何となく家です」と説明をしてありました。三百年前のことで、日本の芝居もその程度でした。

シェイクスピアは、芝居をやめてから、古い脚本の書きなおしなどをやつていました。それがなかなかうまくつたので、こんどはじぶんで脚本をかき、芝居にしました。それがたいへん評判よく、それからつづいてさかんにかきました。いつもよろこばれました。

シェイクスピアは、學校であまり學ばなかつたけれども、たくさん本を讀み、いろいろなことを知つていました。古い歴史のことは、どんな學者も及ばないほど知つたし、法律や醫學にもくわしかつたそうです。また非常に多くのことを知つて、じようすにつかいました。かれの有名な脚本はたくさんあります。中でも「ハムレット」、「ヴェニス商人」、「ロメオとジュリエット」、「ジュリアス・シーザー」などがあります。エリザベス女王は、芝居や文學がだい好きで、時々シェイクスピアを招いて、面白い脚本を讀ませたそうです。芝居が發達したのは、シェイクスピアなどによります。かれの住んだ家は、今もイギリスの名所になつています。

5 魔法の針

これまで、精神文明の話をしました。しかし近代で、最も進歩したのは、物質文明です。産業、經濟、科學などの文明です。原始人は、穴熊と一しよに岩穴に住んだり、木の上で、鳥の巢

のようにしていました。はだか、生の物をたべ、石の道具で獸をとりました。外のことは、あまりできなかつたのです。車もなければ、字もかけなかつたのです。北ヨーロッパが、二千年前までそうでした。ところが、近代になるにつれて、十字軍などから、西アジア、遠く中國にあつた、いろいろな物質文明が入つてきました。ことに、近代のはじめの三大發明があります。それは磁石、火藥、印刷術であります。西洋のヨーロッパ文明と同じように、東洋の中國、インドなどにも早くからすぐれた發明がありました。中國では、四千年も昔から、字もあつたし、銅や鐵の道具もつかつたし、文學や美術も發達しました。インドでも同じでありました。物質文明も早く進んでいました。西洋の國々とも、ずつと前からゆききをしました。一千五、六百年前、中國でできた絹の織物を、東ローマ帝國の都ビザンツ（コンスタンティノープル）にもちかえりました。これを見た皇帝は、「銀のようにかがやき、雲のように白くて軽く、しかもどんな色にでも美しく染まる、不思議な糸だ」と、よろこびました。わざわざ遠い中國までつかいをやつて、絹の糸を口から吐きだす蠶の虫をとりよせ、養蠶をさせました。今より六百年ばかり前、イタリアのヴェネツィヤにマルコ・ポーロという人がありました。中國に旅行して皇帝の役人となり、のち二十年ばかりして、ヨーロッパにかえり、東洋のいろいろなめずらしい話を、たくさん語りつたえまし

た。その頃の中國やインドは、ヨーロッパよりも文明が進んでいました。不思議な機械、美しい織物、きれいな器が、たくさんあつて、それを見ると、西洋の人々はびつくりしたものです。

そのうち、最も不思議なのは、磁石でした。これは長さ一、二センチの、細い、まつくろい、平べつたい針のようなものでした。それを指のさきにのせたり、箸のさきにおいたりすると、どんなにしても、針がきつと南と北とに向きます。これを小箱に入れて、たいへん不思議なものとなりました。しかし、磁石は、中國では、三千年も昔からありました。これを利用して「指南車」という、南と北とに向く車をつくつていました。中國の人は、この車にのつていけば、廣い野原を行つても、まようことはありませんでした。ヨーロッパではこの針が、たいへんな助けをあたえました。この針をつけた器械を大船にそなえつけ、南北をさすことによつて、めあてのない大海を航して、世界のどこへでも渡りました。おかげで、これまで知られなかつた新しい大陸さえ発見されたのです。それまでも、大船を造つて、地中海とか、イギリス、オランダ、スペインの海をわたることはできたが、遠い海のあなたに航すると、陸地も山も見えないインド洋、大西洋の航海はむずかしかつたのです。それが、この磁石によると、方角がたしかに定まつて、どこまでも航海できるようになりました。しかし、こんな便利なものも、はじめは、これをもつてい

と船が沈むなどと、つかうことをきらいました。ところがこれで世界の海が自由に行け、新大陸も発見されたのですから、文明の上の大きいできごとでありました。

磁石は、なぜいつも南と北とをさすのでしょうか？ これは地球にある磁氣のはたらきです。磁化された鐵片は常に南北を指すからであります。

6 火薬のばくはつ

同じ頃、もう一つ新發明がありました。それは火薬です。火薬は非常に強い力で、鐵砲や大砲のたまを打ち出す薬です。この火薬の發明ができてから、戦争のしかたが、まつたくかわりました。そのため、戦争はだんだん大じかけとなりました。近代戦争は、驚くべき規模となりました。數百萬というおおぜいの人間が、陸、海、空で戦うようになりました。戦争は文明の敵であります。けれども、大戦争をすると、だんだん戦争はむずかしくなります。これからは戦争はありますまい。だから、平和となるのも、火薬の發明のおかげだといわれます。

西洋でも、戦争には、石器時代やエジプトやまたギリシヤ時代も、中世も近代の初めも、近くによつて刀で斬り、やりでつきあう。はなれていれば弓矢で戦う。その外にはあまり戦争のしか

たはなかつたのであります。ところでここに火薬ができて、それを細長い金属の筒につめこみ、そこを金属の弾丸でふさぎ、そのそばをつよくはげしく打つと、非常な勢でその火薬が爆發した力で、弾丸が筒から、ずつと遠くへ飛んでいつて、ぶちあたつたものを突き通したり、破壊したりする、おそろしい器械が考へだされました。これが鐵砲、小銃、また大砲などの發明なのであります。そうになると、もうこれまでの中世の、石を積みあげた城や、それをめぐらした濠などは、何のやくにもたたなくなりまして。小銃でねらつて打つたなら、數百メートル、數千メートルの遠くの人でも、ころりとたおされるし、かたい石の塀でも、大砲一發でがらがらとくずれてしまいます。だからもうあの騎士の着ていた重いよろい・かぶとも、手にもつたたても刀ややりも、やくにたたないのです。おまけにこの火薬の非常に強い力を利用して、飛行機から投げ落す爆彈ができました。ついに最近では原子力という、これまでまつたく人間の知らなかつた宇宙の力、それはそれは電氣や火薬よりも、はるかに強力な力を利用した原子爆彈までできたのです。

さて、このおそろしい、文明の敵であると共に、文明にみちびくものでもある火薬は、やはりマルコ・ポーロが中國からもちかへつたといわれます。しかしまたイギリスの坊さんで哲學者、科學者のロージャー・ベーコン(一二二四?—一二九四)が發明したともいわれます。この坊さんは、磁石と

か火薬とか、いろんなことを知つていたので、魔法つかいだとして、ずいぶん皆からにくまれてました。今ならば大科學者、大發明家として、名譽をえたのですが、その頃の人は「かれはあまり多くのことを知りすぎています。神さまだけが知つていればよいことまでも知つています。いや、惡魔だけの知つていることさえも知つています」といいました。なるほど、戦争にやくだつような火薬の發明などは、惡魔の知つていべきことを、ベーコンは知つたのだとも思われますね。

また、火薬はドイツの化學者のシュワルツという人が發明したものだともいいます。ある日のこと、シュワルツは、じぶんのへやで、鐵の皿のなかでいろんな薬をまぜ合せて、化學の實驗をしていきますと、いきなりその薬が爆發しまして、天井と屋根とをつきぬいて、たいへんなことになりました。さいわいにシュワルツは助かりましたが、それと共にびつくりしました。「これは何という強い薬だろう！」と。そこでかれはすぐ考えました。「この強い力で鐵砲を打つたらば、すばらしいにちがない」と。それから長い間苦心をして、ついに火薬による鐵砲を發明しました。これが、世界に鐵砲のできた最初だとのこと。むろん、シュワルツは、この鐵砲がのちにたいへんおそろしい人殺し道具になろうとは思いませんでした。せいぜい鳥や獸をとるのに便利な道具を發明したと思つてよろこんだのでしよう。それがまことにおそろしい大砲や

爆弾のもとになつたのだからたまりません。ある人は、あの時シュワルツが爆発のために死んでしまつたなら、火薬を發明する者もなく、大戦争もできず、世の中はどんなに平和で、人間はみな幸福であつたかしれないと、残念がります。

皆さん、火薬や原子爆弾の發明は、文明のためによいことでしたか、わるいことでしたか？よく考えてください。

7 しばられた本

皆さんのお室の中にあり、一ばんおもしろかつたり、ためになつたりするものは何ですか？それは本（書籍）や雑誌や新聞紙でしょう。こんなものは、すべて印刷物といわれて、紙に活字や版で、いろんな字（文字）や畫などを印刷してつくつてあります。今の時代は印刷の時代といわれるほどに、毎日毎日できる印刷物は、まことにたいへんなものです。日本でも、一つの新聞紙で、毎日百萬以上賣れるのが幾つもあります。世界じゆうで一日に印刷する新聞紙だけでも、數億枚、または世界じゆうの人間の數と同じように二十億枚もあるかもしれません。その外、あらゆる種類の書籍や雑誌などの數量は、どんなに多いことでしょう。これらはみな印刷の機械で

つくられたものです。

ところが、今から四、五百年の昔までは、印刷機械はなかつたので、書物はみな一字一字手でかくし、挿繪などもていねいに手でかいたものです。木や石に版を彫り、それに紙を刷つて文字や畫の刷物とか本とかを造ることは、中國にはもつと早く、一千年以上も昔からありました。日



第6圖 ゲーテンベルヒの印刷機

本にも一千數百年ぐらい昔の木版印刷がのこつています。しかし西洋の中世では、そんなものさえあまり行われていません。そこで、前にも話したように、中世の文明のあつたキリスト教のお寺の坊さんたちは、一冊の本をつくるのに、何人もが、何年もかかつてかいたのです。だから、少年少女たちが本をもつことなどはとてもできませんでした。キリスト教で一ばん大切な聖書も、きわめてめずらしいものでした。大きなお寺にでも行かなくては、見ることもできなかつたのです。

それで、おもしろいお話があります。「キリスト教の寺で、いつもしばらくりつけられているものは何か？」その答は「聖書」でありました。しかもまた「一ばんぬすまれるものは何か？」その答は「これも聖書」でありました。なぜでしょうか？　いうまでもなくこれが何より大切な本で、またたれでもほしい本だからであります。しかもキリストはこの聖書のなかに「しばつたりすることはいけない。ぬすみすることはいけない」と、かたく教えているのであります。

ところが、第十五世紀の中頃、あのミカエル・アンジェロたちが、イタリアのルネッサンス時代に、すばらしい畫や彫刻をやつていた頃のことです。ドイツのライプツィヒというところに、グーテンベルヒという人がいました。かれは、その時に行われた、木や金屬の板になつた版で、刷りものをつくることをしごとにし、またその刷つた紙で本をつくつていました。しかしそれを一枚ずつ版に彫つて刷つたのでは、たいへん時間がかかり、一年に一つの種類の本を印刷してつくるのもなかなかむすかしかつたのです。そこで、この人は、いろいろ考えたのち、文字を一字ずつ木に彫つて、小さい四角な一字の版をたくさんつくりました。たくさんといつても、西洋のローマ字の数は三十ばかり、それに數字が九つ、その外、少しばかりの版の種類があればよいのです。その四角な一字版を活字といひます。その活字版を文句のとおり組み合せてなれば、こ

れにインキをぬりつけて、上から紙をおいて印刷することを發明しました。これを活版印刷といひます。この方法によつて、グーテンベルヒは活版印刷に、よくわすかな時間で、たくさん印刷をすることに成功しました。

こう話すと、何でもないことのようにですが、しかしこの活字と活版印刷とを發明したことは、文明の上に、たいへんな大發明でありました。これに成功したから、はじめてどんな文句のものでも、活字を自由自在にすぐ組み合せて、印刷することができるようになり、また數百、數千、數萬の、同じ本や新聞紙を、一日のうち印刷することもできるのです。一日に數百萬枚の新聞紙を刷るためには、電光印刷機などといつて、目にもとまらぬ速さで、一分間に數千枚も刷れるすばらしい機械さえあります。そのために、これまでは、ダイヤモンドやルビーのように高價なものであつた本が、パンや牛乳のようにやすくなつて、たれにでも買われ、持たれ、讀まれるようになりました。そしてそのために、すべての人間はみな字をよむことができ、その字によつてあらゆる文明を傳えられ、何でも知ることができるようになりました。これまでは、シェイクスピアのお父さんさえ、字を知らなかつたのです。いや、人間の大部分が、字を知らなかつたのです。それを知つている者は、百人に一人もなかつたのです。まして學問をした人は一萬人に一人

もいなかつたのです。むろん、少年少女の讀む本や雑誌などありませんでした。學校でつかう教科書でさえ、十人ぐらいで一冊を讀むか、みんなが書き寫して、じぶんで造るかする外はなかつたのです。ところがこの活版印刷の發明によつて、人間は一人のこらす文字を知り、自由にどこでもあらゆる本が讀まれ、またその本を讀んで、たれでも學問をなし、學者になることができるとなつたのです。考へてごらん下さい。われわれ人間は、パンや牛乳やご飯がなくては生きていられないように、印刷した本などがなくては、發明も發見もあらゆる文明も進みません。近代文明の進歩のために、これほど助けになつたものはありません。ある人は、印刷術の發明によつて、古い時代と新しい時代とが分れるとさえいつています。

8 コロンブス

みなさんは、いろいろなおもしろい冒険や、めずらしい知らぬところへ旅行をしたことをかいた本を讀むのが好きでしょう。四、五百年前のヨーロッパの少年少女たちも、それがだい好きでした。中にも、マルコ・ポーロが中國に旅行をしたことをかいた本を、何よりもよろこんで讀みました。グーテンベルヒが發明した活版印刷機械でできた最初の本の中にも、このマルコ・ポーロ

の旅行記がありました。

そのマルコ・ポーロ旅行記が好きであつた多くの少年の中に、マルコ・ポーロと同じイタリアのジュノア（ジュネーヴ）というところに、一人のかしこい少年がいました。その名はクリストファー・コロンブス（一四四五？—一五〇六）といました。

コロンブスの生れたジュノアは、その頃の有名な繁昌した港で、朝も夜も、遠くへ航海する多くの大きな船が出たり入つたりしていました。少年のコロンブスは、これらの船が、港から出て遠くかすかに、だんだんはなれてついに消えたように見えなくなるまで、じつとながめて、あと



第7圖 コロンブス

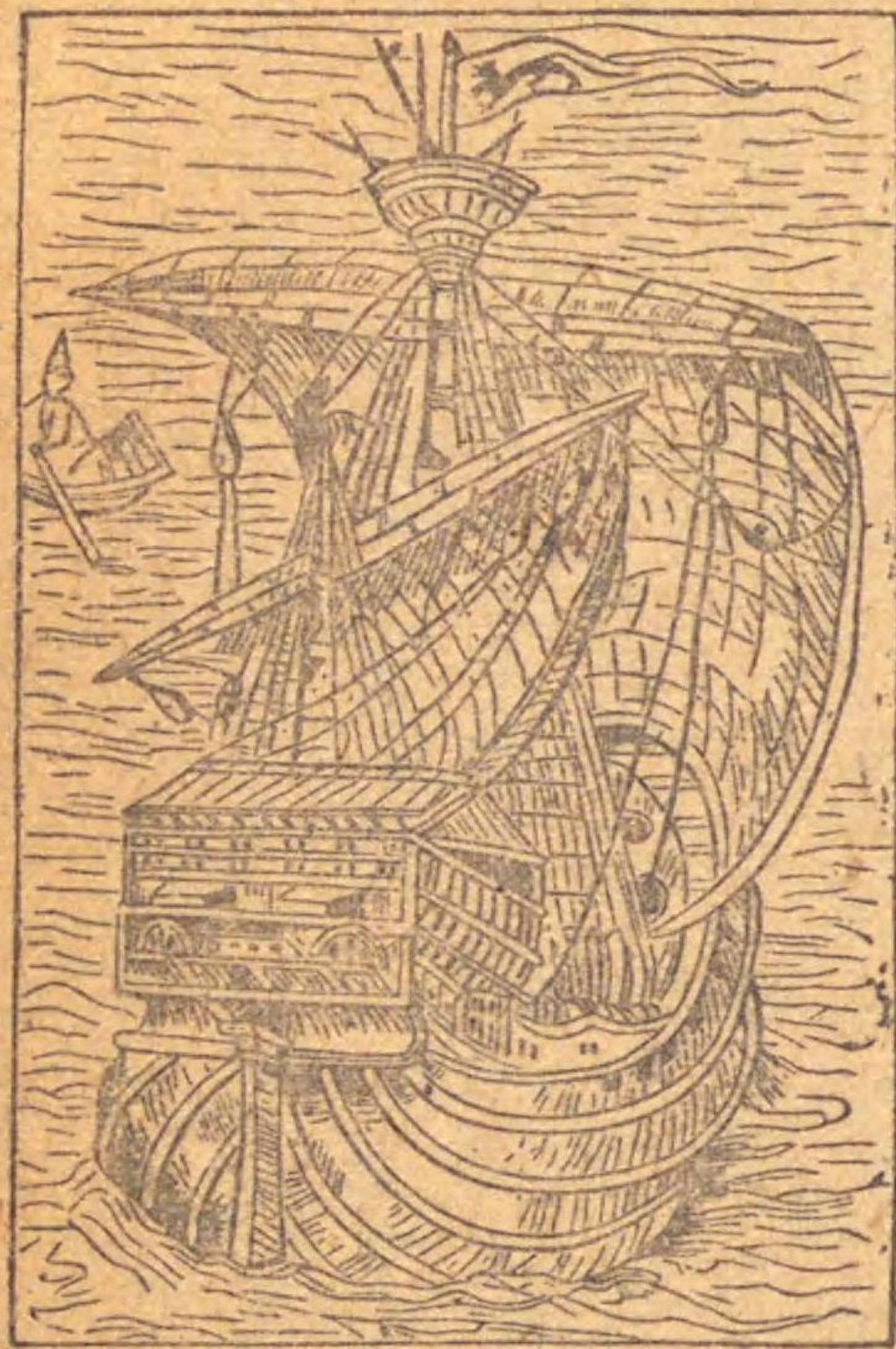
は一人で考へこんでいることがよくありました。かれは思いました。「あの船は、この地中海をすつと西に進み、スペインとアフリカとの間のジブラルタル海峡から、広い大西洋の大海に出で、波から波がどこまでもつづく上を、すすすと西に進む。そして、あのマルコ・ポーロの本にあるように、ジパングの國に行くのだ。ぼくもぜひ行きたいな。」と。それはマルコ・ポーロの本に、

中國の東にジバングの國がある。その國には、珊瑚の柱をたて、黄金の瓦を屋根にしてある宮殿などが、きらきらかがやいている。そしてやわらかい、美しい絹の織物だの、花のようにりつばな飾り物だのがみちみちている、とかいてあるからです。このジバングの國とは、日本のことであつたのだそうです。マルコ・ポーロは日本をそんなに思つていたのです。そこで、少年コロンプスは、何とかしてあんな大きな船にのつて、このジバングに行き、浦島太郎のように、たくさんのお宝物を、船に一ぱい積んでかえりたいものだ、と、空想にふけていました。

かれは、とうとうこの空想を実現する機会をえました。まだ十四歳の少年の時でした。かれはある大船のボーイになることができました。それからのち、かれはすつと船に乗つて、いろいろな國々をめぐりました。しかし、どこにも、かれの思つているジバングの國のような、寶物のたくさんある、美しいところは、まだありませんでした。

ところが、その頃、一つの新しい議論がおこりました。それは、これまで、この地球というものは、一つの平つたい廣い板のようなものだと思われていたのに、實際はそうでなく、球のような圓いものだという説です。昔のギリシヤ人の中にも、すでにそう思つた者もありましたが、この時代になり、もつとこれを證據だてて、新しく議論されだしたのです。そこで、コロンプスは

考えました。マルコ・ポーロなどは、これまで東に向つてインドに出で、それから中國に行き、ジバングのことも知つたのだが、これと反對に、ヨーロッパからすすん西に向つて進めば、インドに行つて、それからヨーロッパにぐるりと廻つて歸られるものと考えたのです。それでかれはあう人ごとに、その話をしましたが、たれ一人としてまじめに賛成してくれる人はありませんでした。しかしかれは、何とかして、この考えを試みたくてたまりません。けれども、かれはただの船乗で、とてもそんな長い航海をする力などはありません。困つてしまいました。いろいろ



第8圖 コロンブスの頃の大船

考えたのち、ヨーロッパの西北の隅、イスパニヤの西にあるポルトガルの國に行つて、そこいらんな人々を説きつけました。ポルトガルは、その頃最も航海の發達した國の一つで、ことにその王は、海上の冒險に熱心であるときいていたからです。ところが、コロンプスは、その王にいますと、王は

初めから、かれをばか者あつかいをして、相手にしてくれませんか。コロンブスはがっかりしました。しかし、それであきらめるかれではありませんでした。かれはつぎに、お隣りのイスパニヤ（スペイン）の國に行きました。そこにはフェディナンド王と、その妃のイサベラとがいました。その頃、王は、この國のここかしこにのこつたイスラム回教徒をなくするため、たいへん忙しくて、とてもコロンブスの夢のような話をきいているひまはありませんでした。が、ふと、かれのことを耳にしたイサベラは、うつとりさせるたいへんおもしろいおとぎ話でも聞いているように、よろこびました。そしていそいで使をやつて、コロンブスをよびよせて、かれに会いませう。とうとう「よろしい。船や人の費用はすつかりわたしがもつから、このしごとをぜひやつてごらんさい。もし費用が足りなくなつたら、わたしの寶石をみんな賣つてもよろしい」といきました。

9 アメリカ發見

イスパニヤ王の妃イサベラのことばをきいたコロンブスは、まつたく天にのぼれたようによろこびました。かれはさつそく、イサベラから受け取つたかねで、三隻の大船をかいました。ニニ

ヤ、ピンタ、サンタ・マリヤというのが、その船の名でありました。それらは大船といつても、今の數萬トンもある、遠洋航海の汽船にくらべますと、まるでおもちゃのような小さな船で、これに乗つて冒険に出かけようなどとは思ひもよらぬ船でした。しかし、この頃としては、かなりな大船でした。それから、百人ばかりの船乗を集めて、これに乗せまして、いよいよイパニヤのバロスの港から船出をしました。むろん、コロンブスは、この船隊の長として、一しよに乗りました。

三つの船は、コロンブスのさしすにより、大西洋のあら波にゆられながら、太陽の沈む西へ西へと、すすん進みました。その頃は、まだ汽船はなかつたから、船に立てた幾本かの大きな帆柱に、たくさんの三角形の帆を張つて、風の吹くにまかせて進むのでした。初めのほどは、そこここに島が見えたり、翼の白い大きな鳥がやつてきて帆柱にとまつたりしましたが、二日、三日とたつうちに、そういうものはどこにも見えなくなつてしまいました。それでもコロンブスは、磁石をもつて、これをたよりにしていましたが、方角をまちがえずに、すすん西に進むことができました。四日、五日、六日とたちました。十日になりました。十幾日になりました。夜があけたかと思ふと日がくれて、その長い夜がまたきました。空を見あげるといつもと同じように

星がきらめき、あたりは果てのない波のひろがりばかりです。毎日、毎日、同じようなたいくつな日がつすきました。それだけでなく、大風がふいて、今にも船がひつくりかえりそうなこともあれば、雷や電で、ごうごうとなりはためき、とてもいきな心のしない時もありました。船乗たちは、おそろしがつてがたがたふるえていました。それでもコロンブスは、陸地の見える日をたのしみに、どんな夜でも、ほとんどねむりもしないで、いつも船の舵をにぎつて、じつと立つていました。

そうして、ひと月ばかり、波にゆられてすぎました。

もう三十日もたつのに、それでもなかなか陸地は見えずうにありません。コロンブスはいつまでもがまんをして、見えるのを待っています。船乗たちはそういうわけにいきません。だんだんあきてきました。いやになりました。くるしくなりました。そして、このままでは、いつまでたつても、海ばかりで、陸地のありそうに思われませんので、とうとう「もう、あとへひきかえそう」という者がでてきました。多くの船乗たちは、一日も早くあとへもどつた方がよいと思うようになりました。かれらは、かわるがわるコロンブスのところへやつてきて、「ひきかえそう」といいます。しかしコロンブスは、かれらのいうことをなかなかききません。ついに船乗たちは

一人のこらす、コロンブスのさしすにしたがわなくなりました。これにはさすがのコロンブスも困りました。やむをえず、「二、三日のうちには、きつと陸地が見える。もし見えなかつたら、ひきかえすことにしよう」と約束をしました。

けれども、それからまた十日もたつが、まだどこにも陸地らしいものは見えません。とうとう船乗たちは怒りました。そしてみんな相談をして、今度はコロンブスを海に投げこんで、それからイスパニヤにかえろうと決心をしました。

と、ちようどその日の夕方でした。一人の船乗は、木苺の實のついた木の枝が、海にただよっているのを見ました。「これは陸地にはえる木の實だ、どこかに陸地があるのだ！」とさげびました。まもなく鳥がとんできました。鳥！鳥！船乗たちは、聲をあげてよろこびました。鳥がくるくらいなら、近くに陸地があるにちがいない。すると、コロンブスを海に投げるといふ、その夜のことです。かれらがイスパニヤの港を出てから七十一日目に、ずつと遠くに、ちらちらと火が見えました。これだ！陸地の火だ。世の中に、かれらが見たこの火ほど、よろこびにわきたたせた火はないのでした。

夜があげました。とうとう、陸地が、かすかに見えました。それは一四九二年の十月十二日の

こと。その陸地に着くや、コロンブスは夢中で岸に走りあがると、あまりのうれしさに、目に見えぬ神さまの前にひざまずいたまま、涙にむせんで聲も出ませんでした。そして、かれはここにイスパニヤの國旗をたてました。

コロンブスは、ここが、かれの少年時代からのあこがれの、寶の國ジパング、つまり日本だと思いましたが、實際は、こここそ、これまで文明世界に知られていなかった、アメリカ大陸であつたのです。まことに、コロンブスは、こうして初めて新しい大陸を發見した、その人となつたのです。(のちにわかつたことですが、コロンブスの最初に上陸したところは、サンサルヴァドル島(ワトリング島)でありました。そこはアメリカ大陸の、北アメリカと南アメリカとの間の細長い陸地にかこまれた海上にある西インド諸島の一つです。だから、大陸そのものへ、まず上陸したではありません)

しかし、コロンブスは、その時いろいろ探しまわつたけれども、どこにもマルコ・ポーロの本にあるような、黄金と珊瑚との家もなければ、その外の寶物も見あたりませんでした。そのはずです。ここはわずかの土人の外、何もない新しい陸地なのです。それでもかれは、ここがジパングでないとしたなら、きつとインドだろうと思つていました。そこでかれのはじめてついた島の

あたりの島々を、西インド諸島といいます。

コロンブスは、せつかく新大陸を發見したけれども、がっかりしまして、その土人を數人つれて、もとのように船でイスパニヤにかえりました。かれはそれからのちも、三どまでアメリカ大陸の岸ぞいに探検しました。しかし最後までインドの一部だと思つて、ここがまつたく別な新大陸だとは氣づかなかつたそうです。ここがアメリカといわれるのは、それからのちに、やはりポルトガルの政府から航して南アメリカについたイタリヤ人のアメリゴ・ヴェスプッチという人の名によるのです。

とにかく、この新大陸こそ、ジパングではなかつたが、今では世界の寶庫です。鐵、石炭、石油、金、麥、綿、羊毛をはじめ、われわれの文明生活に最も必要ないろいろなものを、最も多く産するのはアメリカの諸國です。つまり合衆國、カナダ、メキシコ(以上、北アメリカ)、ブラジル、ペルー、チリ、アルゼンチン(以上、南アメリカ)などが、コロンブスからのち、つぎつぎに開かれました。それまでは、アレキサンダーでも、ケーザルでも、シャルマーニュでも、みんな、よその土地を奪い、そこに住む人を殺したりして、領地をひろげたのですが、コロンブスのみは、われわれ世界の人間のために、新しい世界を發見してくれました。そしてそこからわれ

われの文明のもとになるものを與えてくれたのです。しかもかれは、ただの船乗で、力も資本もなく、これだけの歴史上の大てがらをたてることができたのです。

なお、コロンブスと前後して、世界の新しい航路を発見したり、新大陸を探検したりして、近代世界文明の上に道を開いた人々が、たくさんありました。そのおもな人々は、

- 一、第十五世紀のはじめ、ポルトガルの航海者ヘンリー王子という人が、航海を奨励して、アフリカの西海岸を探検させました。
- 二、一四八六年、ジャスがアフリカの南端の喜望峯ケイプ・タウン・ポイントに達しました。
- 三、一四九八年、ヴァスコ・ダ・ガマが、ここをまわつてはじめてインドに達しました。
- 四、一四九七年、イタリアのカボットが、イギリス王の命により、北アメリカの東岸を探検しました。
- 五、一五〇〇年、ポルトガル人カブラルが、ブラジルに達しました。
- 六、一五二一年、イスパニヤ人コルテスが、メキシコの土人王國をほろぼしました。
- 七、一五三八年、イスパニヤ人ピザロは、ペルーの土人王國インカをほろぼしました。
- 八、一五一九―一五二二年、ポルトガル人マジェランは、イスパニヤ王の命で、南アメリカの

海岸を経て、その南端から太平洋を進み、フィリッピン群島を発見しました。かれはここで土民に殺されました。

- 九、一五二六年、マジェランの部下たちは、さらにインド洋からアフリカの南端を経て、イスパニヤにかえり、これによりはじめて世界一周を行いました。

これらの新航路や新大陸発見のため、ポルトガルとイスパニヤとは、世界で最もさかんな國になりました。

II 近世の文明(下)

1 國民の國をつくる

皆さん、これまで「くに」というものについて、いろんな場合のあることを知つたでしょう。たとえば、昔からの日本の例をあげますと、はじめの日本にはまだ「くに」はなかつたのです。それが千三、四百年ぐらい前からだんだん各地方に「國」がはつきりしてきました。そしてその國々に「かしら」(首長)のようなものができました。ついに「やまと朝」といわれる、今の皇室の祖先によつて統一され、だいたい「日本」という一つの國(國家)にまとまりました。それでも東北地方のアイヌ族は長い間、別な勢力をもち、その勢力は七、八百年までものこりました。それからのも封建時代になつて、日本という國家のかたまりつつある一方、そのうちに六十あまりの國があり、またその國の區劃とは別に大名(諸侯)がいて、ひとりで數國を領したり、一國內に幾人も大名があつたりしました。その状態が明治維新までつずき、諸國の制度が事實上失われたのは、やつと八十年前のことです。それでも、武藏國とか、山城國とか、名は今ものこつて、老人たちのあたまからは去りません。

西洋でも同じように、最初はどこでも原始共產體で、狩獵、遊牧、それから農業の段階を経るうちに、各部族、各地方の「かしら」(首長)が統率するようになり、ついにエジプト、バビロニヤ、アッシリヤ、ペルシヤなどに「國」のかたちが擴大統一され、國王によつて支配されるようになりました。しかし、ギリシヤのように、最後まで都市的小國家が群立し、ついにアレキサンダーの大帝國にあわせられたところもあります。ついでローマ帝國が大發展をすると、ヨーロッパの大部分と、アジア、アフリカの開けた部分をすつかり領地にします。「帝國」とは、それまで獨立した幾つもの國をあわせたりして、その上に皇帝があつて、國々を統治する場合をいいます。イギリスの皇帝はイングランドの國王で、大英帝國(グレート・ブリテン)の皇帝なのです。ローマ帝國が東と西とに分れて兩方の皇帝がありました。のち西ローマ帝國がくずれてからは、中世時代にシャルルマーニュ皇帝の國があつたり、それが三つに分れたり、いろんな民族だの、小國だのができたり、なくなつたりしました。その間に、百年戦争、宗教戦争、ばら戦争、三十年戦争などが、各地にあつてごたごたがつすきました。そして、第十六世紀頃から、だんだ

ん國家がはつきりしてくると共に、特別に強い國がいくつかできて、第十七、八世紀になると、イギリス、フランス、ロシア、オーストリアなどの強國ができました。これらを近代國家の形成といひまして、文明上、ことに政治上、重大なことがらです。

イギリスについては、しばしば話したが、エリザベス女王の時にさかんな國になつて、國のものが確立したのち、五十年ばかりで、この國にクロンウエル（一五九一—一六五八）という政治家があらわれました。その頃、イギリスでは、王と國民とたえず争いました。それは、エリザベス女王ののち、この女王のために、宗教上の争いから殺されたスコットランドの女王メリーの子ジェームズ一世が、スコットランド王で、イギリス（イングランド）王をかねました。その頃は、スコットランドはイングランドと一つの島でありながら、別な國でした。そこでイングランド（イギリス）の國民は、外國人の王をもちたくない、王の命令にしたがいませぬ。すると王は大に怒つて、「國王は神の代理だから、神と思つて、どんな命令にも従わねばならぬ」と、ますます國民をおさえつけました。ジェームズ一世のつぎに、その子のチャールズ一世も、王となると、やはり國民をいじめて、多くの税金をとつたりしました。國民はついにたまらなくなつて、「イギリスの政治は國王がするのではなくて、國民がするのだ、國民の代表の集まる國會がするのだ。國王は神の

代理でなくて、國民からの代理にすぎないのだ。このことはすでに、四百年前に定められた大憲章に、りつぱにかいてあるのだ」といひ張りました。そのため、ついに國民と國王との間に戦争となりました。

その時、國王の味方をしたのは、イギリスの貴族たちで、つまり貴族階級と人民階級との戦争となつたのです。そして貴族たちは長い口ひげを生やし、頭にかつらをかぶつて、縁の廣い帽子をいただき、馬にのつていばつていました。人民たちはおもにロンドン市民で、頭の髪を短く刈



第9圖 クロンウエル

つて、そまつな着物をきていました。この人民たちは、田舎から出た代議士のオリヴァー・クロンウエルにひきつれられて、貴族たちと戦いました。貴族たちは、じぶんらのぜいたくや、おごりのために、税金を人民から搾り取るために争うのだし、人民たちは、われわれの権利を主張し、自由になろうとするために戦うのだから、意氣ごみがちがいます。たちまち貴族軍はまけて、國王は牢屋につながれまし

た。間もなく人民の國會で宣告されて、首をきられてしまいました。そして「人民政權萬歳！」とさげびました。これは、一六四九年のことです。

クロンウェルは、人民から選ばれて國會議長となり、王政をやめて共和政治を宣言し、共和政府長官となりました。かれはまじめなキリスト教徒で、人民に對して厳格な正しい政治をしきましました。これまでみだれていたわるい風俗をすつかりなおし、人民の行いに注意すると共に、海軍の力をつよくして、オランダ、イスパニヤなどをおさえつけ、大いにイギリスの國威をかがやかしました。これによつて世界の海上權はイギリス人の手にうつり、イギリスは方々に植民地をもち、そこからイギリスの船でたくさんのお資を持ちかえり、ますます富み、強くなりました。また有名な詩人のジョン・ミルトン（一六〇八—一六七四）は、このクロンウェルの秘書でありました。

しかし、クロンウェルの政治は、あまりきびしすぎて、ゆとりがなかつたので、保守的な氣分の多いイギリス人民は、クロンウェルが死んで間もなく、じぶんたちで死刑にしたチャールズ一世の子のチャールズ二世をスコットランドから迎えて王にしました。この王は、すぐに、じぶんの父を殺したうらみで、クロンウェルの死體を、その墓から出して、そののどをしめ、首をきつたそうです。皆さん、この行いを、何と考えますか？

けれども、この王も人民をいじめたし、税金を多くとつたり、宗教上の争いをしたりしたので國會からしきりに反對されました。つぎの王は弟のジェームズ二世で、かれも人民や憲法のことを考えず、かえつて専制政治を行なおうとしたので、とうとう國會はこの王を追つばらつて、オランダからウィリヤム三世とその妃のメリーをむかえて王にしました。これをイギリスでは「名譽革命」といいます。この王は人民の權利をどこまでもたつとび、イギリス國は人民のための國であることを、法律ではつきりさせました。これを「權利の宣言書」といひまして、イギリスの民主主義はここにしつかりしました。

それからのち、イギリスでは、人民の權利が國會ですんずん發展しました。イギリスが近代から現代での一ばん文明の發達した國となり、また北アメリカのカナダ、オーストラリア（濠洲）、アフリカの各植民地をもち、最近まではインドをも領有し、（昨年、獨立しました）、大英帝國には太陽の沈む時がないといわれたのも、みなこうして、人民が權利を主張し、これを奪つた國王や貴族の手からとりもどして、われわれの力で國をりつぱにしたからであります。

つぎにフランス國の話。

フランスのあたりは、第八世紀の末頃から、シャルマーニュ（チャールズ）大帝の國でありましたが、その三人の子により國が三つに分れ、フランス地方は西フランク國といわれました。フランス國の名は第十一世紀のはじめ頃から定まりました。しかしまだ封建制度が強くて、人民の権利はあまりみとめられず、國內の諸侯がいばつて、王の力も弱かつたので、しばしばイギリスから攻められたりしました。ルイ九世（一二二六—一二七〇）が王となつてから、諸侯をおさえ國內の統一をはかり、大いに文明を進め、學問、藝術をおこしました。のちフィリップ四世（一二八五—一三二八）も王政をさかんにし、またはじめて國會を開き、人民に相談しました。しかし、第十四世紀の頃から百年戦争となり、フランス、イギリスの戦がつずき、しきりにフランス國內はイギリス軍のためあらされました。ついに一四五三年に長い戦争がおわると、フランスではイギリスの勢力を追いしりぞけ、また封建諸侯の勢力も弱まり、王権による國家の統一ができるようになりました。しかしそれからも宗教上の争がすこぶるはげしく、一五七二年のサン・バルトロメーのお祭の日に、パリで新教徒三千人が殺され、地方でも三萬人あまり害をうけたりして、代々の王も安心できませんでした。アンリ（ヘンリー）三世も、つぎのアンリ四世も暗殺されました。や

つと、アンリ四世の子のルイ十三世が王となつて、坊さんのリシュリューが宰相となり、貴族の権力を弱めて王の権力を強めましたので、これからフランスは、ヨーロッパ大陸で、一ばんしつかりした國になりました。しかし、その頃、ヨーロッパのまん中には、ドイツ、オーストリアなどを含めた、神聖ローマ帝國があつて、宗教上のことなどで、ごたごたがつきず、三十年戦争（一六一八—一六四八）を経て、やつとおさまりかけた時です。

ルイ十三世は、國王としてロボットのようなもので、政治はおもにリシュリューが行いました。どこでも、王はロボットで、實際の政治は、権力や實力のある大臣、長官が行う場合が多いのです。とにかくこれによつてフランス國家はすつかりかたまり、ついでルイ十四世が、フランス國王になりました。それは、イギリス王チャールズ一世の殺される六年前、一六四三年のことです。

ところが、この頃のイギリスとフランスとは、國の事情がちがつていました。イギリスでは王と人民との争がはげしく、ついに國王が殺されて、人民の権利がのびましたのに、フランスでは國王の力がますます強くなり、人民はだんだんおさえつけられて、ただ王や貴族に搾り取られる道具となつてしまいました。それがあまりひどくて、とうとうがまんしきれなくなり、フランス

大革命がおこつたのですが、それは百年ものちのことです。

ルイ十四世（一六四三—一七一五）の時には、王がじぶんで政治をして、コーベールが、これを助けました。大に國をゆたかにし、商工業をさかんにし、植民地を開き、軍備もとのいました。そしてイスパニヤ、オランダと四度も戦争をしましたが、いくらかの土地を奪いとつただけで、國力をつかい、人民を苦しめ、たいへんな損害でありました。もともと戦争は、人民をかりたてて戦わせるだけで、生産をとどめ、財力をむだにつかい、敵も味方も損をし、たくさんの人間を殺しあうだけで、何の利益もなく、文明にやくだつことは一つもないのです。このルイ十四世が、戦うごとに損をして、ついにフランスを弱くしたことは、よいみせしめであります。

ルイ十四世は、いつもいいました「わたしは國家である」と。つまり、フランスの國は、ルイ十四世の、じぶんのもちものである。この國はかれ一人のためにあり、この國と人民とは、かれの自由に、かつて気ままになるものだという意味です。イギリスの王は、「王は神さまだ」といいましたが、フランスの王は、「王は國家だ」というのです。しかもルイ十四世は、王になつてから死ぬるまで七十年の長い間、この考えをかえず、國民をいじめたのです。かれは世界の歴史上、一ばん長く王であつた一人です。（中國の近代の、清の聖祖と高宗とは、どちらも約六十年、皇帝になつ

ていました。）

ルイ十四世は、フランスの政治について、どんな細かなことでも、すつかりじぶんで行いました。王の居間は、まるで芝居の舞臺のようでした。政治をするのに、王はまったく俳優のようなすがたをしていました。腰にはコルセットという、女がすがたを美しく見せるためにしめくくるものをはめ、頭にはたいへん長い、もじやもじやした長い髪の毛、おかしな形のかつらをかぶり、



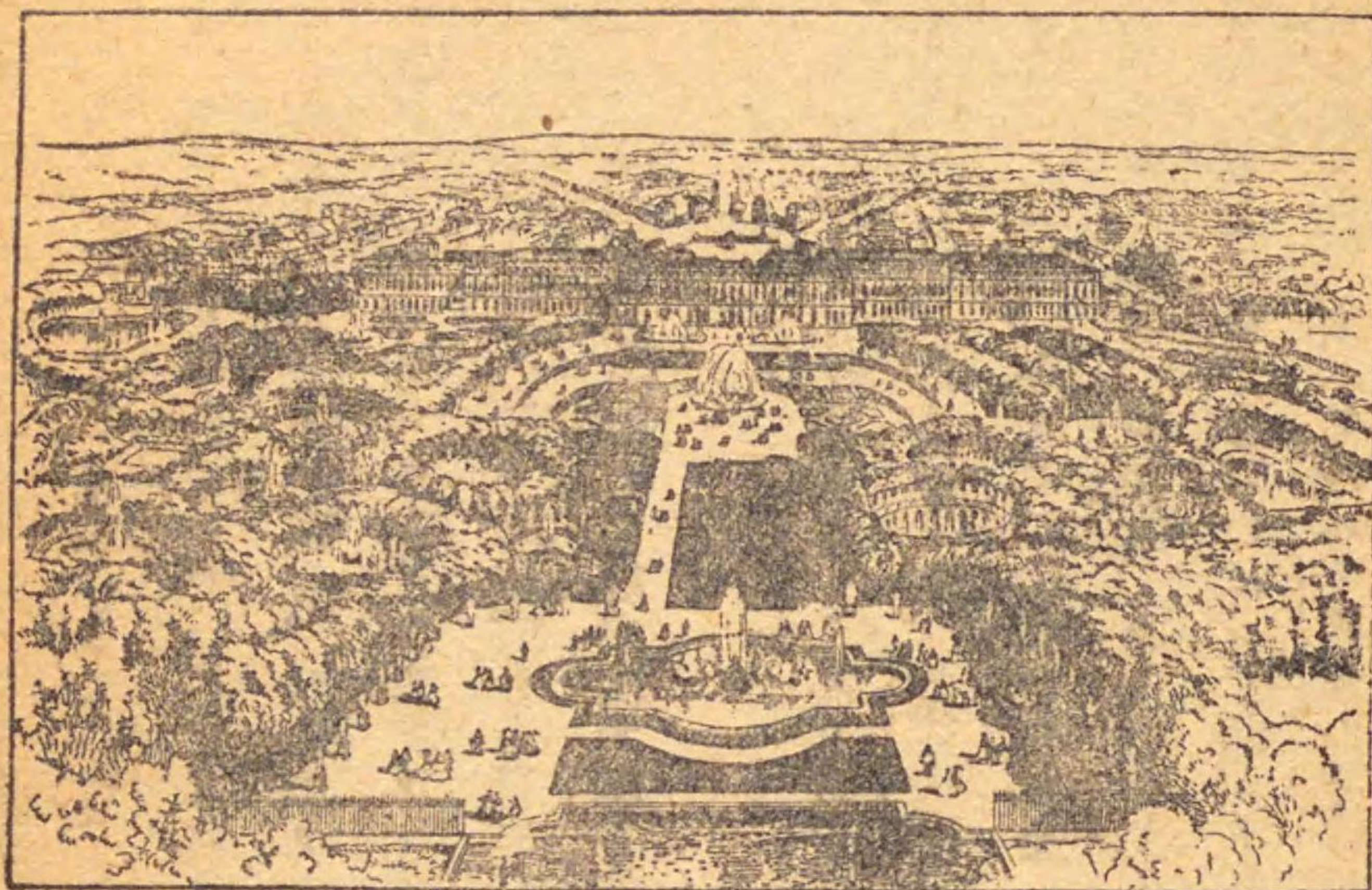
第 10 圖 女すがたのルイ王

それから靴は、今の若い女のはく、かかとの高い、さきのほつそりした、赤いハイヒールでありました。こんなかつらや靴は、王がちんちくりんであつたため、せいを高く見せたいからでありました。そして長い長い、六尺もある杖をさげていました。これは歩く時に、足のさきがいたむのをふせぐためでありました。かれはまた、右手に大きな目がねをもつて

それでもものを見るのでした。このおどけた風をした、とても奇抜なすがたで、ゆつたりゆつたり
いばつて歩くさまは、ほかにまたと見られないものでした。

という、王はよほどばか者のようですが、けつしてそうではありません。この王は、その頃の
ヨーロッパで一ばんえらい王とされ、外の國の王たちはみなこの王のまねをすることをよろこ
んだのです。今でも世界の流行はフランスのパリからおこるといわれますが、これはすでにこの
ルイ十四世の時からのことです。王のいたパリの都は、その頃、王を中心として、フランス文明
は世界の文明のもとになっていました。その上、この王によつて、フランスは方々の土地を占領
し、世界の大國となつたので、ヨーロッパ諸國の外交の中心となつて、各國の使は王のもとに集
まり、そこから各國へフランス文明をもち運んだのです。そしてフランス文明の傳統が、今もヨ
ーロッパはもちろん、世界じゆうに流れて、文學、藝術をはじめ現代文明はフランス的なことが
多いのです。またそのために、フランス語は、ヨーロッパの上流の人々の用語となり、フランス
宮廷の儀式や禮法は、各國の宮廷のてほんとなりました。

ルイ十四世の、文明上のしごとで、今にのこる最も大きな一つは、ヴェルサイユ宮殿を造つた
ことです。パリから數キロ西の郊外に、森にかこまれた中に、廣やかな、とても大きな宮殿が、



第 11 圖 ヴェルサイユ宮殿

すつかり大理石で築いてあります。その平面の形
は、大きな鳥がつばさをひろげたようです。宮殿
の内部は、金銀をはりつめて、きらめくような廣
い室とか、ぎつしり壁になつてゐる美しい幾十枚
の大きな畫とか、またきわめて大きな鏡でぐるり
をめぐらされてある鏡の間とか、それはそれは、
すばらしい、目のさめるような室が幾十もつすき
ます。そして、室々には、金銀に寶玉をちりばめ
た、大きな花瓶や、あでやかな美人の彫刻像や、
精巧な飾り時計や、窓にかけたり、床にしいたり
した、やわらかな、色とりどりの織物や、この世
の文明がつくりうる、あらゆる美しいものが、數
限りなく、かざりたててあります。またこの大宮
殿の外のぐるりには、大きな庭園があつて、世界

で最も大じかけな噴水などもあります。ずつと遠くから、ここまで水を流してくるための水道だけでもたいへんなことでありました。日本には「日光を見ないで結構をいうな」とのことわざがあります。また「ヴェルサイユ宮を見ないで西洋文明をいうな」でもあります。しかしこんな莊麗なヴェルサイユ宮も、のちのフランス革命の時には、人民が押しよせて、王にせまつた思ひ出のところでもあります。またフランスがドイツと戦争をしてまけた時（一八七二）ドイツ皇帝はここに來て、鏡の間で即位式をあげました。そしてまた三十年前、第一次世界大戦のおわつた時（一九一九）には、同じく鏡の間で講和條約がむすばれました。これをヴェルサイユ條約といひます。

しかし、ルイ十四世は、こんなりつばな景色や宮殿を造つたばかりでなく、この宮殿を世界で最もたのしい、最もはでな、歡樂の場所にしていました。何ごとにでも、一ばんすぐれた人だとされる人々は、みなここに集められました。最も政治のわかる人、宗教上にとめられた人、また各方面の學者、實業家、また畫をかくとか、詩をつくるとか、歌がじようすとか、小説や脚本がたくみだとか、あるいはまた話がうまいとか、男でも女でも美しいといわれる人々とか、そういった者は、すべてルイ十四世のそばに集めておいて、朝も晩もかれらとたのしくあそびながら

政治をしたり、税金をとつたり、戦争の命令をだしたりしていたのでした。だから、かれのまわりには、いつでも藝術的な、たのしい、ゆたかな、はなやかな気分がただよっていました。またそのためにフランスの藝術をはじめ文明は、すんすん發達しました。今日、フランスが藝術の國として世界にほこることができるとも、まつたくこのルイ十四世が、こんなぜいたくな生活をしたのにもとづくのであります。イギリスで人民の権利が發達しつつあつた時、フランスではこうして國王中心の藝術がさかえつつあつたのです。

しかし、それは國王と貴族とだけの話です。そうした、かれらのぜいたくな生活の費用は、たれが出していたのでしょうか。それはみんなフランスの人民たちです。人民たちはそのために、血も汗もすつかり搾り取られてしまつたのです。そして、かれらはまことにみじめな生活をしたがら、國王や貴族をうらんでいました。そしてそのためにだんだん國の富がへり、力が弱つてしましました。よく働いて、資本や力のある新教徒（ユグノー）たちは、つぎつぎと外國、ことに新大陸のアメリカへ行つてしまいました。そこで、フランスのまじめな人民は、もうたまらなくなつて、とうとう爆發して、あのおそろしいフランス大革命となつたのであります。（なおその頃ルイ十四世をめぐつて、宮廷文學が大に起こりました。中にもコルネイユ、モリエール、ラシーヌなどが最

も有名でありました。これは、現代の世界文學のおもなもとなつています。

3 笛を吹く王さま

イギリスで人民の力によつて人民の権利が強くなり、またフランスで國王のぐるりで近代の藝術文明がさかんとつた、第十八世紀の頃、さらにその東の、中部ヨーロッパにドイツが、そのまたすつと東のロシアが、さかんとりました。そしてドイツではフリードリヒという大王、ロシアではペートルという皇帝が、その中心の人物でありました。

まず、中部ヨーロッパは、第九世紀のはじめに、シャルルマーニュ大帝の帝國では、帝が死んでから、三人の子が帝國を三分し、ロタールがイタリア半島の北半部と、帝國の中部とをとり、その東部の、ライン河から東をルイがとり、またロタールの領地よりも西の地を、シャルル(チャールズ)が得ました。しかし、ロタールが死ぬると、その子のルイは、皇帝の位と、イタリアの北半部だけをえて、そのほかの廣い土地は、おじさんのルイとシャルルとが、東西の兩フランクを統治しました。西フランクがのちにだいたいフランス國になつた話は前にしました。東フランク國でも、國がすぐには統一できず、國々にいる大名(諸侯)がいく人もあつて、たがいに勢力

を争つていました。しかしドイツ地方では諸侯が選舉をして、國王を立てる習慣がありました。

第十世紀の中頃には、サクソニヤ公から選ばれて出たオットー王が、ドイツ國王としての權力を強くしました。かれはついにローマの法皇から、神聖ローマ皇帝の冠をさすけられました。ローマ皇帝の稱號は、西ローマ帝國がほろんでから數百年のち、シャルルマーニュ大帝がローマ法皇のところに行つた時に、法皇は西ローマ帝國が再びおこつたものとして、大帝にさすけたのです。神聖ローマ皇帝の名はここにもとづきます。そのち、この名は、イタリア北部を領したロタール王の子孫に傳えられたが、その子孫が絶えたため、しばらくたれにもさすけられなかつた



第11圖 フリードリヒ大王

のです。そこへ、九六一年、オットーがローマ法皇にまねかれてイタリアに行き、その亂を平げてイタリア王をかねたので、法皇はこの皇帝の冠をかれにさすけました。それからのち、ドイツ國王がいつもこの帝號をもつこととなり、復興されたローマ帝國は、ドイツの民族の上にうちたてられることとなりま

した。しかしそののち、皇帝と法皇とはたえず争うこととなり、これがため前に話した宗教戦争や、宗教改革もあつたのです。その間にドイツの諸侯の力もだんだんおとろえ、一時は皇帝のなかつた時もあります。そののち、皇帝をえらぶ権利は、七つの大きい諸侯だけがもち、これを選挙といいました。それも一四三八年にオーストリア公が選ばれて皇帝になつてからは、いつもこの子孫だけが皇帝になるようになり、それが今から百年ばかり前まで、約四百年つすきました。それは、ドイツのうちに、プロシヤ國がさかんとなつて、だんだん全ドイツを支配するようになり、ついに皇帝の位もこの國の王にさすけられることになつたからであります。最近まで、ドイツ國といへば、プロシヤ國と同じものようにさえ思われたのは、そのためであります。

このプロシヤは、もともと、神聖ローマ帝國の大部分を占めるドイツ國の、東北部の隅の一部であります。第十七世紀の中頃、大選擧公といわれるフリードリヒ・ヴィルヘルム（フレデリック・ウィリヤム）によつて、急にプロシヤ國の力が強くなり、その子の時に、皇帝からプロシヤ國王の名をさすけられました。それは第十八世紀のはじめでした。その頃からこの小さい國が、あかつきの明星のように、かがやきはじめました。と見ている間に、それはあたりのどの星よりも大きな光になつて、ドイツの全國が、このプロシヤで代表されるようになりました。それは有

名なフリードリヒ大王の力によるのであります。

この大王の父の名も、フリードリヒ・ヴィルヘルム王といいました。この王は、まことに奇妙なことが好きでした。それは、じぶんの臣に、たくさんの大男を集めることでした。この王は、どこかに大男がいるということをしきくと、かならずこれをつれてきて、臣にしました。それで、王の兵隊は、みなせいの高さが二メートル以上ある、まるで怪物のような若者ばかりでありました。そういう數千の大男の兵隊をつれて、戦争に出かけることが、王の何よりのほこりでした。だからどこでも王の兵隊は強いといわれたので、戦争をしなくても國の力がすんすんみとめられるようになりました。

ところがこの大男好きの、戦争に強い王に、フリードリヒ（一七四〇—一七八六）という王子がいました。この王子は、父の王とちがつて、戦争は大きらい、ただ音楽や詩や美術がたいへん好きでした。頭の髪を長くして、さきの方をちじらしたり、また赤いネクタイをかけ、時には女の着るようなスカートをはいたりしていました。父の王は、そのためにこの王子のことを「おじようさん坊ちゃん」とよんで、あまりかわいがらなかつたのです。いつも「もつといくじのある、強い男になれ」と、王子をしかりました。一しよにご飯をたべていると、王は怒つて、いきなり王子に

向つて皿を投げつけたりしました。また王子がヴァイオリンをひいていると、とらえて何日も一室にとじこめ、食べ物さえもくれないで、鞭でなぐつたりしたこともあります。

そのうちに、この強い父の王は死にました。そして「おじょうさん坊ちゃん」が、王になりました。一七四四年のことです。すると、何という不思議でしょう。このやさしいフリードリヒは、すつかり人間が生れ變つたようになりました。かれは、あのたくさんの大男の兵隊をひきつられて、さきに立ち、すんずん勇ましく戦いました。とても強いこと、父の王の及ぶところではありません。たちまち、あたりの諸侯が、みなおそれたかうようになりました。それでも、王はやりません。たちまち、あたりの諸侯が、みなおそれたかうようになりました。それでも、王はやつぱり詩や音楽を好みまして、ひまさえあれば、じぶんでも詩をかいいたり、笛を吹いたりしていました。しかし、フリードリヒが最も力をつくしたのは、プロシヤの國を大きくし、また富んで、強くすることでした。

その頃、ドイツ地方で一ばん強い國はオーストリアでありました。この國は、マリヤ・テレサ(一七二七—一七八〇)という女王がおさめていました。この女王は、たいへん勇氣のあるかしこい人で、今も世界の女傑の一人とされています。その父は、ドイツ皇帝カロロ(チャールズ)六世でありました。父には男の子がなかつたので、オーストリアの全土を、マリヤ・テレサにあたえて死に

ました。それがフリードリヒの王となつたと同じ一七四〇年のことです。するとこのオーストリアの相續權があるといつて、幾人もの外の國の貴族や諸侯が、兵をつれて攻めこみました。これをオーストリアの繼承戦争といひます。フリードリヒ大王もその一人で、まつさきにオーストリアの一部を攻めとりました。のち、大王とマリヤ・テレサ女王とは、何度も戦つたり、仲なかりをしたりして、一七六三年まで二十數年間、ごたごたをつづけました。その間に、プロシヤは數倍の大きさになり、ほとんどオーストリアと同じ廣さの國になりました。神聖ローマ帝國(ドイツ)の三分の一はプロシヤ、三分の一はオーストリア、もう三分の一がほかのドイツ諸國の割合になりました。この間、フランスをはじめ、ロシヤもオランダも、ポーランドも、ヨーロッパ大陸のおもな國々は、フリードリヒとマリヤ・テレサ女王とのどつちかに味方をして、大戦争をくりかえしました。そして、マリヤ・テレサがかけたためにフリードリヒが有名になり、プロシヤが大きく、さかんとなつたのです。だからこの時に、マリヤ・テレサが勝つていたらなら、世界の地圖は今とよほどちがつたものになつたであらうといわれます。

このフリードリヒ大王は、いつもプロシヤの人民を大切にしました。かれは戦争でも、ほかのことでも、何事をはじめにも、まず國內の人民全體のためになるかどうかを考えました。そし

て、ためになることばかりを行い、また人民の反対することは、けつして實行しませんでした。大王の宮殿の近くに、ますしい粉ひきのもつ、一つの風車がありました。それはあまりに不體裁なものでした。また宮殿のすぐそばでいつも大きな音をさせるので、すいぶんうるさかつたのです。大王はどうかしてこれを買いとつて、こわしてしまいたいと思いました。しかしその貧しい粉ひきはなかなか承知しませんでした。それで大王の臣たちは怒つて、たくさんのかねをくれるから大王に賣るようにいいました。もしそれでもいうことをきかないなら、殺してしまおうとさえおどかしました。これをきいた大王は、臣をいましめて、「風車はわたしのものではない、持主にすべての権利があるからしかたがない。そんなことで人民をいじめるのはまちがつている」といいました。そしてとうとうがまんをして、うるさい風車の音を、毎日きいていました。その風車は、今でも昔のままに、プロシヤの宮殿のそばに立つているそうです。

4 船をつくつた王子

ロシヤという國は、ヨーロッパのうちでも、その文明が、一ばんおくれて發達した國です。この國は、ヨーロッパの北東部のほとんど全部を占め、ヨーロッパ全體の約半分の廣さがあります。



第 12 圖 ペートル大帝

ここに住んでいる人たちの大多数は、ほかのヨーロッパの人々と同じく、アーリヤ人種（白色人種）ではあるが、ギリシヤ、ローマの民族や、またドイツ、イギリスなどのテュートン民族とはちがひ、スラヴ民族といわれます。この民族は、もとからこの寒い北地において、昔のゴール人つまり今のテュートン民族の祖先などが、すでに、かなりな文明をもつた一千年ぐらい前の頃でも、まだほとんど開けなかつたので、それで「奴隸」のように見られていました。「スラヴ」とは、奴隸ということだそうです。それに、非常に寒いところですから、住民はみな長い毛皮の外套を着て、頭からすつぽり袋のようなものをかぶり、顔は目ばかり出しているのです。しかもその顔には、長いひげがぼうぼうとはえ、せいが高く、大きい人間が多いのです。その顔は、いかにも人なつこい、よい人間であることを思わせますが、ちよつと見ると、まるで雪の中の怪物のように、こわい感じがします。これが、昔々もかわりのない、素朴で、おうようなロシヤ人でありま

す。

ロシアの地方にも、千數百年前から、いくつもの、民族の小さい團體が住みました。この國の西北の大部分は、バルティック海に沿つていますが、その海岸地方に、今から千二百年ぐらい前に、スラヴ民族の強い團體によつて一つの國ができました。これがのちのロシア帝國のおこりです。やがて、かれらは内陸の方をも占め、中部ロシアのキエフを都としました。そしてここでおこりました。しかしそれからのちも、ロシアには多くの諸侯の國があつたし、また長い間、蒙古人に攻められて、まとまつた一つの國にはならなかつたのです。第十五世紀の末頃になつて、キエフから移つてモスクヴァ(モスコウ)に都していたイワン三世が、近くの諸侯の國をあわせ、蒙古人の欽察汗國という國をほろぼし、獨立しました。そして孫のイワン四世が、はじめてツァーと稱しました。ツァーとは皇帝ということですが、それからますます領土をひろげ、第十七世紀には、ヨーロッパでも強い一つの國にまとまりました。

そして、ニリードリヒ大王より、ちよつと早い頃、一六八二年に、ペートル(ピョートル)
(一六七二—一七二五)大帝が、王になつてから、にわかには、ヨーロッパの最も強い、大國の二つになりました。ペートルも、フリードリヒと同じように、少年の頃はすいぶんやさしくて、川の水を見る

ことさえ、おそろしがつていたとのことです。けれども、かれはたいへん名譽をおもんずることもでありました。これから王になるべき者が、川の水をこわがつてどうなるものかと、じぶんながら恥しくなりました。そこで、夏になると、毎日ヴォルガという大河に行つて、舟をこいだり泳ぎをしたり、水でばかり遊びました。するうちに、たれよりも水の好きな、またたれよりも舟の好きなこどもになつてしまいました。

かれは、ロシアがヨーロッパの東の隅にあつて、外の國にくらべて、國も弱いし、文明もおくれていることを残念に思い、何とかしてじぶんの國を、もつとりつば、世界にまさる國にしたものだと思はれました。そして、それには國王になるべきじぶんが、まずえらくならねばならぬと決心しました。しかしその頃のロシアには、じぶんにいふことを教えてくれる學者もありませんでした。そこで、ペートルは、ただの労働者の風をして、オランダに行きました。これには目的があつてのことです。かれは、考えました。ロシアにはすでにいろいろな技術が進歩しているけれども、まだ船をつくることは十分でない。オランダには、世界一のりつばな大きな船をつくることのできる工場があるとのことだ。だからここで造船術を研究しようと考えたのです。それから、かれはじぶんの一番好きな、船を造る工場に入つて、せつせと勉強しました。

むろん、あたりまえの職工となつて、外の職工たちと同じように、ハンマーを振りあげたり、重い材料をかついだりして、よく働きました。食べ物もじぶんでつくるし、着物の破れもじぶんで縫うし、すべてのじぶんのことはじぶんでやつて、たいへん苦勞をしました。そして何年かの間

に、かれは船のことはもちろん、その外、世の中のいろんなことを知りました。ついでかれはイギリスにわたりました。ここでは、政治だの、法律だのを勉強しました。その頃のロシアには、まだ憲法もありませんでした。法律もととのつていませんでした。だから、クオンウルの改革のあとのイギリスでは、たくさん學ぶことがありました。さらにかれはフランスに行きました。そこで文學や藝術にもふれましたが、ことに、ルイ十四世のさかんな頃でしたから、宮廷の儀式や、その外、當時のフランス文明については、學ぶことがたいへん多かつたのです。そして、すっかりヨーロッパの新しい時代の空氣にふれ、文明がわかつてから、ロシアにかえりました。ロシアにかえると、まもなく王となりました。一六八二年のことです。まず、世界でも最もすぐれた軍艦をたくさん造りました。これによつてロシアは大海軍國となりました。けれども、その時の都は、モスクヴァにあつて、海からは遠く離れていたもので、海岸に都を移さなくては、海軍があつてもやくにたたないのです。そこでネヴァ河の河口で、バルティック海に近

いところに、數百萬の人を送つて、土を運ばせ、廣い廣い海の上を埋め立てて、大きな一つの都をつくりました。この都を「聖ペートルの城」という意味で、セント・ペテル・ブルグと名づけました。近年になつて、ペテログラードといいました。革命後、再び首府をモスクヴァに移し、ここをレーニングラードといいます。

それから、ペートル大帝は、ロシアの文明のために、一しようけんめいで働きました。まずよい法律をつくつて、人民に幸福をあたえ、また學校をたてて教育をさかんにしました。その外、病院や工場をつくり、貧しい人たちを保護しました。またこれまでの不便なロシア風の着物をやめさせて、人民にみなヨーロッパ風の服を着せました。長いひげを生やすのを習慣とした人々にも、これをそつて、さつぱりした顔にさせました。こうして、これまでは同じヨーロッパでもほかの國とはよほどちがつて、おくれていたロシアを、すっかり新しいヨーロッパの文明の國にすることができました。しかし、それでも、ロシアの貴族たちは、なかなか開けませんでした。第二世紀のはじめになつても、ロシアだけには、憲法も、國會もなく、皇帝が専制政治を行つていました。そして國の権力は、皇帝と貴族とにありました。そのためロシアの人民は最近までたいへん苦しみました。今から八十年前の頃まで、ロシアにはまだ奴隸がありました。それは

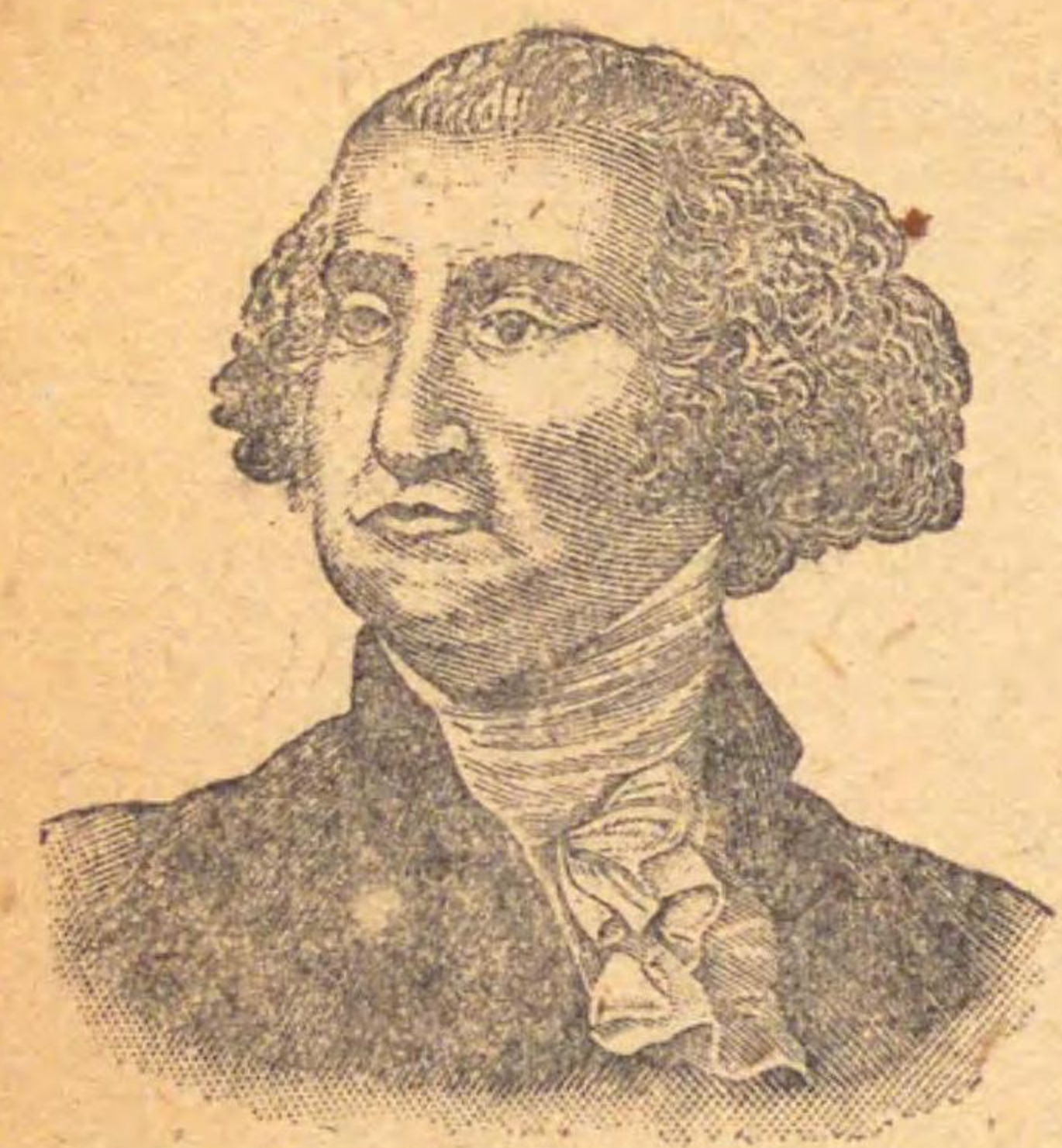
サーフ（農奴）といつて、土地についた奴隷で、牛や馬と同じ、一種の家畜のような待遇をうけて、それはそれはみじめな、あわれなものでした。そんなありさまであつたために、しばしば内亂がおこつたり、社會運動がさかんになりましたが、皇帝も貴族も、これを改めようとしませんでした。のみならず、進歩的な考えをもつた人や、人民を解放しようとした人々が、たくさん殺されたり、シベリヤの寒い荒地に流されたりしました。そして人民は、とうとうたまらなくなつて、第一次世界大戦の終り頃、革命をおこし、これに成功しました。そこで、今、話したベートル大帝らによつて築かれた帝國はなくなり、そのあとに社會主義ソヴェット聯邦共和國ができました。このソヴェット・ロシアについて、あとでもう一度、話しましょう。

5 ワシントン

ヨーロッパから、こんどはアメリカにとんで、米國、つまり北アメリカ合衆國の話。コロンブスが新大陸を發見してからのち、ヨーロッパの人たちは、ずんずんアメリカにわたりました。そして南と北との各地で、さかんにヨーロッパ文明を開きました。中にも北アメリカの中ほどは、氣候がよくて土地が肥えていて、いろんなもののできるのにたいへん適しています。

そこへはおもにイギリスの人たちが植民をして、勤勉に働きましたので、農産物はふえるし、金など礦物などもたくさん出るし、富みさかえること、すばらしいものでした。第十八世紀の中頃には、すでに二百萬以上のイギリス人が、ここに住んでいました。

ところが、第十八世紀の末になつて、だんだん土地が繁昌し、富んだ人が多くなると、本國のイギリスからは、ここに植民した人たちから、できるだけ多くの税金を取りたてようとししました。むろん、アメリカにいる人たちも、はじめはイギリスの本國のために、たくさん税金を送ろうと考えていたのですが、こうしてじぶんたちだけ遠くはなれて生活していると、さういふわけにはまいりませんでした。その上、せつかく本國へ多くの税金を送つても、アメリカにいる人たちには、本國で何の権利もあたえてくれないのです。イギリスでは、長い年月をかけて、人民の権利はすつかり發達しているのに、アメリカにいる者は、税金だけとられて、國民としての権利はみとめられないのだから、不公平だとい



第 13 圖 ワシントン

のもむりはありません。

そこで、アメリカにいるイギリス人たちは相談をして、イギリス王に、かれらの権利をみとめてくれるよう要求することになりました。そのため、この要求を代表して本國に行つた人は、有名なベンジャミン・フランクリン（一七〇六—一七九〇）でありました。この人は、きわめて貧しいブリキ職人の子で、とても苦勞をして育ちました。たいへん頭のよい、物事を考える才能にとんでいました。印刷術を研究して、アメリカで最初の新聞紙を發行し、それによつて人々から大にみとめられて、アメリカ第一の、たよりになる人間だと信用されたので、こんども代表に選ばれたのです。かれはまた、その外、ストーヴだとか、ランプだとか、いろんな實用になる、よいものをいろいろ發明しました。また雷の鳴る時に大風をあげて、風の糸に細い針金をとおし、それにより空の雲の中から電氣を伝えることを知りました。これが、だんだん研究されて、電氣の學問のものとなりました。そういう大發明家でもあります。この人がイギリスにかえつて、時の王、ジョージ三世に、要求をしました。けれども、王は、ついにアメリカ植民に、イギリス國民としての権利をみとめてくれなかつたのです。

そこでアメリカにいる人たちは大いに怒りました。おもい税金をとつていて権利をみとめないのは不都合だ、この上は本國と戰爭をしてでも、あたりまえの権利を獲得する外はないと考えま

した。のちにはついに、いつそのこと、本國から離れて完全に獨立して、自治權を得ようと相談しました。一七七四年、植民地の代表者たちはフィラデルフィヤに集まつて、第一回大陸會議を開き、かれらの要求がみとめられない間は、本國と絶交しようと相談ができました。その翌年には、植民のうちから、義勇兵ができて、これがイギリス本國から來ている軍隊と衝突しました。それについては、ここにもう一人のすぐれた人があつたことをわすれてはなりません。それは、アメリカ獨立の父といわれて、今も最も尊敬されているジョージ・ワシントンであります。かれが少年時代に、父のだいにしていた櫻の木を、あやまつてきつた時、これをかくさず父に告げておわびをしたので、たいそうほめられた話は、たれでも知つてゐるところです。ワシントンは、そんなにかしこい、また正直な人であつたから、植民たちはみんな、ワシントンにぶんたちのかしらにいただくことにきめました。かれは十六歳の時から、測量技師になつて、いろんな生地を測量して歩いて、アメリカの各地のことをよく知つていきました。そして間もなく軍人になつたところへ、いよいよ戰爭となつたので、この獨立軍の總督となされたのです。そこでまず、一七七六年七月四日、第二回大陸會議を開いて、獨立宣言書を發表しました。この宣言書に名をかいた人は五十六人ありました。かれらはみな、この戰爭に失敗したなら、イギリス本

國の軍隊から、一人のこらず殺されてしまうことを覺悟していたのです。

それからというものは、ワシントンをかしらす軍隊は、わずかの兵でもつて、おしよせてくる多くのイギリス兵と戦い、しばしばまげました。何しろ、獨立軍には、費用がたくさんないので、食物も着物も、銃や彈丸も、まことに足りないで困難をしました。冬の中でも、薄い服をきて、ジャガイモをたべながら、戦争をしました。とうとう七年間戦つたのち、イギリス本國をへこませてしまつて、ここにアメリカはりつばな獨立國としてみとめられました。それは一七八三年、今から百七十年ばかり前のことでもあります。アメリカ合衆國というわけは、もともとこの地方のイギリス植民地は、一つ一つ自治體として存在した州ステイトであつたのが、聯合して一つの獨立國になつたからです。最初、聯合に加つたのは、十三州でありました。それで最初の合衆國の國旗は、白地に七本の赤い横線があり、その左上隅を藍地にして、そこへ十三箇の星を白くあらわしました。これを星スター・アンド・ストライプス條旗ストライプスといひます。そして星の數は、合衆國に仲間入りしている十三州をあらわし、のち仲間の州が加わるごとに、星の數をふやしました。今、本國は四十八州ありますので、星の數も四十八になつています。本國の外に、アラスカとハワイとが合衆國に屬し、またフィリピン群島も、その一部で、まだ完全に分離してはいません。ポルトリコ、

サモア群島、グアム島などもその領地です。

合衆國は、イギリス本國から完全に離れて獨立しました。そして最初から國王というものはなく、國民がみんな選挙した一人の大統領プレジデントをおきました。大統領はまづたく人民の代表者なので



第 14 圖 アメリカ獨立宣言書の署名

す。ここでは、國民をおさめるものは、國民みすからだとはつきりきめてあります。しかしもともと自治體としての州の集まりですから、アメリカの人民は、政治上には州民と、合衆國民と二重の關係があり、いろんな政治上のことなども州と國と二重に行われていきます。

最初の大統領には、このワシントンが選ばれました。まことにワシントンこそ「米國の父」であり、最初の戦争、最初の獨立、最初の政治の第一人とされるのであります。それからのち、この國はたいへんな勢いで發達し、今ではイギリスやフランスをすつとのりこし、世界第一のりつばな國とされています。では、アメリカの文明はどんなであ

りませうか？ それはあとで話しましょう。

6 科學の夜あけ（上）

こうして、第十八世紀の末までに、ヨーロッパの文明は、四、五百年前とはまるでちがつたありさまになつてしまいました。まず第一に、これまでは王と貴族とによつて支配され、しかもその王や貴族は、じぶんたちのかつてに、お互いに戦争をしたり領地を奪いあつたり、またいふなはかりごとをして、じぶんたちの利益とわがままとをばかりやつていました。そのため、いつもめいわくをこうむり、みじめな生活をさせられ、いじめられてきたのは、一般の人民でありました。そして國王や貴族は、その權力をじぶんの子や孫や、親類などに傳えて、特權階級をつくつていきました上に、かれらの階級でしつかりかためていきましたから、人民はこれをくすして、かれらのあたりまえの權利をとりもどし、自由に解放されることがなかなかできませんでした。ところが、イギリスで大憲章マグナカルタができてのち、イギリス國民はだんだんかれらの權利を主張し、發展させました。それによつて、イギリス人の國は、ずんずんと、よい國になりました。ヨーロッパで、それまで強力であつたイスパニヤ、オランダ、ポルトガル、フランスなどをおさえました。

また商船をたくさんつくり、さかんにインドなどと貿易をして、ひじょうに富みました。ついにインドをじぶんの領地にし、北アメリカの植民地も大發展をしました。ついに世界一の國になりました。またその頃まで、ごたごたしていたヨーロッパ大陸でも、これまでいばつていたイスパニヤ、ポルトガル、オランダ、オーストリアなどにかわつて、フランス、ドイツ、ロシアがさかんになり、第十八世紀の末までは、イギリスと共に四大強國のようになりました。中にもフランスは、ルイ十四世の頃を頂點として、世界で最も文明の進んだ、美しい、花のような國になりました。しかし、そこには専制の王があつて、人民の權利はほとんどみとめられませんでした。こんな美しい文明も、みな王や貴族の、支配階級だけのものでした。またドイツも、これまで宗教との關係などでごたごたして、一つの國にまとまりかねていたのが、そのうちのプロシヤ國がだんだんさかんになり、ことにフリードリヒ大王が、人民のためになる政治をしてから、學問や藝術や哲學がさかんになり、のちの學問の國ドイツのもとをつくりました。ロシアはまだその文明が十分開けなかつたけれども、ペートル大帝などの努力によつて、あの寒い、荒れた國にもだんだんヨーロッパ文明の花がさきかけました。しかしそこにはまだ奴隸（農奴）があつたりして、世界のいなかという感じがありました。

こうした近代の文明として、まず宗教のことがわかりました。中世のヨーロッパには、西ローマ帝國からのキリスト教と、東ローマ帝國からの、少しちがつたキリスト教と、またアラビヤからひろがったイスラム教とが信じられていました。まず十字軍ががんばつて、イスラム教をヨーロッパの大部分からおしのけました。あべこべにアラビヤ地方に遠征して、そのいろいろなアラベスク文明をヨーロッパに傳えて、ヨーロッパ文明の進歩をたすけました。すると、こんどは西ローマ帝國から流れひろがったキリスト教は、イタリアにいるローマ法皇につく舊教の一派と、ドイツで新しくルーテルらによつて唱えられた新教の一派とにわかれ、それがいろいろの政治上のこととまじりあつて、王や貴族の間に、政治と宗教と二つの争いがつぎつぎにおこりました。宗教戦争はヨーロッパの人々にたいへんめいわくでした。しかしそのために、宗教はかえつたいへん進歩しました。これまでのつまらぬ迷信がだんだんなくなり、「神はお寺の中にあるのでなく、みんなの心の中にあるのだ」とか、「信仰とはお互いに愛しあうことだ」とかいうようになりました。そして、あかるくて快活な、たのしい、またかしい人間の宗教になりました。これによつて中世の、陰氣で、理性のない人間は、すつかり現代的な、進歩的な考えの人間に進みま

その最初のあらわれは、イタリアのルネッサンスであります。はじめ、サン・フランシスコらによつて、「愛」、「なさけ」、「貧しいもの、弱い者をいたわり、助けることなどを教えられました。さらにダンテらにより、人間の愛情、自然で自由な人生、藝術の世界、哲學の世界などを示されました。そして、またキリスト教ばかりでなく、昔のローマやギリシャの文明の中にこそ、ほんとうの精神文明があることをさとりました。これらのものの中から、ついにレオナルド・ダ・ヴィンチ、ミカエル・アンジェロ、ラファエルの藝術が花さき、フィレンツェなどが、藝術の都となりました。このルネッサンスの気分は、新しく進みつつあつたヨーロッパ各地に、ばつと花さきました。それが第十五世紀から第十七、八世紀の文明であります。しかし、この新文明の氣運は、藝術や文學や哲學や宗教の上だけではありませんでした。あらゆる學問、ことに科學とその應用との方面にすばらしい進歩發展をなし、近代から現代は科學の時代だといわれる世の中になりました。中にも磁石、火藥、印刷術の發明、應用がすばらしい勢いで、科學文明の發達を助けました。これがまた遠洋航海、新大陸の發見、貿易のさかんになることなどと、お互いに助けあひまして、世界の面目をまつたく一新してしまいました。

ここに第十八世紀の末までの、科學の驚くべき發達のさまを、ざつと語りましょう。中世では

學問というと、まったく神についてのことばかりでした。ところが、第十六世紀の頃からかわつてきました。ちようどレオナルド・ダ・ヴィンチが、近代の、驚くべきりつばな畫をかき、またコロンブスが新大陸を發見した、その頃のことです。まず、コペルニクス(一四七三—一五四三)とガリレオ(一五六四—一六四二)とが、地動説ということをとなえました。ついでケプレルは星の動く法則を發見しました。今から考えると、ただあたりまえのことですが、その當時としては、これはたいへんなことでした。なぜなら、それまでは、この世の中は、すべて神がつくつたもので、神が中心になつてあらゆるものが存在する。そして神は、まず人間のいるこの地球をもとにして、そのぐるりに太陽や月やたくさんの星をつくつた。だから太陽も月も星も、地球の周圍をぐるぐるまわつてゐるのだと考えていました。どこの大學でもそう教えたのです。いや、昔のギリシヤの哲學者もキリストも、キリストより古い豫言者たちも、みなそう信じて疑わなかつたのです。ところが、ポーランドにコペルニクスという天文學者があらまして、「いや、それはまちがつてゐる。太陽が中心にあつて、地球も、月も、その外、たくさんの太陽のぐるりの星も、みな太陽のまわりをぐるぐるまわつてゐるのだ」といひだしました。皆さんがこんなことをきいても、「何だあたりまえのことではないか」と、不思議がらないでしようが、その頃としてこれが重大事件になりました。

た。かれはその研究したとおりのことを書いて、ローマの法皇におくりました。すると法皇はひじょうに怒つて、「これはキリストの聖書にあることとまったくちがう。すぐ、コペルニクスを處罰せよ」とさげびました。新教の信者たちまで、いつしよになつて反對しました。しかし、かれは儼として、じぶんの考えの正しさをかえませんでした。「正しい學問にはまちがいはない」と斷言しました。これにより、地球が動かないこと、地球が中心だとの考えは、まったくやぶれまじつた。これは一五四五年のことです。するとそれから間もなく、イタリヤのガリレオが、その頃のそまつな望遠鏡で太陽や外の星などをのぞいて、太陽には黒點があること、だから太陽も神のような完全なものでないこと、やはり一つの星であること、しかもコペルニクスのいうように、地球は月などと共にこの太陽を中心にして、ぐるぐるまわつてゐることなどはつきりさせました。このガリレオは、天體やその外の、たくさんのこれまでわからなかつたことを研究して發表しました。しかしそれには、これまでの宗教上の迷信を正したことが多かつたので、ローマの法皇はひじょうに腹を立て、かれをとらえて、重い刑に處しました。けれども、ガリレオは、どんな苦しい刑罰をうけながらも、「それでも、地球は動く」といつて、びくともしませんでした。ソクラテスは正しい教をのこすため毒をのんで死にました。キリストは人間の苦しみを救うため十

字架にかかりました。フスは宗教をよくするため焚き殺されました。そしてガリレオは真理のため、じぶんの考えをどこまでも守りました。

7 科学の夜あけ (下)

第十七世紀になると、イギリスのニュートンが引力説の大原理を発見しました。その頃、ヨーロッパでも一ばん開けていたイギリスでは、第十七世紀のはじめに學者のベーコンがあつたり、國王のチャールズ二世が化学や哲學を好んで、宮殿のうちに實驗室をつくつたりして、なかなか研究がさかんでした。アイザック・ニュートン(一六四二—一七二七)は、その頃イギリスのいなかで生れました。かれは六、七歳の時から、あまり友達とは遊ばず、いつもひとり、かんなど、のみをもつて、じぶんの考えによつていろんなものをつくつていました。それから、近所の工場に行つては、器械のつかい方を見るのをたのしみにしていました。少年時代のこと、かれは風車のおもちやをつくりました。それはたいへんうまくできて、ほんもの大きな風車とまったく同じものでした。小さい帆に風のあたるしかけて、車はよくまわりました。そして、まわるにつれて、挽臼にある一とにぎりの麥は、たちまち白い粉になりました。みなこれを見て感心しない者はあ



第 15 圖 ニュートン

りませんでした。すると、一人の少年が「せつかく風車をつくつても、こなひきの人がいらないではないか？」といました。ニュートンにはつこり笑つて、どこからか一ぴきの、はつか鼠をとらえてきて中に入れ、こなひきにしました。その外、かれはいろんなおもしろいものや、有益な器械などをたくさんつくりました。そしてその頃世界で一ばんすぐれた大學といわれた、イギリスのケムブリッジ大學を卒業して、いなかで研究してました。ある日、庭を散歩していますと、林檎の木から林檎が一つ、ぼろりと落ちました。かれは足をとどめて、落ちた林檎をじつと見つめていましたが、いきなり「あつ、これだ！」とさけびました。かれはこの瞬間、これまで世界じゆうのたれもが、気づいたことのない、一つのたいへん重大な眞理をさつたのです。それは、引力ということ。今、これを「萬有引力」といっています。それはすべて物と物との間には、ひつぱりあう力がある、という理くつです。この林檎が木から地に落ちたのはなぜか？ それは木が上にあつて、地が下にあるからで、すべて、高いところの

ものは低いところに落ちるのがあたりまえだと、これまでの人は考えましたが、そうではあり
ません。ほんとうの理くつは、物と物とが互いにひつばりあつてゐるのだが、その場合、いつ
でも、大きいものは小さいものをよけいにひつばる。だから小さい林檎は、はるかに大きい地球
に、力づくひつばられて落ちるのです。ところが、これは天體の星の場合にも同様です。つま
り月や地球は、それよりもずっと大きい太陽にひつばられてゐるし、また月はそれよりもずっと
大きい地球にひつばられて、地球のまわりをぐるぐるまわつてゐるのです。五十年前にコペルニ
クスやガリレオが、このことを知つたし、またそのちドイツのケプレルが天體運行の法則を發
見したけれどもまだ、どんなわけで地球や月や星が動くかの原因は、わからなかつたのです。と
ころがこのニュートンの萬有引力説によつて、こんなことがわかつたばかりでなく、物理學上の
一ばんたいせつな一つの原理が明かになつたのです。萬有引力説は、なかなかむずかしい理論で
すが、つまり「宇宙間における任意の二箇の質點は、これを連結する直接の方向にそつて、その
質量の積に比例し、距離の自乗に逆比例する力をもつて互にあひ引く」ということです。これが
わかつたために、近代の物理學には、たいへんな進歩がありました。最近、アインシュタインの
相對性原理とか、また宇宙線とか、物理學上のむずかしい理くつがやかましいのですが、これら

もみなニュートンの説から進められたことです。

第十八世紀になると、科學の研究はますます進みました。たとえばキューヴィエーの解剖學、ラ
プラーズの天文學、リンネの植物學などは、これまで知られなかつた、學問上の大切なことを、
いろいろ進めてくれました。さらに科學の應用では、歴史上にたいへんなしごとをした人がたく
さんありました。中にもイギリスでジェームズ・ワットが蒸氣機關を發明しました。これによつ
て、これまで船は帆で走つたのが、蒸氣で走れるようになり、車は馬や牛がひいたのが、やはり
蒸氣の機關車がひつばることになりました。その外、蒸氣の力の利用は、最近、電氣の力の利用
がさかんになるまでたいへんにやぐだちました。ことにイギリスで、蒸氣を動力とする商船がで
き、軍艦ができたことは、イギリスを世界第一の文明と富と力との國にした大きな原因です。ま
たおなじイギリスでは、アークライトが紡績機械を發明して、一どにたくさん糸をつむぐこと
ができ、カートライトが織布機械を發明して、たくさん糸の織物を早くするようになりました。こ
れによる紡績と織布との大量生産は、イギリスの外國貿易をにわか増加させ、イギリスを世界
第一の産業國にしました。そのための機械をつくるに要する鐵と、水から蒸氣をつくるに要する
石炭の生産と、また紡績、織布の生産とのために、これまでよりも數十倍多くの人の勞働の力を

も要することとなり、そしてまた人間の力と機械の力が、きようそうすることになつたために、イギリスでは産業革命という、これまでの人間の生活になかつた大事件がおこりました。そして、これからのち、そのために資本家と労働者とが対立し、むずかしい社會問題をおこすことになりました。何にしても、科學文明の進歩は、人間にとつて、大いにやくに立つことが多いのです。なおこの頃から醫學上の進歩がいちじるしく、ジェンナー(一七四九—一八二三)の種痘法の發明などは、人間の病氣からくる不幸を救うようになつた大きなはたらきであります。

8 思想の力(上)

近代の文明の上で、科學と共に、人間の幸福にやくだつた、もつと根本的なことの進歩があります。それは思想、つまり人間の、ものの考え方についての進歩であります。これはおもに哲學、社會學、經濟學などとしてあらわれました。昔、キリストは、「人はパンのみで生きられるものではない」といいました。その意味は、物質、つまり食べ物や着物があつただけでは、人間として生きていくことはできない意味です。むろん、人間が生きる上には、まず何よりも、食べものが一ばん必要です。これがなかつたらば、すぐに餓え死にします。最近までインドにガ

ンディという、えらい老人があつて、インドがイギリスからいじめられるのを救うためには、無抵抗の抵抗をしなくてはならぬ、それには、斷食にかぎると考えて、何度も斷食戰術をやりました。長い時は一箇月も斷食をしました。しかしこれも斷食が一ばん苦しいことだと、デモをやるのです。たれでも、一週間も食べないでいたなら、働くことはもとより動くこともできません。着物も同じです。寒い時にはだかでいたなら、こごえ死にします。家もなくてはいけません。雨風、雪の中に、家なしで生きていられません。けれども、衣食住だけあつて、それで人間として満足できるかという、そうはいきません。人間には心があり、心の生活、つまり精神生活があります。同じ人間でも、大昔の人間と今の人間と、開けた人間と開けない人間とは、どこにちがいがあるかという、この心の生活の上にあります。大昔の人の心は單純で、そして迷信が多くて、ほんとうのことについてはまだはつきりしていなかつたのです。山、川、草、木、雨、風、何でも神と思つたり、死者も生きていと思つたりしました。そしてむやみと争いました、にくみあいました。また他人のことや、世の中のことをあまり考えなかつたのです。その上、人間とはどんなものか、人間はなぜ生きていくか、世界はどんなものか、世界はなぜあるか、などと、考えても見なかつたのです。それが、だんだんと、じぶんのこと、他人のこと、人間のこ

と、世界のこと、いろいろと、ほんとうの、正しい、はつきりしたことをつきとめようとする考えが、つぎつぎにおこつてきました。こういう考えは、西洋でも、古代ギリシヤですでに發達しました。これをギリシヤ哲學とかギリシヤ思想とかいいます。ところがそののち、キリスト教を信するようになって、ただキリスト教を、理くつなしに、聖書にかかれたとおりのことをほんとうとして信するようになつてから、西洋の人々にも、中世の長い年月の間、まったく物ごとのほんとうのこと、正しいことを、はつきりさせようとしなかつたのです。それを、前に話したように、人文主義だ、ルネッサンスだ、宗教改革だ、科學だ、哲學だ、理論だと、だんだん人間の目がさめて、はつきりしてきました。

わけて、第十七世紀のはじめ、あたかもルイ十四世の全盛の時に、フランスにルネ・デカルト(一五九六一一六五〇) という哲學者がりました。かれは子どもの時から理くつつぼくて、考えてばかりいたので、父はかれのことを「哲學者」とよんでいたさうです。三十年戦争のはじまつたばかりの頃、この若いデカルトも戦争にひつぱり出されましたが、しかしかれは戰場で戦ふことなどはちつとも考えず、いつもストーヴのそばにすわつて、目をとじてじつと何事かを考えてばかりいました。かれは、物事について考えれば考えるほどわからなくなりました。すべてのものが、あ

るようでない、きまつたようできまらなと思われました。すると、ある日、かれは、ばつと目がさめたように感じた一つのことがあります。それは、あると思つた一切のものは、ほんとうはないかも知れない。しかし、たつた一つ、どうしても「ある」ことがある。これは、ないということのできないことである。外でもない。じぶんが、何かを「思つている」ということである。してみると、思つている「じぶん」もあるわけだ。つまり「じぶんが思う」ということだけは、どこまでも「ある」ことだ。これをないということはどうしてもできない。そこでかれは、「コジト、エルゴ、スム」(われ思う、故にわれあり)とさげびました。これが、ほんとうに物を考える考え方のものになつたのです。そして、かれが「近代哲學の父」だとされます。

9 思想の力(下)

それから少しのちの時代に、オランダにスピノザ(一六三二—一六七七) という哲學者がりました。かれの父はユダヤの商人であつたので、かれはユダヤ教の哲學と神學とをまなびましたが、のちデカルトの哲學を知つてから、人間はまずほんとうのことをじぶんの頭で、じぶんの力で考えねばならぬとさとり、それからこれまでの何ものにもとらわれない自由思想家となりました。そして

いなかひつこんでめがねの玉みがきをしながら、哲學を考えていました。かれの考えでは「デカルトは世の中のことを、物と心と二つにわけて考えるけれども、ほんとうはその奥に一つの目に見えない本體がある。これは神（心）でもあれば自然（物）でもある。物と心とは本體のあらわれかただけでちがうのだ」と考えたのです。この考え方は、これまでの近代哲學者は、やはり中世のキリスト教の神の考えをすてきれずにいたのに「神は自然だ」として、神の考え方をかえたもので、ここから、純粹の理性による哲學の道がひらけたのだといわれます。デカルトを「近代哲學の父」だとすれば、このスピノザは「近代哲學の母」だといえるでしょう。そして、この父と母との間にうまれた最もすぐれた子といつてよろしいのは、カントであります。

イマヌエル・カント（一七二四—一八〇四）は、スピノザが死んでから、約五十年のち、ドイツに生まれました。デカルトからカントまでは、百年もありまして、その間に哲學はドイツでライプニッツ（一六四六—一七二九）、ヴォルフ（一六九一—一七五三）などによつて抽象的觀念論として發達する一方、イギリスではそれより前からのベーコン（一五六一—一六二六）、ホッブス（一五八八—一六七九）、ロック（一六三二—一七〇四）を経てバークレー（一六八五—一七五三）、ヒューム（一七一一—一七七六）に至るまでに、經驗哲學として別な考え方が進みました。そしてこのカントは、イギリス（スコットランド）からドイツのケーニヒスベルヒに來



第 16 圖 カント

た家に生れ、大學で哲學、數學、神學の講義をさきました。ことにその頃の最も新しい説であつたニュートンの物理學を何よりもよこんで學んだそうです。かれはますしいくらの中から大學を卒業し、それからも家庭教師などをして、まじめに勉強をつづけました。のち大學で教えることとなりましたが、かれのまじめで、おとなしい、おもしろい講義は、いつも學生の間にたいへん人氣があつたそうです。かれは八十幾歳で死にましたが、とうとう一生、獨身の生活をつづけたのです。そして、いつも規律の正しい、きまつた生活をして、朝おきるから、夜ねるまで、しごとの時間、食事の時間、散歩の時間など、毎日すこしもちがえず、きちんときまつていました。だから、夕方、散歩の時間に、かれが並木道にあるいと、そのあたりの人々は「今日はもう時計がやつてくる時刻になつた」などと、かれのことを「時計」といつていました。ただ、あとで話しますがフランスの有名なルソーの「エミール」という本がでた時、それを讀んであまりおもしろく、手から離すことができなかつたため、その時だけ散

歩に出なかつたそうです。かれはこのルソーの思想からもたいへん教えられました。その外、かれはこれまでのいろんな學問を研究し、科學についても天文學、物理學、數學など、何でも知つて、それをじぶんの哲學のもとにしました。そしてこれによつてかれは、世の中のあらゆること、それを、哲學として考えました。だからかれの哲學は、たいへん廣くて大きくて、深くて奥にいけないほどむずかしい、根本的なことをたくさん考えているのです。中にも、考えるということ、理くつということ、論じるということ、じぶんということ、自然ということなどを、はつきりさせました。そしてまた美しいということ、人間のなさなくてはならぬこと、などについても考えました。ことに、かれの考え方のもとには、時間と空間との二つは、かえることも、動かすことも、疑うこともできないところの、一切のもののみまりであるといいました。そしてその時間と空間とは、物そのものの本體があることを説きました。このカントの哲學はたいへんむずかしい哲學ですから、みなさん、なおよく研究してください。カントの哲學がわからないと、かれからのちの人々の、考え方や思想を理解することができません。

それからまたカントは、たれよりも熱心な平和主義者でありました。かれの時代は、アメリカの獨立戰爭だの、フランス革命だの、ナポレオンの戰爭だのと、ヨーロッパじゆうがいつもはげ

しい戰爭や、ごたごたがたえなかつたので、カントは人間の不幸のうちで、一ばん不幸なことは戰爭のあることだと、なげいていました。そして「戰爭をなくして世界を平和にし、すべての人間を幸福にするには、世界じゆうの國と國とがみな同じ立場で、同等な資格で、代表者を一つところに集め、世界國家連盟をつくり、絶対に戰爭をしないかたい約束をむすび、そして軍人をなくし、大砲や軍艦をなくしてしまわなくてはならぬ」と、いつていました。不幸にしてカントのいうことはなかなか實現されませんが、しかし、だんだん世界じゆうの人間は、戰爭ほどばかばかしいことはない、カントのいうことがほんとうだと、わかつてきたようです。

III 現代の文明（上）

1 自然にかえれ（上）

第十八世紀から第十九世紀になろうとする少し前の、一七九〇年の頃に、フランスで、とてもたいへんなことがおこりました。それは大革命があつたことです。革命（レヴォリューション）とは、これまでの政治の行い方や、社會のありさまが、たちまちに、すっかりかわつてしまったことです。こんな革命は、人間の歴史になかつたことだし、またこの革命によつて、人間の生活や社會のくらし方が、すっかりよくなる道が開けたのです。だから、これはただフランスだけでなく、歴史上の大事事件でありました。

人間はひとりで生きることができません。おおぜいがよりあつて、社會をつくらねばなりません。村、町、縣、國などは、そうした社會の、いろいろな形なのです。ところがこれまでの社會には、國王とか貴族とかいつた、特權階級、支配階級がありまして、この階級によつて、一般の

人々、つまり人民が支配されました。特權階級の人々は、何のわけもないのに、じぶんたちは働かないで、働く人民のものを奪い取つたり、人民をいじめたりしてきました。しかも土地や財産の大部分を、かれらがつていて、人民にわけなかつたのです。むろん、ずつと大昔の社會は、原始共產體で、そんなことはなかつたのですが、だんだん貴族とか、王とか、支配する人間の力がつよくなり、權力をにぎつたのです。その上、ヨーロッパでは、宗教の關係から、坊さんが王や貴族と結んでいばり、むやみに人民を苦しめたのです。だが、イギリスの人民は、ずつと昔からこれに反抗して、王に向つて大憲章をつくらせ、また、クロンウェルのような正しい人が、人民のための共和政治をしたりしました。しかしそれでも、第十八世紀頃には再び王や貴族がいばりだしました。またイギリスの領地から獨立したアメリカ合衆國は、はじめから王がなく、貴族もなく、人民が人民の手で、人民の社會をつくり、人民の政治をしました。けれども、その外の世界の國々の大部分には、王、貴族、坊さんなど、特權階級ががんばつて、人民を苦しめていました。

フランスでは、特權階級の勢力が最も強かつたのです。その頃、フランスの人間は、三つの階級に分れて、第一階級は王と貴族とで、かれらの數は、フランスのすべての人口の二十分の一も

ありませんのに、フランスの土地の半分もつていました。そして、そのかしらの國王ルイ十四世は、七十年もの長い間、わずかな貴族たちと、宮廷で、じぶんたちだけのたのしい、ぜいたくな生活をしながら、むやみに外國と戦争をして、たくさんの人を殺したり、税金をとつたり、人民を苦しめたりしていました。第二階級は坊さんでした。フランスの土地の三分の一はお寺のもので、それによつて坊さんたちはぜいたくをしていました。それから第三階級は、あたりまえの多くの人民たちです。王、貴族、坊さんの數は、みなで二三萬人であるのに、人民の數は約二千五百萬人でありました。ところが、この人民の階級にまた、ブルジョアと農民と、二つの階級がありました。ブルジョアは、ごくわずかの數でした。かれらはみな、都會に住んで、富んだ商人とか、工場のもち主とか、辯護士とかでありました。つぎに、農民階級は、その數も一ばん多く、フランスは、この農民でできているといつてもよろしかつたのです。フランスの人民の大多數は、かれらでありました。また農民の外に、職工などの働く人々も、たくさんありました。ところが、これらの、最も數の多い、フランスにとつて最も大切な、働く人民のありさまはどうでしたか？ かれらは王、貴族の戦争とぜいたくとの費用のため、また坊さんのために、いつも苦しめられました。ことに農民が最もいじめられました。その頃のヨーロッパには、まだ昔

からの農奴の制がありました。農奴は農業のために働かされる一種の奴隷です。ギリシャ、ローマの奴隷ほどにひどくされませんでした。同じ人間でありながら、ほとんど人間として取りあつかわれず、牛馬と同じように、つらいしごとをさせられ、ろくな食べものもあたえられません。かれらは毎日牛馬と共に、畑を耕させられました。しかもその土地をもつことも、財産をもつことも許されません。人民としての権利も、一つもみとめられません。かれらはいつも一つのきまつた土地についたものでした。土地と一しよに賣つたり買つたりされ、一種の品物としてとりあつかわれました。土地をもつ地主たちは、農奴を、麥や豆と同じく、地主の財産と思ひました。農奴の力で、麥や豆や、農産物ができ、そのおかげで生きることができたのです。王や貴族も、それによつてぜいたくができたのです。しかも農奴は、牛や馬と同じでした。生産させてはすつかり奪いとられていたのです。フランスには農奴でない農民もいましたが、かれらの生活もみじめでした。土地の大部分は王、貴族がもち、農民はそれを借りて、耕した賃金をわずかにえるだけでした。せまい小屋の、たつた一室、台所も寢間も一しよです。かたい木のゆかに藁をしいて、着物のまま、ごろりとねむるのでした。また、昔から王、貴族は、いなかの農村に、廣い土地をもち、そのまん中へ城をきすき、いばつていました。そこで農民をいじめ、たくさん

の税金をとりました。一年じゆういつでも、馬に乗り鐵砲をたすさえ、鳥や獸物を大じかけにとりました。そのため、せつかく農民が麥や豆をつくつても、畑をすつかり荒らされます。またフランスの人民は、旅行をするため、川をわたり、舟に乗ると、貴族たちは、たいへん多くの金をとつて、橋を通らせ、川で舟をこがせることを許しました。パンをつくるため、粉をひこうとしても、風車や水車は地主のもので、なかなか貸してくれません。パンを焼くかまも、村長などの特權階級がもつて、その者のいうことをきかないと、つかわれなかつたのです。フランスの農民はそのためみなこまつていました。

ところが人民は、いつまでもいじめられてがまんをしていられません。フランスに、こういう人々のため、人間の權利を主張する人が、幾人もあらわれました。モンテスキュー(一六八九—一七五五)、ヴォルテール(一六九四—一七七八)、ジャン・ジャック・ルソー(一七一二—一七七八)でありました。みな、フランス革命の前に死んでいます。しかし革命はこの人々が、人民に正しいことを教えたためにおこつたといつてよろしいのです。

2 自然にかえれ (下)

モンテスキューは、若い時イギリスで勉強しました。かれはイギリスの政治のやり方がたいへんよいことに気がつきました。そこで「法の精神」という本をかきました。それによつて、政治は、行政と立法と司法とが獨立して、たがいにはつきり分れねばならぬことを説きました。今、これが一ばん大切な、國の政治のやり方のもとになつていて、それによつて得られた人民の幸福はたいへん大きいのです。ヴォルテールは三十二才の時、イギリスに行き、ニュートンの引力説を知つてたいへん驚きました。「世界をひつぱり、そしてつりあいをとつて秩序と平和とを保たせているのは神の力でなく、引力だ」、「これを發見したニュートンは新時代の神さまだ」といいました。また「力すくで人間を服従させる者は悪人で、ほんとうのりくつを明らかにしてくれる者は善人だ」、「生活はできるだけ簡素にすべきである」、「戦争ほどにくむべきものはない」などともいいました。かれは、フランスの人々に、正しくない考え、かたよつた考え、および迷信をすてなくてはならぬことを、よく説きました。フランス人はこれによつて、今のフランスのいろいろなまちがつたことを知りました。

しかし最も大きな影響をフランス人の心にあたえたのは、ルソーでありました。かれはルイ十四世の死んだ頃、ワシントンよりも二十年前に生れました。ルソーはまず「自然にかえれ」

と教えました。そして「エミール」という有名な本をかいて、自然のままに育つたこどもの話を
つくりました。「今の人間は、やたらにうわべを飾つたり、よけいなものをたくさんつけ加えて生
活している。それでは、むだが多くて、ほんとうの生活ではない。昔のギリシャのスパルタ人の
ように、からだがじょうぶで、心がしつかりして、うそや、飾りけのない生活をしないでなら
ぬ。文明の大部分はうそからできている」と、いいました。そのはずです。当時のフランスは文
明の中心で、藝術などがたいへんさかえましたが、それはすべてルイ十四世などによる、うその
飾りが多かつたのです。國王そのものが、頭にかつらをかぶり、足にハイヒールをはき、杖をた
ずさえて、ダンスをしながら政治をし、戦争をし、そんな費用をすつかり人民からとりたててい
るのだから、うそと、むだと、飾りとだけの世の中であつたのです。藝術もそうでありました。
いや、國王そのものが、人民にとつては何のやくにもたたない、むだな、いらぬものでした。
だから、ルーソーは「まず裸になれ。じょうぶになれ。そして寒かつたら、寒さを防ぐだけに必
要な、飾りのないきものを着よ。ひもじかつたり、栄養になるだけに必要な、ぜいたくでない食
物をたべよ」と、といたのです。

ルーソーはまた「天賦人權」ということを説きました。「われわれ人間には、生れるからちや

んとさすかつた権利があつて、みんなその権利によつて生きています。だからだれにもみな同じよ
うな権利があり、また同じような自由がある。これを天から興えられた権利、つまり天賦人權と
いうのです。しかし人間は、より合つて社會をつくつています。一人では生きることができない。
そして社會では、みながじぶんの権利を主張しあつていたのでは、けんかばかりで、なかなかう
まく社會が成り立たない。だから、みなでこの権利をもちよつて、だれか代表になつて、この權
利を代理して政治をやることにする。それで、その人民から選ばれた代理者が、大統領などにな
つて、政治をすべきである。つまり、王や貴族がかつてに人民におしつけて、じぶんでかしらに
なるのはまちがつている。人民の政治は人民がやるのだ。ただ適當な人を、みんなで大統領にえ
らんで、人民の代理として、政治をやつてもらふのだ」というのです。このことは、かれの「民
約論」という本にかいてあります。

ルーソーがこんなことを唱えだしてから、いじめられてばかりいて、権利も自由もみとめられ
なかつたその頃のフランスの人民は、だんだん、ほんとうのことをさとりました。またその頃、
ディドロ（一七三三—一七八四）という人が、多くの學者たちと相談して、「百科全書」^{フランスの}という、大きな
本を何冊かつくりました。それには、當時の新しい知識をすべて集めて、だれにでも、何事でも

すぐはつきりわかるように書きました。フランスもこの頃は、学校もゆきわたらず、印刷物も少なく、新聞紙もまれで、人民は世の中のことや、ほんとうのことを知る機会がなかつたのです。この百科全書ができてから、農民たちまですつかり常識が発達し、人間の行いとか、社会とか、政治とか、経済とか、また権利、義務、自由、平等などのことに、たちまち目がさめたようになりました。それで、これまでのように、王、貴族にいじめられているのは、じぶんたちがいくじないからだ、これからは大いに立ちあがつて、じぶんたちの、正しく生きる権利をえるために、特権階級と戦わなくてはならない。こういうことを、フランス人民はみな考えるようになりました。すると、十年ばかり戦っていた合衆國が、とうとうイギリス軍に勝つて、獨立することになりました。この獨立戦争には、フランス人もたくさん、獨立軍に味方をしていましたので、ついに獨立に成功して、國王のない、民主主義國家が人民の手でつくられたことには、フランス人はみなたいへんびつくりしました。そこで、こんどはじぶんたちの國フランスの革命に、さらに熱心となつたのであります。

3 フランス大革命

フランス大革命のおこつたのは、合衆國の獨立から七年目です。はじめて大統領に、ワシントンがなつたその年です。

この時のフランス王は、ルイ十六世（一七五四—一七九三）でありました。その王妃はマリー・アント

ネット（一七五五—一七九三）といいました。ルイ十六世は、第十八

世紀のはじめ（一七一五）に、ルイ十四世が死んでから、約六十年のち（一七七四）王となりました。その時二十歳でした。それまでにフランスの政治はすつかりみだれていました。かれの祖父のルイ十五世が王でありましたが、この人は、あたまがわるかつたので、政治はすつかり、かれの愛する幾人かの女の人がかつてにやりました。そして、外國とつまらぬ戦争をして、フランスの領地であつたインドとカナダとの大きな土地をとられてしまいました。戦争に多くの費用をつかい、またりつばな廣い領土を奪われ、おまけに貴族、坊さんにいじめられて、農民はすつかり貧乏



第 17 圖 封建制度の破かい

になり、苦しみのどん底におちていました。かれらは、あたりまえのパンを食べることはできないので、糞を粉にしてつくつたまっ黒い砂のようなパンを少しずつかじりながら、しかも王、貴族の毎日のぜいたくな着物やさかもりのための、たくさんの税金をむりにとられていました。もしそれに不平でもいわうものなら、すぐとらえられて都のパリにあるバステューユの刑務所に投げこまれ、死ぬるまで、このくらい、つめたい石の室から出ることはできなかつたのです。そして、このうらみはみな、國王と貴族とに向けられました。

むろん、王や貴族がみな悪人であつたわけではありません。イギリス、アメリカなど、世界はだんだんかわりつつあり、またフランスの人民も、いつまでも目かくしされてはいなかつたし、こんなに苦しめられたのでは、もう革命の外に、やりかたはないありさまになつていました。しかるに、王や妃は、そんなことを何ごとも知らなかつたのです。ことに妃のマリー・アントワネットは、オーストリアの女皇マリア・テレサという、その頃ではえらい女といわれていた人の娘です。皇女ですから、わがままだけでぞだてられ、りつばな家庭教師がいく人もついていたにかかわらず、勉強が大きらいで、ちつとも字をかかなかつたのです。じぶんの名さえも、まちがわずにかくことがむずかしかつたのです。今も、この人の手紙がのこつていますが、へたな字で、ま

ちがいでらけです。妃になつた時は十九歳でした。たいへん美人で、氣もちの快活な、あそぶことのできな人でした。ある時、おつきの人が「貧乏人はとてもあわれなものです。パンも食べることができないのです」と話しますと、かの女は、「それじゃ、お菓子を食べたらよいじゃないの」と答えたそうです。かの女の結婚は、政略結婚といつて、國と國との政治上のつごうから、王も妃も、何も知らないで、結婚させられたのです。昔から、西洋でも、日本でも、中國でも、王、貴族などの結婚はその人たちの、お互のほんとうの理解や愛からではなく、政治上のつごうから、仲のわるい親と親との間などで、わざと結婚させられることが多かつたのです。そのため親たちが戦争になつて、せつかくの結婚は悲しい不幸なことになる例が多かつたのです。

その時、フランスはこのままではつぶれそうになつたので、王は貴族、坊さん、ブルジョアジイを集めて會議を開きました。しかし、ほんとうのことを考えている人々は、そんなことではとてもフランスは救われなれないと思ひました。そしてそれと別に、パリに集つて國民會議を開きました。そして國民の權利、自由について相談しました。イギリスには、ずつと昔から國會があり、フランスにもそれに似たものはありましたが、國王と貴族だけで政治をしていましたので、國民の會議はこれがはじめてでした。けれどもこの時になつての相談は、もうおそかつたのです。人

民は、ブルジョアジーが集まつての相談で、じつとがまんしているわけにいきませんでした。國民會議は、金持がかつてな相談をするところだ。われわれはそんなことはどうでもよい。われわれは、われわれの力で、自由と権利とをえなくてはならぬ。まず、バステューユの刑務所をこわして、何の罪もなしに、長い間おしこめられている、あわれな、われわれ人民のなかまを救いださねばならぬ一と、口々に叫びました。そして「バステューユへ！ バステューユへ」と、わつとおしよせました。刑務所の壁をこわし、番人を殺して、中にとらわれている人々を、すつかり出しました。それから、殺した番人の首をきつて、棒のさきにし、これをかつぎながら「國王の味方は、みんなこのようにさしてやる」とわめきながら、パリの町をねりあるきました。これが一七八九年の夏のことです。

この知らせが、いなかに傳わると、そこでもここでも、貴族の城などを、農民たちは焼きうちしました。貴族たちは、びつくりして、うろうろと逃げまわりました。その時、王と妃とは、ルイ十四世の建てた世界で一番美しい宮殿、ヴェルサイユで、たのしい、夢のような生活をしていました。そこへ、一人の貴族があたふたとかけてきて「王さま、革命です」といいました。王は、平氣な顔で、「反逆か？」^{レベリオン}。「いいえ、革命です」^{レヴォリュション}。「何のことか？」^{レヴォリュション}。といつていました。

4 人 權 宣 言

一方、國民會議では、人民たちのたいへんなさわぎをきくと、このままではどんなことになるかわからないと、すぐに、これまで貴族のもつた、封建制度のいろいろな特權を、すつかりすててしまいました。つぎに「人權宣言」というものを定めました。この宣言はフランス革命で一番大切な一つで、歴史上最も重要な宣言なのです。それは「すべての人間は、みな生れた時から自由で平等である。主權は國民にあつて、國王にあるのではない。また國民だけが法律を定める權利がある。その法律はすべての人間に同じものである。誰れでも、かつてに縛ることはできない」などというようなことを定めたものです。これは、人間の自由、平等の權利を、はつきりとみとめた、最も意味のあるものです。この時から、文明に一段の進歩があつたといつてよろしいのです。

すると、ここに集まつた人々は、この宣言をかけた紙をささげながら、みんな氣ちがいのようになつて、ヴェルサイユに、わつとかけつけました。そして、その王と妃との室へ向つて石を投げつけながら、「われわれのパンをかえせ！」とどなりました。あの玉のように美しい大理石の



第 18 圖 ヴェルサイユ宮殿におしよせるパリ市民

階段を、みよごしながら、どしどし王の室に入りこみました。とうとう王と妃とを、室からひきずり出して、パリにつれて行き、テイルリ宮の一室に投げこんでとらえてしまいました。この時には、パリの女たちも、おおぜい押しよせました。これは一七九一年の夏のことです。それから二年の間、王も妃もここでとじこめられたままでした。そして、みじめな、かわいそうな生活をつづけました。一どは、そつとのがれてフランスから逃げだそうとしましたが、見つかつて再びとらえられました。すると、だれからともなく「フランスにはもう國王はいらない。共和国だ」といいだしました。

その間に、新しい憲法ができて、王の権利はほとんどなくなり、新しい議會が召集されました。もう、革命賛成の人民だけが政治の権力をもちましたが、しかしこれ

がジロンド黨と、ジャコバン黨と二つにわかれて、はげしい争いをするようになりました。そして、ジャコバン黨は共和政治を主張して、フランスをかれらのかつてにしようとししました。ロベスピエール、ダントン、マーラーなどがそのかしらでした。ところでフランスが共和國になろうとすると、その頃ヨーロッパで最も勢力のあつたオーストリアとプロシヤとが、まだ國王の専制政治の國であつたので、聯合をして大いに反對しました。ついにフランスとこの聯合國とが戦争をはじめました。すると、とらわれているルイ十六世が、聯合國に味方をしたとのしらせで、とうとう議會は王をやめてしまいました。そして共和政治を布告しました。それだけでなく、ルイ十六世に死刑の宣告をあたましました。ついに王は、ギョイヨテューヌという、重いおそろしい首きり機械で、首をきられてしまいました。一七九三年一月のことです。すると、どこからともなく、全フランスに「共和国萬歳！」が高くさげられました。妃のマリー・アントワネットも、それから九箇月ののち、同じようにギョテューヌの悲しい運命をうけました。

けれども、革命のさわぎは、これで終りませんでした。それからしばらく、革命を行つた人々の間に、はげしいごたごたがつすいて、數千の人が、ギョイテューヌにのせられました。革命のため、最もはたらいだダントン、マーラー、ロベスピエールなどという人々も、だんだん殺され

ました。この頃のことを、恐怖の時代テロリズムといひます。この大革命のさわぎの間、フランスはまるで大あらしと大地震とが一どにきたようで、だれ一人として、じぶんのいのちの安全を信ずるものはありませんでした。

けれども、この六年間の大革命によつて、フランスは、これまでの封建時代からの、いろいろなじやまになるものがとりのぞかれて、すっかり新しい、せいせいした、時代がこようとしていきます。まず、中世の諸侯からの貴族階級と、坊さんとの特権がなくなりました。キリスト教のお寺も、これまで獨立していたものが、みな國家のお寺になりました。その上、國王がなくなりまし
た。そして一方、國民議會ができ、人權宣言が發布され、第三階級とされた一般人民が、政治の實權をもつようになりました。農民も、農奴も、自由となり、平等な權利をもつようになりました。けれども、この革命は、ブルジョア革命といわれるように、まだまだフランスの働く者や、貧しい農民を、ほんとうにひきあげ、解放する革命ではありませんでした。それだけでなく、まもなく、ナポレオン帝政時代という、奇妙な時代が、このあと數十年、つづくことになりましたが、それにしてもフランス大革命が、世界の文明の進歩の上にあたえた影響は、これまでのどんなことよりも、大きかつたといふことはできるでしょう。

5 せいひのひくい大將

一七九四年、というと、フランスでは大革命がはじまつてから六年目のこと、ロベスピエールの死刑によつて、大あらしは、ひとまずおわりました。しかしフランスの中のごたごたは、とにかくしすまりましたが、



第19圖 ナポレオン

こんどはフランスにとつて、革命よりもつと大きい困難なことがおこりました。それは、この革命をいいがかりにして、ヨーロッパの各國が、聯合をして、フランスに攻めてくることになつたからです。そこでフランス

の人々は、これこそたいへんだと、みないきている心もないありさまでした。

すると、そこへ、一人の、せいのひくい、目の大きい、奇妙な青年があらわれました。そして手をあげて、みんなをなだめ、大きな聲でさげびました。「フランスの國民たち、もう革命さわざはやめろ。そしてわたしについてこい！」と。この青年は、二十幾歳で、せいの高さがやつと一メートル半ばかり、しかもその顔は、何ともいえない男らしい元氣にみちていました。みなさんこの青年はだれでしょうか？

それはナポレオン・ボナパルト（一七六九—一八二一）です。かれは第十九世紀のはじめにあらわれて、皇帝にまでなり、一時はヨーロッパをみなじぶんのものにしようとした、歴史上にもあまり例の少ない人間です。かれはまったく、大風のようにあらわれて、大風のように去りました。

ナポレオンは地中海のコルシカという、フランス領の小島で生まれました。この島はもとフランスの島でなかつたのです。ナポレオンも子供の時はイタリヤ語でそだちました。かれの生れる一年前に、この島がフランス領となりましたので、かれもフランス人として、少年時代、フランスの軍人學校に入りました。かれの家は貧乏でした。學校には富んだ貴族の子供が多かつたので、いつもばかにされていました。かれは一方、貴族をにくむと共に、またくやくしくもあつて、そこ

でちんと勉強をしました。がまん強い、まげぎらいな人間でありました。「困つた」ということをけつしていませんでした。また「わたしの辞書のなかには、『できない』ということばはない」といつていました。つまり、「人間はやるうと思つてやれば、どんなことでもできるものだ。できないことはないのだ」との意味です。かれは、この意氣で、なんでもかんでも、むりにも思うとおりのおこをやるうとしました。そして一どはやりとげましたが、とうとう最後に大失敗して、あわれな死にかたをしました。學校時代のかれは、數學のむずかしい問題を出された時、じぶんの室にとじこもつたまま、三日三夜の間、じつとして、食事もろくにしないで、考えてばかりいました。そしてとうとう答えを得たということでした。かれは、陸軍の將校になりますと、まもなく大革命がおこりました。その時、パリにいましたので、國民會議のそとに立つて、そこへ寄せかけてくる群衆を、ひとりでがんばつて追いのけました。そして、二十八歳の時に、將軍にされました。

ところが、せつかく革命さわぎのまだおわらないうちに、ヨーロッパの諸國が、フランスに攻めこむことになつたのです。その頃のヨーロッパにはみなまだ國王があり貴族があつて、政治をしていたのに、フランスだけが、アメリカ合衆國のまねをして國王をやめ、その上、國王を殺し

てしまつたのでずから、外の國の王たちはみな、フランスをにくみました。それに、こんどはじぶんの國の人民たちが、フランスのまねをして革命をおこし、國王や貴族を追つたり、殺したりするのではないかと、不安に思いました。そこで、オーストリア、プロシヤ、イギリス、オランダ、イスパニヤなどの諸國の王は、連合をしてフランスを攻め、すでに國境からどしどし入りこみました。さいわいに、プロシヤとイスパニヤとは、フランスと仲なおりをしましたが、オーストリアとイギリスとは、戦争をやめませんでした。それでフランス人たちはこまつていました。この時、「みんな革命さわぎをやめろ。そしてわたしについてこい！」とさげんだのです。それは一七九六年のことです。かれはすぐオーストリア軍に向つて兵を進めました。その時、北の方からも別な將軍が進みましたが、みなまけました。ただ、南のイタリアの方から進んだナポレオンだけは、困難な山道をすんすん進み、イタリアから、ついにオーストリアに入りこみました。とうとうオーストリアがまけて、降服しました。

それから、かれは一たんフランスにかえり、さらにエジプトを攻めとろうとしました。それはイギリスの一ばん大切なインドに行くに、はどうしてもエジプトで連絡しなくてはなりません。ここをとられると、イギリスはたいへん弱るからです。うまくエジプトをとりかけていると、フ

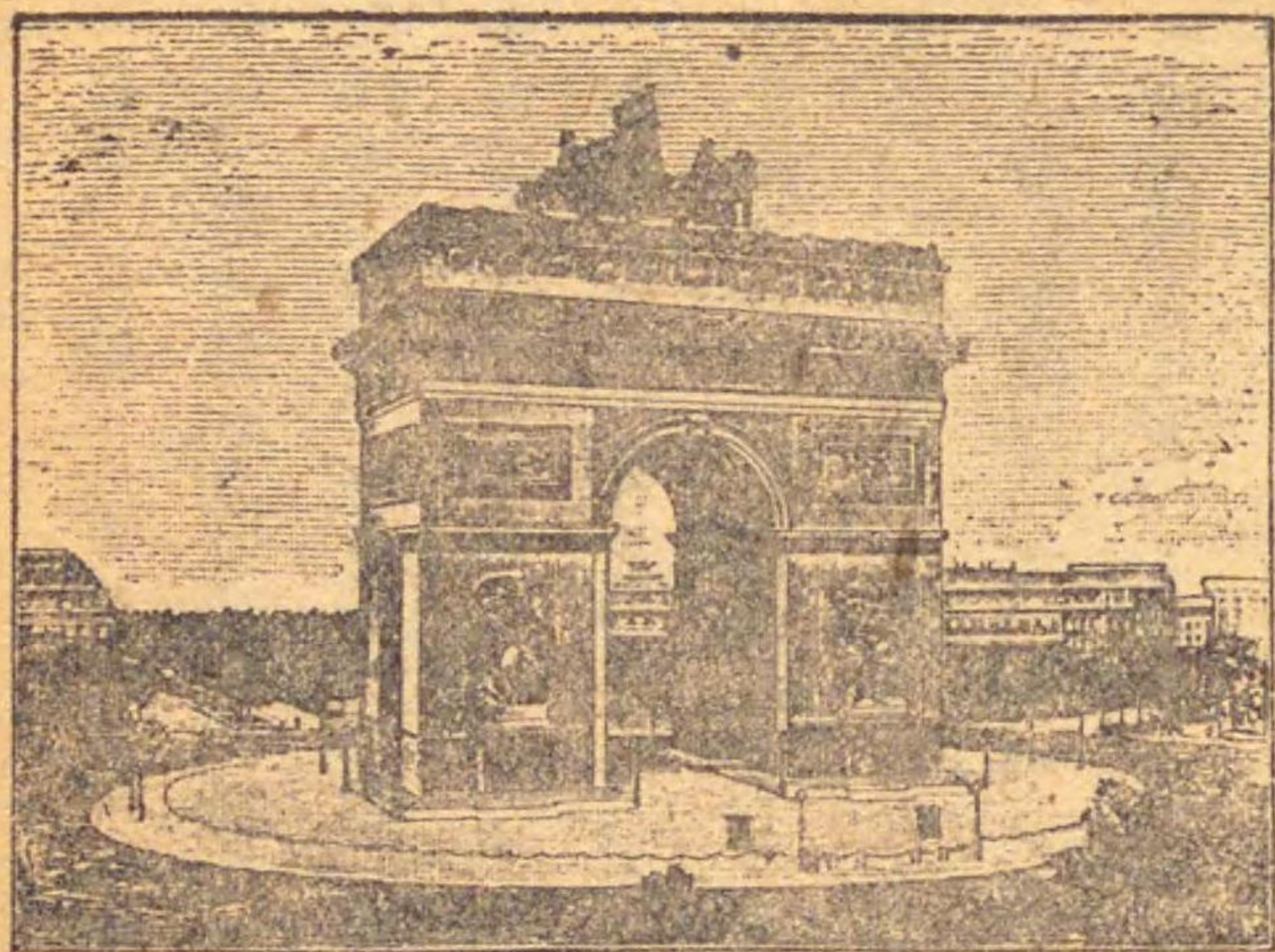
ランスの軍艦が、地中海ですつかりイギリス海軍にしずめられて、あべこべにナポレオンがフランスと連絡をきられてしまいました。そのまに、イギリスは、ロシヤ、オーストリア、ポルトガルと同盟をして、すんすんフランス國內に攻めこみました。ナポレオンはすぐ、こつそりとフランスにかえり、じぶんがフランスの政治をやらなくては、今にイギリスなどからつぶされ、亡びてしまうと考えました。そこでこれまでの政治のやり方を変え、じぶんにたいへんな人氣のあるところから、選挙によつて第一執政官になりました。これで、政治も軍事も、みなかれの権力になつてしまいました。だから、フランスは、共和政の形だけでも、實際は帝政のようになりました。

ナポレオンはこの勢をもつて、一八〇〇年、アルプスをこえて再びイタリアに入り、大にオーストリア軍をやぶりました。別に北から進んだ將軍も、オーストリア軍に勝つたので、オーストリアはまた降伏しました。ロシヤも同盟からはなれ、イギリスも中なおりを申し出でましたので一八〇二年には、すつかり平和になり、これまで、不安のなかにあつたフランスは、ほつとひとすきつきました。

かれが二どめのイタリヤ入りの時のことです。ナポレオンは、二千年前のポエニ戦争に、ハンニバルという大將が、むりに越してローマ軍を攻めたので有名なアルプスの、高い、けわしい山道を、重い大砲をひくたくさんの兵をつれて、むりにのぼろうとします。兵たちは、「そんなむちやなことが出来るものでない」と、どうしてもいうことをききません。すると、ナポレオンはどなりました。「わたしの進むところには、アルプスなんかないのだ！」と、すんすんさきに立つて、馬を進めました。とうとう軍隊はみな、そのあとから、この高い、けわしい山をのりこえました。

そこで、ナポレオンがフランスにかえると、かれの評判はたいしたものですが、かれはフランスを救つた生き神のように思われ、かれのいうことは何でもきかれました。そこでかれは終身の執政官にえられました。そして、フランス國內をよくすることに、うんと力をいれました。商工業がさかになり、藝術もおこるし、またたくさんのりつばな學校を設けました。ことに、かれが多くの學者を集めてつくつた有名なナポレオン法典コードは、それからのちの、世界の法律のてほん

とされます。これまでも法律はフランスにもいろいろあつたし、各國でもたくさんありました。しかし、民法をはじめ、刑法、商法など、大切な法律は、一ばんよくまとまつた、形のととのつたもので、これによつて定まつたのです。



第20圖 パリのがいせん門

そういうわけで、ナポレオンは、もう事實上、フランスの一ばんえらい人とされていきました。そこでづいに、一八〇四年、かれはフランス國民からおされて、フランス皇帝となりました。そしてイタリヤの國王をかねました。その時かれは、ただフランスの皇帝であるだけでは満足しませんでした。かれは、近いうちに、きつと、全ヨーロッパの、いや全世界の皇帝となつて、この地球の上を、かれひとりで自由自在にしてみたいと思つていたのです。ちようど手のひらの上でこまをまわすように、地球をかつてにまわしてみたかつたのです。

かれが皇帝となるということは、つまりシャルマー

ニ、大帝のあとつぎとして、ローマ皇帝の稱號を受けることなのです。そこでその儀式は、パリにある、世界で最も有名なキリスト教の大寺、ノートル・ダール・ド・パリで行われ、ローマ法皇から、帝の冠をさすけられました。その時またかれの皇后ジョセフィンも冠をさすかりました。これによつて、フランスでは、一たん國王をなくしたのに（一七九〇年）十五年目に、再び專制君主ができたのです。

さあ、そうになると、たいへんなのは、ヨーロッパの國王たちです。こんどはじぶんの國で革命のまねをされるぐらいなことではありません。今やナポレオンのために、ヨーロッパの國という國は、みんな奪われそうになりました。そのうるたえかたはたいへんなものです。それで、各國はいつしよになつて、ナポレオンの侵入を防ぎました。ナポレオンは、まず近くのイギリスを攻めほろぼそうと、トラファルガーで大海戦をしました。ネルソン提督のためにすつかりまかせられました。しかし、陸軍はじぶんが大軍をひきつれて進みました。そしてイスパニヤとドイツとオーストリアとをやぶりました。とうとうオーストリアに攻め入つて、その皇帝フランシス二世に、これまでの神聖ローマ帝國の名をすてさせました。ここにオットー大帝からすつとすいてきた神聖ローマ帝國は、一八〇六年で、なくなつてしまいました。これは、中世の、一ばん目

につく遺物が、地球の上から永久にきえてしまつたことなのです。

ナポレオンはさらにプロシヤと戦い、これをまかして、ドイツをめちやめちやに分けました。こうしてかれは、今がその勢いの一ばんさかなな時でありました。そしてこの勢いで、こんどはすつと東へ、北へ、とうとうロシアまで攻めこみました。

それは一八一二年のことです。かれはすんずん攻めて、ついにロシアの都モスクヴァに進み、ここを占領しました。すると、市民はすつかり町に火をつけて焼きはらつてにげました。その時は冬でありました。ロシアの寒さはとてもひどく、ナポレオンの軍隊は、雪の降る中で、寝るところもなく、食べ物もなく、その上、長い行軍と戦争とで、兵はすつかりつかれて、つぎつぎとたおれました。さすがのナポレオンも、やむをえずひきかえすことにしました。すると、あとからロシアの強い騎兵が追つてきたので、フランス兵は、ほとんど途中で全滅してしまい、そのみじめなさまは、お話にならなかつたそうです。

こうしてかれはすつごとパリにかえりました。しかしそれでひるむナポレオンではありません。すぐに兵を集めて、再び東へ攻めて出ましたが、こんどは負けつすけとなり、プロシヤ、オーストリア、スウェーデンの連合軍が、フランス國內に入りこむやら、イギリス軍が上陸するやら

で、とうとうパリを占領されてしまいました。そこで、一八一四年、フランス皇帝の位を退き、故郷のコルシカ島に近い、エルバというごく小さい島にすることになりました。フランスでは、ルイ十六世の弟のルイ十八世が、王になつて、各國と仲なおりをしました。

ところが、かれはそのあくる年、再びパリにかえりました。パリではルイ十八世がだめなのでよろこんでかれをむかえ、またもや皇帝としました。さあ、これをきいて、各國はまたナポレオンと戦争をはじめました。イギリスとプロシヤとの軍が、ウォータールーで、ナポレオンの軍をやぶり、パリを占領しました。ナポレオンは、アメリカに逃げようと思いましたが、見つかつて、イギリスに降服しました。そこでヨーロッパの各國は、かれをセント・ヘレナという、イギリスのはるか西の、大西洋にある離れ小島に流してしまいました。フランスでは、ルイ十八世がまた王となり、各國と仲なおりをしました。ナポレオンは、一八二一年に、この島で病氣で死にました。しかしフランスの人たちは、いつまでもかれのことを忘れませんでした。一八四〇年に、かれの遺骨をパリに移して、アンヴァリードという、りつばな、大きな墓を建てて、今もていねいにまつてあります。それよりも、ナポレオンの記念となるものは、パリのエトアールの凱旋門です。これは世界で最も壯大な門で、一八〇六年にナポレオンが、じぶんのでがらを記念するた

めに、建てはじめたもので、できあがつたのは、三十年のちでした。高さ約二〇メートル。ぎつしり彫刻で飾られ、世界の美術として有名であります。このところから、いくつもの美しい大道が、太陽の光線のように、パリの全市に向つてまつすぐにひろがっています。

ナポレオンは、大革命のあとにおいて、フランスの大そうじをしました。そしてまたヨーロッパの大そうじをしました。かれの大そうじによつて、これまでのヨーロッパの、中世的なもの、封建制なもの、いらなくなつたじやまなものなどは、すっかりなくなり、國と國との關係も新しくなりました。それから、第十九世紀の世の中は、様子がちがつてゆきました。國民の権利をおもんじ、また學問、藝術などが發達し、ことにあらゆる方面の科學がさかえて、現代文明といわれるものが、すばらしく發達したのです。これは、フランス大革命と、ナポレオンの出たことが、大きなはたらきをしています。そこでつぎに、第十八世紀の、精神上、物質上の文明について話しましょう。

7 めくらの音楽家

これまで、文明に、精神文明と物質文明と、二つの方面のあることを、ちよいちよい話しまし

た。精神文明とは美術、文學、芝居、それに哲學、宗教などのこと、そのほかいろんな學問があります。物質文明とは、政治をやるとか、商業、農業、あるいは物理や化學や醫學やを、實際に應用していろんなものを製造するしごと、技師、醫者、さういう方面のしごとだといつてよろしいでしょう。その精神文明のうち、宗教や美術のことをいくらか話しましたが、第十九世紀になつて、この方面で特に發達した一つに音樂があります。音樂も、べつに新らしいものでなくて、日本でも、中國でも、西洋でも、數千年の大昔から、いろいろなすぐれた音樂がありました。しかし、西洋で近代音樂の發達したのは、やはりルネッサンスごろからのイタリアでありました。ことに、そこで歌劇オペラが發達し、またヴァイオリン、ピアノの音樂が進んだので、中世の音樂とはすつかり別なものになりました。

しかし、ほんとうに音樂の發達したのは、第十八世紀のドイツ人によつてであります。まず、ヘンデルとバッハとの二人がありました。ヘンデル（一六八五—一七五九）は、ドイツのハルレというところに生れ、のちイギリス人になつて、そこで死にました。父は理髮屋と齒科醫とをかねた人で、音樂のことはあまり興味をもつていませんでした。しかしかれは生れるから音樂に特別な才能がありました。六歳の時のことです。かれは、ひるまは父にしかられるので、夜になつて、みんな

が寝てしまつたと、じぶんの室にされていた、屋根裏の小さい室に、そつとおもちやのような小形のオルガンをもつてきて、毎ばんこれをならしました。初めは父たちも氣づきませんでした。家の高いところで、毎ばん、たいへんうまい音樂がきこえるので、そつとあがつて見ると、幼いヘンデルは、ひとりで一しようけんめいでなつています。しかもその音は、どんなおとなにもできないような、まことにうまい手つきで、美しく鳴らされるのでした。父もこれにはすつかり感心しました。それから特別に音樂の先生に教えていただいて、ますます勉強させました。十四、五歳の頃には、もう世界で有名な音樂家とされていきました。二十歳でおもしろい歌劇オペラを四つもつくつて發表しましたが、どれも大評判でした。そのあくる年イタリアに留學して研究することになり、そこでまた幾つも歌劇を發表して、世界じゆうの人にほめられました。ついに間もなくイギリスの國王からまねかれてロンドンに行きました。そして國王の一族の人々に音樂を教えていましたが、のち十八年間に三十いくつの歌劇を發表したので、これから西洋には歌劇が大流行となりました。しかしあまり勉強をしたために、重いしびれる病氣になり、のちにはまったく目が見えなくなつてしまいました。かれはそれでもなお音樂をやめませんでした。死んでからは、イギリスに最もてがらのあつた、世界的にねうちのある人を葬むる、ウェストミンスター大

寺院に葬られました。

かれと同じ頃、ドイツにもう一人の大音楽家がありました。バッハ（一六八五—一七五〇）であります。音楽の歴史では、ベートーヴェン、ブラームスとあわせて三大Bといわれます。アイゼナッハというところに生まれました。かれは父も音楽家でありましたので、ヴァイオリンを学びました。十歳の時、父がなくなつてから、やはり音楽家であつた兄の家に行きましたが、音楽がすすんうまくなつて、ついに兄をおいこしたので、すいぶん兄にいじめられました。それでもますます勉強して評判を高くしましたので、ワイマール公の宮廷音楽家となされました。かれはヴァイオリンとアッコデオンとが、最も得意でありました。その頃、フランスに有名なアッコデオンの大家の、マルシャンという人があり、バッハの評判をきいて、アッコデオンの競争をするといつてきました。ところが、いよいよとなると、マルシャンは、まず、こつそりと、バッハのやるのをぬすみ聞きして、これではとてもかなわないと、しりごみをして、いよいよ競争という前の晩に、フランスへにげてかえつてしまいました。それがため、バッハの評判はますます高くなりました。かれの奥さんも、有名な音楽家で、バッハのつくつた曲は、みな奥さんが清書したそうです。かれには二十人という、たいへんおおせいの子どもがいましたが、そのうち三人は世界的

の大家となり、ほかの子どもたちもみな音楽の才能にとんでいたそうです。まことに驚くべき音楽家ぞろいの一家ではありませんか。ところでこのバッハも、年をとつてから目くらになりました。そういえば、日本でも西洋でも、音楽家には目のわるい人が多いようです。あれは、すべての力が耳にあつまるので、目の必要がなくなるからでしょうか？　そうでしょうかね。バッハも病氣になつて死ぬる時まで、音楽の勉強はやめなかつたそうです。

この人々が死んだ頃に、ドイツのとなりのオーストリアの國に、モーツァルト（一七五六一—一七九一）が生まれました。かれはハイドン、ベートーヴェンとともに、世界の三大音楽家といわれます。音楽家はたいいてい、五、六歳の頃から、外の人とちがつた音楽の才能をあらわすものですが、かれも四歳になる時、驚くべきりつばなピアノの音を出して、たいへんな評判になりました。かれはまたその頃から、とてもすぐれた音譜をかいて、世に知られていました。かれの父と姉とも、音楽がじょうずでありました。少年の頃、三人で合奏して、方々を旅行しました。各國の王の前でピアノをひきますと、あまりにこの少年がうまいので、王や妃は、かれを抱いたりして、まるで夢の國の王子でもきたようにもてはやされました。かれは大きくなつてから、たくさんオケストラの樂譜をつくりました。また歌劇も多くかきました。オーケストラのシンフォニーもやりました。だから、

その頃の音楽會では、いつでもモーツァルトの歌をうたわないと、音楽會でないように思われました。今でもかれのつくった音楽や歌劇は、しばしば行われています。かれはいつも音楽より外のことは考えなかつたので、生活には貧乏してしまいました。死んだ時、あまりに貧しくて、葬式をするにさえできなかつたそうです。のちになつて、こんな大音楽家の墓もないのは、オーストリアの恥だと、國家で墓をつくらうとしましたが、どこに葬つてあるのか、それさえわからずになりました。しかし、地の上に墓がなくても、かれののこした多くの音楽は、永久に人々の間にうたわれるのです。これが藝術家にとつての、何よりの記念であり、また人間の、文明のほこりであります。

8 音の天才たち

それからもうひとり、ドイツにベートーヴェン（一七七〇—一八二七）があります。かれはドイツのボンというところに生まれました。この人も、祖父と父とがボンの宮廷の音楽家でありました。ところが父は、音楽がたいへんうまい一方、亂暴者で、お酒がすきで、家庭はいつも貧乏でこまつていました。父は早くからかれにヴァイオリンと笛とを教えました。かれは少年の頃、モーツァルト



第 21 圖 ベートーヴェン

のことを知つて、じぶんもかれのように、王や妃の前で歌いたい、それには、うまくならなくてはいけないと、非常な勉強をしました。もう十三歳で、笛の合奏の中心になり、あくる年、宮廷音楽家になりました。二十二歳から、オーストリアのウィーンへ行つて、ここでピアノにたいへんな才能をあらわしました。まもなく、世界一のピアニストとして、だれもがみとめるようになりました。けれども、不幸にして、かれは三十歳で、耳の病氣にかかつて、音がきこえなくなつてしまいました。音楽家で耳がきこえない！ 何という悲しいことでしょうか。かれはもう死のうと決心をしました。しかしかれは、音がきけなくても音楽はやれる。そうだ、さかんに楽譜をかけばよい。それを世界じゆうの人がうたつてくれるのだ。そこでかれは勇氣をもちなおして、それから毎日じぶんの考えた歌や譜をかいて、つぎつぎと、傑作を發表しました。ことに、かれは耳を病む二年前からはじめた交響樂をかきつづけました。十二年間にその第八番まで書きました。それから二十年のうちに交響樂第九番まで書きまし

た。その間にたくさん歌劇なども書きました。かれは、春のはじめに、はげしい雷が鳴り、大雨が降る中で、拳をにぎつてふりあげ、大きな聲をだすと同時に死にました。葬式は國王と同じように行われました。かれは一生、獨身で暮らし、まったく音楽にその生命をささげました。

それからもう一人、ドイツの大音楽家に、ワーグナー（ワグネル）（一八一三—一八八三）があります。

かれはベートーヴェンの死ぬる數年前に生れたので、ずつとのちの人です。この人は、うたう音楽の人でなく、書く人でした。それも歌劇がおもでした。かれのかいた多くの歌劇は、世界の歌劇のうち、最もすぐれたものばかりで、今でも文明の寶だといわれます。ドイツのライプツィヒの生れで、早く父がなくなり、孤兒でした。少年の頃、ベートーヴェンの交響樂をきいてたいへん感心をし、じぶんも音楽家になろうと考えました。しかしかれは學問も好きであつたので、音樂をやるにも、もとになる學問をうんと勉強しなくてはいけないと、ライプツィヒ大學に入り、言語學と美學とを研究しました。それからのちは、歌劇をつくることにしようけんめいで、外のことばは、ほとんどふり向きもしませんでした。そしてかれの歌劇には、その頃の大哲學者であつたショーペンハーパーと、ニーチェとの影響がありますので、あたりまえの歌劇とはちがひ、深い人生觀が、その底にあるのです。そしてかれは、あらゆる藝術は、一つのもことから出たもの

で、それぞれ別々にあらわれているけれども、すべては一つのものにまとまるべきである。それは歌劇の形に綜合されなくてはならない、と考へて、そのとおりを實行して書いたものが、かれの歌劇なのです。

近代の音樂は、こうして第十九世紀のはじめ頃から、おもにドイツで發達し、ますますさかんになりました。そののち、ドイツにはシューベルト、メンデルスゾーン、ブラームス、シューマンなど、有名な音楽家がたくさんありました。フランスにもベルリオーズ、ドビッシ、グノー、また歌劇ですぐれたビゼーなどがあるし、イタリヤにもプッチニがありました。ことに、近代のロシアにはチャイコフスキー、スクリヤピン、ストラヴィンスキーなどが有名であります。アメリカには今、ヴァイオリンの大家ジンバリストなどがいます。

こうして、音の中に、美しい、新しい文明をつくつて、人間の生活をたのしく、ほがらかにしてくれる人たちは、何という、よいことをする人たちでしょうか。

9 第三帝國

第十九世紀になるあととさきとで、フランスを中心にしてヨーロッパに大あらしが吹きあれま

した。フランス大革命とナポレオンの戦争とです。それはすでに話しました。大革命はもともとフランス国内のことであつたが、まわりの各國の主たちは、これが氣になつてしようがなく、革命をたたきつぶしてしまおうとして、フランスに戦争をしかけたのが、ナポレオン戦争になり、ぐるりの國々も、ひどい目にあつたり、めちやめちやにこわされたり、いろいろなめいわくをうけました。そこでナポレオンがセント・ヘレナ島に流されると、すぐオーストリアのヴィーン(ウィンナ)に西洋諸國の代表者が集まつて相談をしました。これをヴィーン列國會議といひます。ロシア皇帝アレクサンドル(アレキサンダー)一世、プロシヤ王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世(フレデリック・ウィリヤム)もきました。中でもオーストリアの宰相メッテルニヒが一ばん勢力があり、イギリス、プロシヤ、ロシアの代表も勢力がありました。そして、ヨーロッパ諸國の領土のやりなおしをするのが、おもな相談でした。フランスは大たいもとどおり、プロシヤはドイツの大部分をとる、オーストリアも北の方をすてて、南のイタリアを少しとつただけ。ドイツは神聖ローマ帝國はもうやめにして、新しく三十五の公侯國と四つの自由市とで、ドイツ聯邦をつくりました。ロシアはその西へ、ポーランド王國をつくつて、ロシア帝がその王をかねました。イギリスはいろんな小島をとつたり、植民地をえたりしました。またオランダは、今のベルギ

ーをあわせてネーデルランド王國となり、スエーデンはノルウェーをあわせ、イタリアは、五つばかりの小さい國にわかれしました。スウイスはこの時から、永久中立國となり、今にそうなのです。フランスはまけた國だけれど、タレイランという外交のうまい人が相談にいつて、成功しました。

これでひととおり、かたづきました。しかし各國は、フランス大革命にすつかりおびやかされたので、まず各國が神聖同盟というものをつくり、互いに革命がおこらないように用心をし、キリスト教を信じて、できるだけこのままできごとと相談をしました。これはロシアのアレキサンダー一世帝がいだしたことです。しかしもうヨーロッパじゆうに革命運動と自由思想とがひろがつていきますから、人民たちはなかなかそんなことをききません。ことにドイツは、やはり國が統一されないで、各小邦で専制政治が行われまして、學者や、學生はいつもさわいでいました。そのうちに、これまで東の方で、トルコ人に苦しめられていたギリシヤが獨立しました。ロシア、イギリス、フランスは、これに味方をして、トルコと戦い、これに勝ちましたが、これからごたごたして、ついに一八三〇年に、神聖同盟はだめになりました。つまり、各國がじぶんじぶんのつごうのよい、じぶんの利益をはかろうと考えて、同盟という、美しい名をかりただけだから、だ

めになるのはあたりまえのことです。そのためせつかくフランスの人民が、新しいよい時代をつくろうとした努力もおさえられてしまいました。

だから神聖同盟がだめになるとまもなく、再びフランスに革命がおこりました。それはフランスでナポレオンの去つたのち、ルイ十八世が王にかえつたけれども、専制政治になつて、かつてなことをしたので、人民はみな反対しました。王が死んで、弟のシャルル(チャールズ)十世が王となりましたが、やはり人民のことを考えないので、ついに一八三〇年七月、パリ市民が革命をおこし王はイギリスにのがれ、市民はオルレアン公ルイ・フィリップ(一八〇八—一八七三)という人を王としました。するとこれに刺戟されて、オランダ(ネーデルランド王国)からベルギーが独立するやら、ポーランドに反亂がおこるやら、ドイツに自由民権運動があり、イタリアに革命運動があるというさわぎになりました。ポーランドはロシアの屬國のようにされていたので獨立しようとしたのですが、ロシアはこれを機會に、ポーランドをつぶして屬國にしてしまいました。

フランスでは、ルイ・フィリップ王がまた人民とおもしろいかなくなりました。そこで一八四八年二月にはまた革命がおこりました。王はイギリスにのがれ、革命黨が共和政府をつくりました。これを二月革命といいます。この時、共産黨コミンテルンは共産主義の國にしようとしていましたが、機會

が十分でなくて失敗しました。そしてナポレオンの甥になるルイ・ナポレオンが、人民から選舉されて大統領になりました。すると、この二月革命もまた、オーストリア、プロシヤ、イタリアなどにひびきまして、人民の権利と、國の統一とを主張するさわぎがそこにもここにもありました。ウィーン會議このかた、反動政治家のさきに立つて、進歩主義者をおさえていた、オーストリアの宰相メッテルニヒは、追つばらわれてイギリスに逃げ、ハンガリヤはオーストリアから獨立しました。しかし、ロシアの兵が進んで、やぶりましたので、獨立は失敗しました。ベルリンでも革命運動がさかんで、ついにフリードリヒ・ウィルヘルム四世は、はじめて憲法を發布し、またドイツを統一することを約束しました。

こうして、各地がごたごたしている間に、フランスでは大統領にルイ・ナポレオンが、一八五一年に、クー・デ・ター(非常手段)をやりました。coup d'étatとは、不意に兵力で反對黨をおさえてしまうことです。かれはこれによつて憲法を改め、あくる年は選舉によつて皇帝となりました。ナポレオン三世といいました。これは、選舉といつても、かれがじぶんにつごうのよい者だけを集めて選舉をさせたので、フランス人民全體の考えではありませんでした。かれはたいへんな野心家であつたので、こうしてうまく皇帝になると、何とかして人氣をとろうと思いまし

た。それには外國と戦争をして勝つにかぎる、そしておじさん(ナポレオン)のように評判をよくしよう。そこで、トルコを助けるといふ口實で、イギリスと同盟して、聯合艦隊をつくり、ロシアを攻めました。トルコから黒海をわたりクリミア半島に上陸して、セバストポール軍港を



第 21 圖 ト ル ス ト イ

れしました。得意になつたかれはパリでこの平和會議を開き、じぶんが一ばんいばりました。ただこの戦争で、イタリヤが統一されました。イタリヤはヴィーン會議で幾つもの小國に分けられ、おまけに北部はオーストリアにとられました。その小國のうち、イタリヤ半島の南の海中の大

ありさまは、有名なロシアの文豪トルストイの小説にかいてあります。またナイティンゲールといふイギリスの夫人が赤十字社をはじめたのも、この戦争によつてであります。それほど、みじめな苦しみの戦争でありました。とにかくこれによつてナポレオン三世はたちまち世界じゆうからほめら

きな島、サルディニヤ島の王ヴィクトル・エマニュエルは、ぜひイタリヤを統一したいと思つていました。するとクリミア戦争となりました。イギリス、フランス連合軍が苦戦しているのを見て、よい機會だと、兵を出してこれをたすけて勝ちました。そこで、こんどはこれを口實に、ナポレオン三世と同盟して、オーストリアと戦争をし、勝ちました。しかしナポレオン三世は、途中で同盟をやめたので、サルディニヤ王はがっかりしました。ところが、ガリバルディといふ人が、イタリヤの南の大きい島、シチリヤ島からイタリヤ南部を統一し、サルディニヤと合わせました。それで、イタリヤは一八六一年に一つになり、サルディニヤ王がイタリヤ王となりました。しかし、ローマ法皇のいるところだけは、遠慮をして含めませんでした。

ところがこの間に、どこよりもすすん強くつたのはプロシヤでした。ヴィーン會議でドイツは聯邦の一つの國となりましたが、その實、聯邦の内の邦々は、みなじぶんの邦だけをさかんにしようとして、なかなか統一ができませんでした。進歩派の間には民主主義のドイツ帝國をつくり、プロシヤ王を皇帝にしようとの相談もしましたが、隣りのオーストリアがじやまをしたので、それもだめでした。しかしプロシヤだけは、邦の内をととのえ、軍備をさかんにしました。まずオーストリアが目の上のこぶですから、これと戦いました。一八六六年のことです。オース

トリヤはまけて、ドイツのことに干渉しない約束をしました。そこでプロシヤは、新しく北ドイツ聯邦をつくり、そのかしらとなり、のち南ドイツの諸邦も、プロシヤと同盟しました。

こうなると、ヨーロッパ大陸で、東のロシヤの外は、一ばん強い國はプロシヤとフランスとなりました。その時、野心家のフランス皇帝ナポレオン三世は、プロシヤとオーストリアの戦争につけこんで、ドイツの西部を奪いとうろと考えました。かれはそれを奪つてフランス人民の人氣をとろうと思つたのに、結果はあべこべになつて、すつかり人氣をおとしました。そこでこんどはフランスからプロシヤに戦争をしかけて、人氣をとるもどろとしました。一八七〇年のことです。いよいよ戦争になると、南と北とのドイツ諸邦の兵は、プロシヤ軍と一しよに、たちまちフランス軍を破つて、セダン城をかこみ、そこにいたナポレオン三世を降服させました。そして、勝ちほこつたドイツ軍は、ヴェルサイユ宮殿に進みました。そこで、プロシヤ王ヴィルヘルムは、ドイツ聯邦の諸公からおされて、ドイツ皇帝の冠をいただきました。ここに、長い間ドイツ人のぞんでいた帝國の統一ができました。これは一八七一年の一月のことです。フランスはさんざんにまけて大いに弱りましたが四年のち、また共和政治となりました。これを第三共和國といい、それから今までつすいています。野心家のナポレオン三世はどうなりましたか？ か

れはイギリスのいなかのティスルハーストというところにかくれて、三年ののち、そこでさびしく死にました。

けつきよく、第十九世紀の前半分は、せつかくフランス人民が大革命をやつて、人民の社會をつくろうとしたのに、そのぐるりにはまだ保守的な國王たちの勢力が強く、その人民もおくれていたので、よつてたかつてフランス人民の民主的革命運動をたたきこわしたのです。ナポレオンがあらわれてあばれたり、ナポレオン三世が皇帝になつたりしたのも、みなそのためでした。そこでナポレオン三世が失敗すると、フランスは再び共和國となり、ドイツは一歩進んで帝國にまとなり、ロシヤもやつと農奴の解放をする時代に進みました。しかし、世の中がもう一歩進んで、人民の社會ができるまでには、まだまだ遠いことです。

IV 現代の文明（下）

10 赤十字社

フランス大革命で、一ばんはつきりしたことの一つは、人間の社會的生活のもとには「自由、平等、博愛」の三つでなくてはならぬということでした。人間は、もともと外のだから束縛されないで、自由に生きたり、働いたりすることが出来る。そして、人間が集まつてつくつてゐる社會では、みな同等である。階級に上も下もない、富んだ人と貧しい人とで區別はない。學問があつたりなかつたり差別があるものではない。人種や國や家柄やで、まさるとか、劣るとかするものではない。そしてまた人間はお互いに愛しあい、助けあい、こまつた人のめんどうを見、またもたない者にはもつた者がわけてやり、仲よくけんかをしないで理解しあい、同情しあつて生きなくてはならない。こんなことが明かになりました。むろん、昔からキリスト教、佛教、孔子の教えなど、みなそういうことを教えてはいますが、フランス大革命で、それをはつきりさせた

のです。今も、パリのフランス國會の玄關には、ちやんとこれが大きく書いてあります。ここにこの心がけから赤十字社ができた話をしましょう。

一八五四年のことです。その頃、イギリスとフランスとは聯合して、ロシアに攻めて行きました。そのことは前に話しました。この戦争は、ロシアのすつと南部で行われました。トルコのイスタンブール、その頃コンスタンティノープルといつて、東ローマ帝國の首府であつてからの古い都です。そこから北へ、ちようど袋のような形になつて黒海という海があります。いわば大きな湖です。日本全部ほどな大きさです。そのの北海岸に、ロシアの陸地が少しばかりつき出てい



第 22 圖 ナイティンゲール

ます。これをクリミア半島といひます。イギリス、フランスの聯合艦隊は、このセヴァストポールという要塞を攻めました。イギリスから、こんな遠いところへ、軍艦がたくさん送りました。この戦争はたいへんはげしかつたので、イギリスの軍人はずいぶんたくさん戦死と負傷をしました。病人もた

くさんできました。その知らせがイギリスに達すると、家族をはじめ、みんなはたいへん悲しみました。しかしだれひとりとして、そんな戦場へ行つて、負傷者や病人たちの手當をしたり、看護をしたりしようと考える者はありませんでした。その頃までの戦争は、どこでも同じことで、負傷者を入れる病院もなければ、たおれていても助けてやる看護者もなかつたのです。だから戦場で負傷をして動けなくなるとか、病氣をして苦しむとかすれば、そこで死んでしまふ外はなかつたのです。

するとここに、フロレンス・ナイティングール（一八一〇—一八二〇）という女の人があつて、もとイタリヤのフロレンス（フィレンツェ）の生れですが、幼い時からイギリスにいました。ナイティンゲールとは、「夜の鶯」といわれて、夜になるとよい聲をして啼く、鶯のような形の鳥のことで、この人は、その名の如く、まことにやさしい人でした。少女の頃も、お人形が病氣だとか、あるいは足をくじいたとかすると、その看護をしてあそんでいました。かの女の犬が病氣をした時には、じぶんの弟のように大切にしておしてやつたそうです。二十四歳の時、はじめて病院を訪問して、しみじみと感じました。「病人はお氣の毒な人たちです。できるだけ親切にして、いたわつてあげなくてはならない。それには、わたしがまず、じぶんのことを忘れて、一生を看

護のためにささげなくてはならぬ」と決心をしました。それからパリでキリスト教のお寺の尼さんから、看護法をおそわり、のちロンドンのある病院の監督となつていました。すると、たくさんのイギリスの軍人が、ずつと遠いところで、苦しんだり、死のうとしているのに、だれ一人看護をしてあげる者がなるときくと、もうたまらなくなりました。すぐにお友だちを説きまわつて三十八人の仲間ができました。かの女は、この一隊をひきつれて、戦場近くに行きました。この人々がくるまでは、傷病者はまことにみじめなものでした。寒い雨の降るところに、やつと布の天幕をかけて、うんうんうめきながら、やがて死んでしまわねばならなかつたのです。そこへこの人々は、やつてくると、すぐできるだけの親切をつくして、看護をしました。それはイギリス兵ばかりでなく、フランス兵にも、また敵であるロシア兵にも、あたたかい看護の手をのべました。雪が降つても、風が吹いても、ナイティンゲールは、夜になると、手に燈火をささげて、負傷者や病人を、一人一人見まつてあるきました。その頃の燈火は、石油のランプでした。それで患者たちは、かの女のことを「ランプ夫人」とよびました。毎夜、この親切な人がやつてくるのを、かれらは天のつかいのようによろこんで待ちました。そのおかげで、多くの患者はすつかりよくなり、もとの元氣な、若々しい青年になりました。かれらのよろこびはたいへんでありまし

た。

戦争がおわり、ナイティンゲールは、イギリスにかえると、イギリスでは、この親切な慈愛の女神のような女の女をよろこびむかえました。國會では、これを感謝して多くの金をおくることになりました。けれどもかの女はそれをことわつて、どうしても受取りません。ついに、この金で看護婦養成所をつくりました。今日では看護婦が、醫師と同じように、病人を救う最も大切なしごとをしています。看護婦がかの女によつて、はじめてりつばなものになつたのですから、今も看護婦たちは、ナイティンゲールを、キリストの母マリヤにつぐ、りつばな女の人として、そのきよい、高い、親切な心がけを守つています。

それからの女は、イギリス政府と相談をして、赤十字社のもとをつくりました。赤十字社は永久中立國であるスイスに、アンリ・デュナンという醫師が、ナイティンゲールの意見により一八九五年はじめたしごとです。赤十字社は今、世界じゆうにあります。戦争があれば多くの看護婦を送つて、敵も味方もなく、すべての負傷者の看護をさせます。また、ふだんはだれでもかまわす病人のために親切に治療や看護をしたり、そのほか世界じゆうの條約によつて國の區別なく、病氣の豫防、衛生上のことなどを相談したり、しごとをしたりしています。戦争の時の捕り

よのとりかわしなども、ここでおせわをすることが多く、國際的な、たいへん意味のある事業をしています。

もう一つ、イギリスから救世軍というものがおこつて、世界じゆうに、はたらきかけました。これは、キリスト教の一派で、その教をひろめるとともに社會を救うしごとをしています。ウィリヤム・ブース(一八二九—一九一三)がはじめたのです。かれはノッティンハムというところに生れ、はじめはメソヂイストという教會の傳道者でありました。かれは十五歳の時から、ますしい人々の間に行つては、キリストの教を説いて、正しいよい人間になるようにすすめました。これまでのキリスト教は、ただ日曜日になると教會に集まつて祈りをしたり、説教をきいたりするだけで、今の世の中の、一ばん大きいしごとである貧しい者や、あわれな者を救うようなことは、あまりやらなかつたが、かれはそれではいけないと思つたのです。そこでさらにロンドンに出でて、東部の、ますしい人ばかり住んでるところへ行つて、毎日そんな人のめんどろを見ました。一八六五年からのことです。そして一八七七年に、このしごとのための救世軍をつくりました。すつかり、組織や、名まえや、きものなどを、軍隊のようにしたため、はじめはいろいろ誤解されて、わらわれたり、じやまをされたりしました。しかしかれはどこまでもこれをよいことと信じて、

その奥さんのカザリンという人と力をあわせ、あらゆる困難と戦つてやりました。だんだん、そのまじめな、ためになるしごとであることがわかつて、ついにイギリス皇帝が、ブースにあげられたり金をくれたりしました。それから、世界じゆうの人が、けつこうだと、みとめるようになり、ました。このブースが救世軍大將となり、總司令官で、世界じゆうに本營をおきました。中將、少將などがその司令官となりました。日本にも、山室軍平といふ救世軍中將の司令官がありました。先年なくなりまして。ブース大將は日本へも來ました。その時、明治天皇がおあいになりました。

ここに話した赤十字社や救世軍のような、世の中のすべての人のためになる、そして國にこだわらない仕事は、社會事業であります。これまでは、西洋でも、キリスト教の宣教師などの外は、あまり他人のことも考えなければ、困つてゐる人のめんどうもみませんでした。ただ、じぶんの家とか、國とかのことがばかり考えていたのです。それがだんだんこうした國際的な、社會事業などが、第十九世紀の中頃からさかんになりました。しかし、これらのことは、社會をよくするため、うわべだけのしごとです。もつともとの、ほんとうのことは、社會のくみたてそのものから、すつかりなおさなくては、人間全體の幸福のための、よい社會はできません。

11 リンカーン

フランス大革命からのヨーロッパ大陸でのごたごたはすでに語りましたが、ヨーロッパのこうした封建制度からぬけだすためのなやみとは別に、新しく發見され、新しく西洋人がやつてきて、新しく築いてゆくアメリカでは、何もかも、新しく、いきいきと、春の草木の芽がもえ出でるように、さかえました。それはヨーロッパの腐つたような空氣の中にいたたまれなかつた若々しい人々が、この新大陸を開きつつあつたのだからです。まず、ナポレオンがヨーロッパであれば、れまわつてゐる頃から、合衆國につすいて、北アメリカのメキシコ、北アメリカのコロンビア、チリ、ペリユーなどが獨立しました。コロンブスが發見してからのち、この地方はそれまでみなイスパニヤの植民地でしたが、ナポレオンがイスパニヤの本國をとつた時、一しよに相談をして本國を離れました。そしてみな合衆國と同じように、國王のない共和國となりました。間もなくポルトガルの植民地のブラジルも獨立しました。あの反動主義者の、オーストリア宰相メッテルニヒは、これこそ革命運動だから、やめさせねばならないとさわぎました。すると、その時の合衆國の大統領モンローという人は、たいへんおこりました。「アメリカは、ヨーロッパではない。

アメリカにわれわれが新しく開いた國のことに、ヨーロッパから干渉することはまちがつてい
る。これから後もヨーロッパの國が、アメリカによけいなことをいつてもらいたくない！」と
宣言をして、アメリカ各國の獨立をさつそくみとめました。これが有名な「モンロー主義」で
す。一八二三年のことでした。これからのち、ずつと今まで、合衆國はこの方針をつずけていま
す。そして合衆國は、その國內の州の數はだんだんふえて、はじめは十三州で大陸の東の半分、
大西洋の方だけであつたのが、西の半分、太平洋の方もすつかり領土となり、北アメリカの中央
の、一ばんよい土地はみな合衆國になり、一年一年、富んで強くなりました。

ところがクリミア戦争が終つて五、六年すると、こんどは、この合衆國で戦争がはじまりまし
た。しかもそれは、合衆國が二つに分れて戦つたので、もうちよつとで、二つの別々な國になり
かけたのです。この戦争は「奴隸戦争」といいます。奴隸に關係したことからおこつたのです。

これまで奴隸のことは、しばしば話しましたね。奴隸もむろん、われわれと同じ自由と權利と
をもつて生れた人間です。それが、いろんな事情のため、普通の人間と同じ取扱をうけなかつた
ものです。昔のエジプト、ギリシヤにも奴隸がありました。その多くは、おもに戦争にまけた民
族とか、ちよつとした法律にそむいた人とかを、みな奴隸としました。ローマ帝國の時代には奴

隸がたいへん多くて、帝國の人間の半分以上は奴隸であつたといわれます。これも、大部分は戰
争にまけた民族が、殺されるかわりに奴隸とされたので、その子でも孫でも、ずつとのちまで奴
隸にされました。また普通の人の子供でも、そとで遊んでいるのを、そつとつれてにげて、それ
を遠くの知らぬ人に奴隸に賣るといふこともしばしば行われました。そしてこの奴隸は、外の品
物と同じように、賣つたり買つたりもされました。奴隸の生活はまことにみじめなもので、馬や
牛とほとんどちがわぬ取扱をうけました。それから中世になつて、農奴のあつたことは前に話
しましたね。

では、なぜ奴隸があつたのでしょうか？ これは世の中が開けなくて、同じ人間でも、ちがつ
た民族や、戦争にまけた者や、ちよつと法律にそむいた者などに對して、同情がなかつたことが
一つと、もう一つは、勞働力の搾取といふことであつたのです。つまり、一般の人々は、なるべ
くじぶんたちの生活にいるものや、ぜいたくにいるものを、じぶんたちだけでつくらないで、他
人のつくつたものを、奪うようにして、じぶんの勞働を少くし、ひとの勞働を多くさせ、じぶん
の生活をゆたかにし、ひとの生活をますますさくせよとしました。しかし、普通の人は、そん
なむしのよいことをさせられて、だまつている者はありません。だから、まけたり、法律にそむ

いた人たちを、むりにつれてきて、奴隷として労働をさせ、その奴隷にはできるだけじめな悪い生活をさせて、うんと働かせ、その働いて生産した農産物などの大部分を奪いとつて、じぶんたちの生活をゆたかにしたのです。

それで、第十九世紀になると、ヨーロッパの人々はめざめて、同じ人間を奴隷とすることはわるいことだ、まちがつていると気づきましたので、これまでの奴隷は解放されて、普通の人間とまつたく同じになり、奴隷はなくなりました。イギリスでは一八三三年に奴隷を廃止しました。ただロシアに農奴があるだけになりました。それも一八六一年にすつかり解放されてしまいました。

ところが、ただアメリカには、黒人の奴隷というものがありません。これは、コロンブスがアメリカを発見してから、ヨーロッパ人がつぎつぎとここにやつて来て、植民をしました。かれらの多くは農業をするので、そのため森林をひらいたり、石ころをのぞいたり、川をなおしたり、道路をつけたりして、土地を整理し、また耕し、刈りとらねばなりません。そのためたくさんの方が必要でした。ヨーロッパから来た人々だけの力では、まにあいません。そこで、その頃アフリカには、顔色のまつ黒い、唇の大きくて厚い人種がたくさんいました。かれらの文



第 23 圖 リンカーン

化はきわめて低く、石器時代の人間とあまりかわらない程度でした。そこで、この人種の人々をうまくだまして、アメリカにつれて来て、かれらに馬や牛と同じようなしごとをさせました。これがアメリカの黒人奴隷です、しかし、アメリカにも、黒人奴隷の境遇をかわいそうに思う人がたくさんあつて、こんなひどい人間虐待は、やめてしまえといいました。ピーチャー・ストー夫人という人は、「アングル・トムの室」という小説をかいて、大いに奴隷廃止論をさかんにあおりました。そして合衆國の北部の諸州では、農業よりもほかの製造業などがさかんにあつて、商業、工業をする人が多かつたのです。かれらにとつては、もう奴隷はいらないばかりでなく、

むしろじやまになりました。けれども南部の諸州は、まだまだ原野があつて、奴隷に農業をさせる者が多かつたし、奴隷がなくてはこまつたのです。それで、奴隷廃止の意見は、南と北とでまつたくちがいました。とうとうこれがもとで、一八六一年から一八六五年まで、合衆國の人々はみんな二つに分れて、大戦争をやりました。

その時の大統領は、有名なアブラハム・リンコルン（エブラハム・リンカーン）（一八〇九—一八六五）でした。かれはケンタッキー州のきわめてまずしい農家の子でした。小學校にもいけないで六、七歳から木をひいたりして労働しました。學問が何よりも好きで、ひるまは働いて、夜になると、細い木のもえるのを手に持つて、そのあかりで本をよみました。青年になつて、ある店の番頭をしている時、買物に來た貧しい女に、おつりを一錢少くわたしたことにあとで気がついて、すぐに幾里もある道を、その女の家までかえしに行つたそうです。それで、かれのことをだれでも「正直者」とよんでいました。こうしてかれは苦學をして、とうとう辯護士になりました。正しい辯護をしますので、たいへん評判がよくなり、まもなく代議士にえらばれました。そして國會では熱心に、奴隸廢止論をとなえました。ついに、みんなから選ばれて、大統領になりました。すると奴隸問題のため、南部諸州は分離して、アメリカ聯邦をつくり、別に大統領を選びました。リンカーンはすぐに奴隸廢止の命令を出しました。とうとう、南と北との戦争になりました。これに北のグラント將軍の軍が勝ちました。

戦争がおわると、大統領リンカーンは、合衆國には一人も奴隸のいないことにしてしまいました

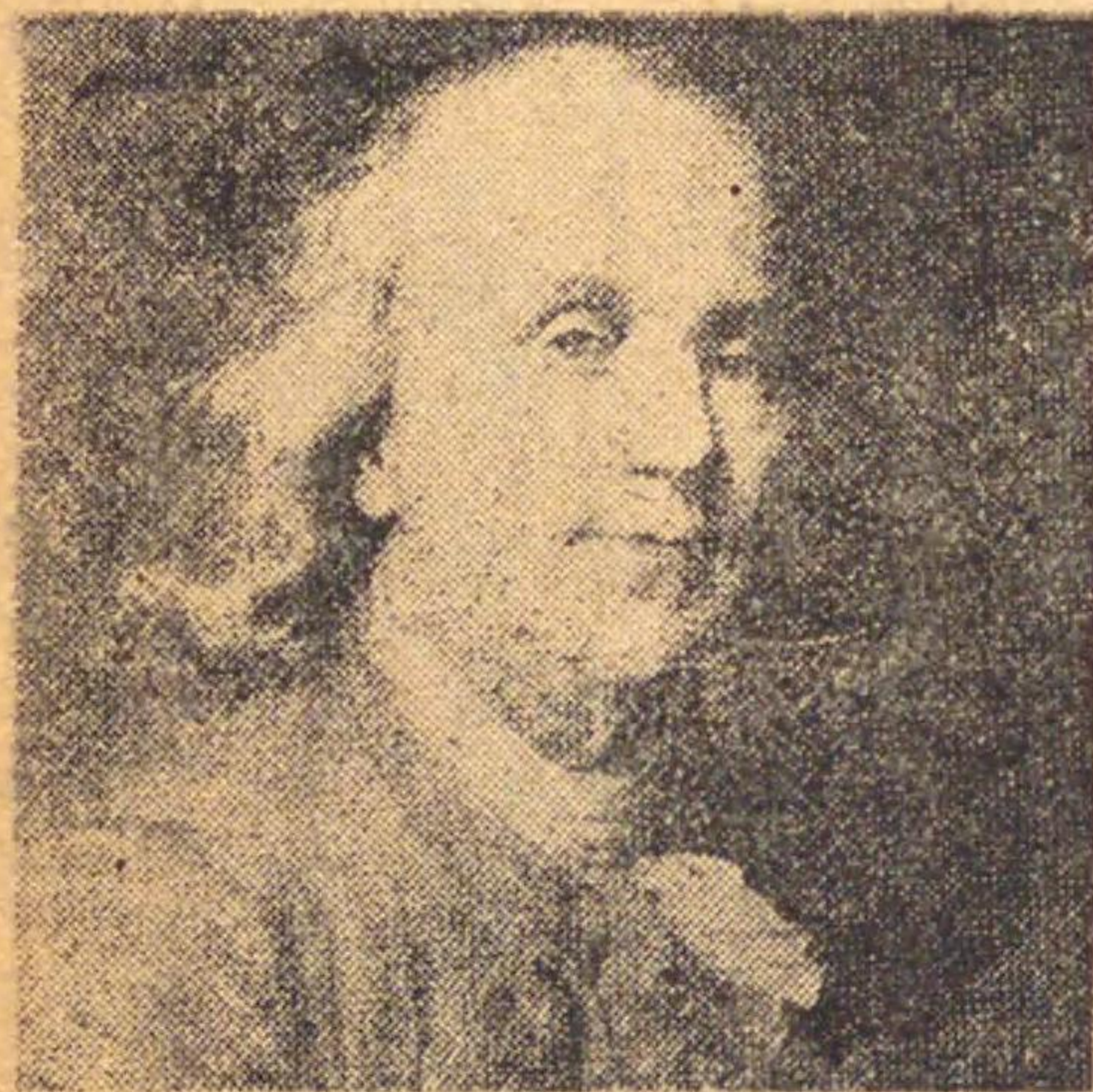
た。もしリンカーンのような人がいないで、今もアメリカに奴隸があつたなら、それはアメリカの恥であつたのに、かれの力で廢止されたことは、何よりでありました。けれども、當時のアメリカには、まだわからぬ者もいましたので、リンカーンが芝居を見に行つた時、ひとりの俳優のために殺されました。それは、奴隸の味方をしたのがわるいことだと、思いちがいをしたからであります。

12 不思議な時代

不思議な時代などというと、またもう一ぺん、ピラミッドがあつたり、獸と人間が咬みあつたりした時代の話のようですが、そうではありません。しかし、歴史の上で、これまでのどんな時代も、この現代ほど不思議な時代はないのであります。たとえば、一本の針金でもつて、百里も二百里も、いや千里も遠くの人と話ができることは、不思議ではありませんか。それはだれでも知つている、電信、電話です。それどころではありません。針金などなくても、空の電氣の力で、遠方と話ができ、音楽がきかれ、今ではそれによつてずつと離れたところのスポーツを見たり、芝居を見たりできるのであります。それは無線電信、ラヂオ、テレヴィジョンです。また、昔は、や

つと畫にかいて物の形をあらわしたのですが、今ではどんなものでも、そつくりそのままに形があらわれます。それは寫眞です。しかも一枚のスクリーンの上に、ほんものと同じつともちがわな
いすがたが、ほんものどおりに動いて見えるのです。それは映畫であります。映畫のことを數年
前まで活動寫眞といいました。こんな不思議な魔術を見せたなら、昔の人はどんなにびつくりす
ることでしょう。それどころではない。まだあります。器械が物をいいます。歌をうたいま
す。だれかが、その器械に向つてお話をするとか、うたうかすると、その聲はいつまでもこつ
て、聞きたい時にはいつでもきかれます。これは蓄音機です。何という不思議でしょう。まだま
だあります。あの、空をとぶ大きな怪物。とんぼのような形で、ぶんぶんうなりながら、大鳥の
ように空をかける飛行機です。われわれはこれを見なれてしまいました。今では鳥でさえもこれ
を見て驚かなくなりましたが、百年も前の人が、いきなりこれを見たなら、まつたく肝をつぶす
ことでしょう。

不思議をいえば、とてもそのくらいなことではつきません。電が、針金にひかれてどこへでも
持つていかれると、その針金のさきから光もれば熱にもなります。また常に強い力になつて、
電車や、電氣機關車も動かす。工場ではもつといろいろな、驚くべき働きをします。電話や電信



第24圖 フランクリン

やラヂオやテレヴィジョンや電波探知機や、電氣のはたらきは、限りがありません。それから
また蒸氣のはたらきがあります。お釜の中で煮えたぎるお湯の湯氣なのです。それがたいへんな
力になつて、大きな山のような汽船や軍艦を海の上で走らせもすれば、二本ならべた鐵の道をす
べつて、どこまでも行ける汽車も走らせます。また自動車があります。水の底をくぐる船もあり
ます。梯子がなくても何十階の家の上までのぼるエレベーターがあります。X光線、ラヂウ
ム。棉花から火薬をつくつたり、空氣をかためて石ころのようになりたり、また空氣のうちから酸
素とか窒素とかだけを集めて、肥料にしたり、薬にした
りします。粘土をやいたり、電氣をとおしたりすると、
アルミニウムなどの金屬ができます。またトンネルが
あります。どんな大きな山や海の底さえ、つきぬいて、
汽車をとおします。汽車や電車は、深い地の底でも、高
い山の上へでも鎖でひきあげられるのです。

もつと不思議なことがあります。人間のからだに、病
氣がつかないような注射をしたり、眼の玉をとりかえた

り、お腹にある病氣のもとをきりとつたり、また外の人の肉をとつてきて、たりないところにつけたり、肺結核の人の脊の骨を折つて、病氣のもとのところをしめつけたり。今に學問と機械との力で、人間がつくれるようになるかもしれない。また、死ぬる人間も、死ななくなるかもしれない。

そうした不思議は、今から百年前の人には、そのたつた一つさえも考えつかなくつたことだと思ふと、まことにこんな不思議な時代は、人間の歴史にこれまでなかつたことです。が、こんな不思議は何のために、どうしてあらわれたのでしょうか？ それは一つも、スポーツや遊戯や、おもちゃとしてできたものではありません。みんな人間が、必要のために考えたことばかりです。いかにしたらば、少しの働きでたくさんのごとができるか。またおなじ人間を奴隷などにせずに、器械の力でしごとができるか。車を手でひつぱつたり、牛や馬にひかせたりしないで、大規模に、はやく、遠くへ運ぶにはどうしたらよいか。遠方へ、すぐ通信するにはどうしたらよいか。できるだけたくさん農産物や、工業品や、たとえば織物だのをつくるにはどうしたらよいか。また病氣をなおし、病氣にかからなくするとか、石炭や、鑛物をたくさんとるとか、水の力を利用するとか、つきつき、人間は、じぶんたちの生活をゆたかにし、楽しくし、またできるだ

け労働をはぶくために、あらゆることを考えるのです。そして空氣、蒸氣、電氣、水などを利用して、いろんな發明をするのです。またそのために學問を研究するのです。その學問がつまり、今の一ばん大切な、一ばん發達しつつある科學なのです。科學とは、すべて、自然なり人生なりについて、ほんとうのことを、實驗や分析やによつて研究し、はつきりとわからせるしごとなのです。そこで、人類學、動物學、植物學、鑛物學、生理學、天文學、地質學、そのもとになる數學、物理學、化學、電氣學、力學、それらを應用した醫學、藥學、農學、水産學、工學、建築學、それらの數限りない科學の方向があります。しかしそれらはおもに物質方面の科學ですが、



第 25 圖 ゲーテ

また精神方面の科學も、最近では各方面へ、すんずん發達しています。たとえば、心理學、宗教學、考古學、藝術學、それから政治學、法律學、經濟學、社會學、倫理學など。これまで哲學といわれた、科學でないように思われた學問も、最近では精神科學として、研究される場合が多くなりました。しかし、それならとて、ま

だ今のところ哲學がなくなつたわけではありません。いろいろな科學で研究されたことをもととして、人生とはどんなものか、宇宙とはどんなものかといった、まだ科學の力だけではわからない根本的なことや、人間の心の問題とか考へる問題などを、研究するのが哲學になつてゐるようです。とにかく、人間は、どうしたならば、じぶんたちの生活を、よりよく、より幸福にできるか？ このことを考へて、實行してゐる、そこに科學とその應用とがあり、われわれの文明と文明生活そのものがあるのです。

何だかむずかしい議論になりそうですからこのぐらいにして、さて、現代の科學の進歩と、それからおこつた産業革命、社會問題という、一ばん大切な、一ばんむずかしいことをざつと話しましよう。

13 ジェームズ・ワット

今から百數十年前の、フランス大革命、ナポレオン、それからヴィーン會議の頃までの、中世から近世のありさまは、これまで話しました。それまでは、坊さんと、政治家と軍人と外交官とが、一ばん活動もするし、いばつてもいました。しかしかれらは、お寺とか、國とか、支配階級

とかのことばかりやつて、人民全體のためとか、すべての人間の生活をゆたかに、幸福にすることとかは、考へようともしませんでした。だから人民の大部分の生活のさまや、そのやり方は、まことにみじめな、數百年、數千年と同じでありました。そのことは前にくわしく話しました。ところが、第十八世紀の中ごろから、イギリスあたりで、少しづつ生活上のいろんなことが研究され、改良されて、新しい時代の物質文明の光りがさしてきました。ギリシャ、ローマでは、精神文明が発達したけれど、それは哲學や文學や美術がおもでした。中世では専ら宗教でした。近代になつてルネッサンスの花がばつとさいたものの、それも文學、藝術、音樂など、精神文明の方面がおもで、毎日の生活の上に、ちつともかわつたところはありませんでした。近代のフランス文明も、國王と貴族との贅澤とおごりとにかくやくだつだけの、文學や藝術でした。だから、一般人民の幸福や生活の便利のためには何のやくにもたらず、農民などは、すべてローマ時代、ギリシャ時代と、あまりかわりはありませんでした。これは物質文明、ことに科學とその應用との進歩が、ちつともなかつたからです。

イギリスでは第十七世紀の中ごろ、クロンウェルの民主共和政治このかた、人民の實際生活と科學の研究とがずんずんさかんとなり、第十八世紀には國家で^{ロイヤル・ソサエティ}王立學士院を設けなどして、學者

を優遇し、科學を奨励しましたから、世界でもつともすぐれた科學とその應用との發達した國になりました。ことに、第十八世紀の中ごろ、蒸汽機關と、紡績機械と、織物機械とが發明され、つずいて汽船と汽車とがつかわれるようになってから、産業上、經濟上、政治上、そのほか一切の文明生活のあらゆる方面で、まったくちがった世界がひろがつてきました。これは、イギリスばかりではありません。やがて全世界がそうなつたのです。それが産業革命です。そしてまた、これにともなつて、社會生活や、社會組織、ことに働く人々の勞働問題などの上に、これまでとちがつた、まったく新しい要求と主張とがさかんにおこりました。これが社會主義運動です。だから、科學の進歩、その應用、發明、産業革命、また勞働運動、社會革命運動などは、きり放すことのできない、ひとつなぎの現代のできごとです。

第十八世紀の末のことです。イギリスの北部のスコットランドのグリーンノックというところにジェームズ・ワット（一七三六一—一八一九）という人がいました。幼い時は、病氣でからだが弱く、學校へも行かずに、うちにばかりいました。そして道具や器械をつくることにたいへん興味をもつて、じぶんでいろんなものをつくりました。十八歳から器械屋の弟子となりました。ある休日に、じぶんの室で、本を讀んでいました。すると、そこにある鐵瓶が、急に湯氣を吹きだしたかと思ふ

と、強い力でその蓋を吹きとばしてしまいました。ワットは、湯氣の力のひじょうに強いことにびつくりして、じつと見ていました。ふと、面白いことを考えつきました。「これだけに湯氣の力が強いものならば、湯氣をもつと多くしたなら、何でも吹きとばすだろう」と。そこで、ワットは大きな罐をつくつて、その中でたくさんの湯氣のできるようにし、それでもつて車のまわる仕掛をしました。これが、ワットの蒸汽機關の大發明のお話です。すべて、大發明などという、何か特別な學問や經驗がいるように考えられますが、そうでもありません。むしろ、ふだんの心がけ、基礎知識はなくてはいけません。ワットにそれがあつたのです。少年時代から科學、ことに器械の知識があつたのです。ワットはそれから、蒸汽機關の研究だけをやりました。これについてのいろいろな發明をして、第十九世紀のはじめには、その頃のイギリスの、應用科學者としても一ばん尊敬されました。しかし實際は、イギリスで、蒸氣の力がたいへん強いことを知つて、これで物を動かす力をだすことを考えた人は、ワットより前にありました。蒸汽機關の大切な部分である、汽罐、汽笛なども、すでに用いられていました。しかし、それはまだ水揚ポンプに利用されただけでしたが、ワットは一七六三年にグラスゴーに機械工としてやとわれてから、すんすん改良を加え、ことにフルトンと一しよにこれを大改良して、工場や船、車などにつ

かわれる強力なものにすることができたのです。とにかくこの蒸気機関による湯氣の力、つまり蒸氣力の應用は、これまでは人間の働く力のかわりに、せいぜい馬か牛をつかつた程度のところへ、いきなり、その數百倍、數千倍の力をふやしたわけです。エジプトでは、二十萬人が二十年かかつて、人間の血と汗とで、大ピラミッドを築いたのですが、今ではこのしごとを蒸氣力で、一日でもやりとげられるのです。むろんそれにつずいて、電力の應用される今日では、必要あらば一時間でも築きえられるかもしれません。

14 機械の時代

それよりも、その頃の人々の實際生活にとつて、またそののちのイギリス、および世界の産業の上にとつて、一ばん直接的な變化をあたえたものは、紡織機の大改良であります。これまでは、着物にしたりなど、つかいみちのたいへん多い、糸や、糸の織物をつくるのに、非常に手間と時間とがかかりました。大昔は、麻の表皮を削いで水や日光にさらし、それから細い纖維にして、さらに、それを手でつなぎました。棉はもと熱帯あたりの植物で、その花から糸をとることも、ヨーロッパでは二千數百年前から知られたらしいが、一般に用いられるようになったのは、第十

一世紀ごろからです。ことにイスパニヤ人が各地にひろげたらしいのです。しかしそれを産業として發達させたところはイギリスでした。第十八世紀の中頃までに、いくら糸に紡がれていましたが、まだ棒に巻いた棉の花から、手さきでひきだして、紡ぎ車に巻きとつていました。それを、一七六七年に、ハーグリーブスという人が「ジェニー」とよぶ紡ぎ機械がかんがえました。これで一どに八十本紡がれて、一つの機械が十人の人間の働きをするようになりました。するとその翌年、理髮師のアークライトが、ローラーをつかう動力機の、紡績機械を發明しましたが、しかしこれは、はじめは馬に動かさせ、つぎには水力を利用しました。すつとのちに、蒸氣力を用いました。さらに一七七九年に、クロンプトンが、この二つの機械を一しよにして「ミュール」とよぶ紡績機械を考えました。「ミュール」とは驃馬のことです。これは驃馬と牝馬との間にできたものなので、二つの機械のくみ合せでできたこの機械をミュールとよんだのです。

これに、ワットらの改良した蒸気機關を利用したのは一七八五年のことです。こうして、第十八世紀の末までに、一どに二百本の糸を、これまでの數十倍の速さでひきだす機械ができあがりました。今の紡績機械は、すつと改良を加えられて、もつと進歩したものです。ところが、こんな機械が發明されて、たくさん綿糸を安く得られるようになって、よろこぶ人が多かつた一

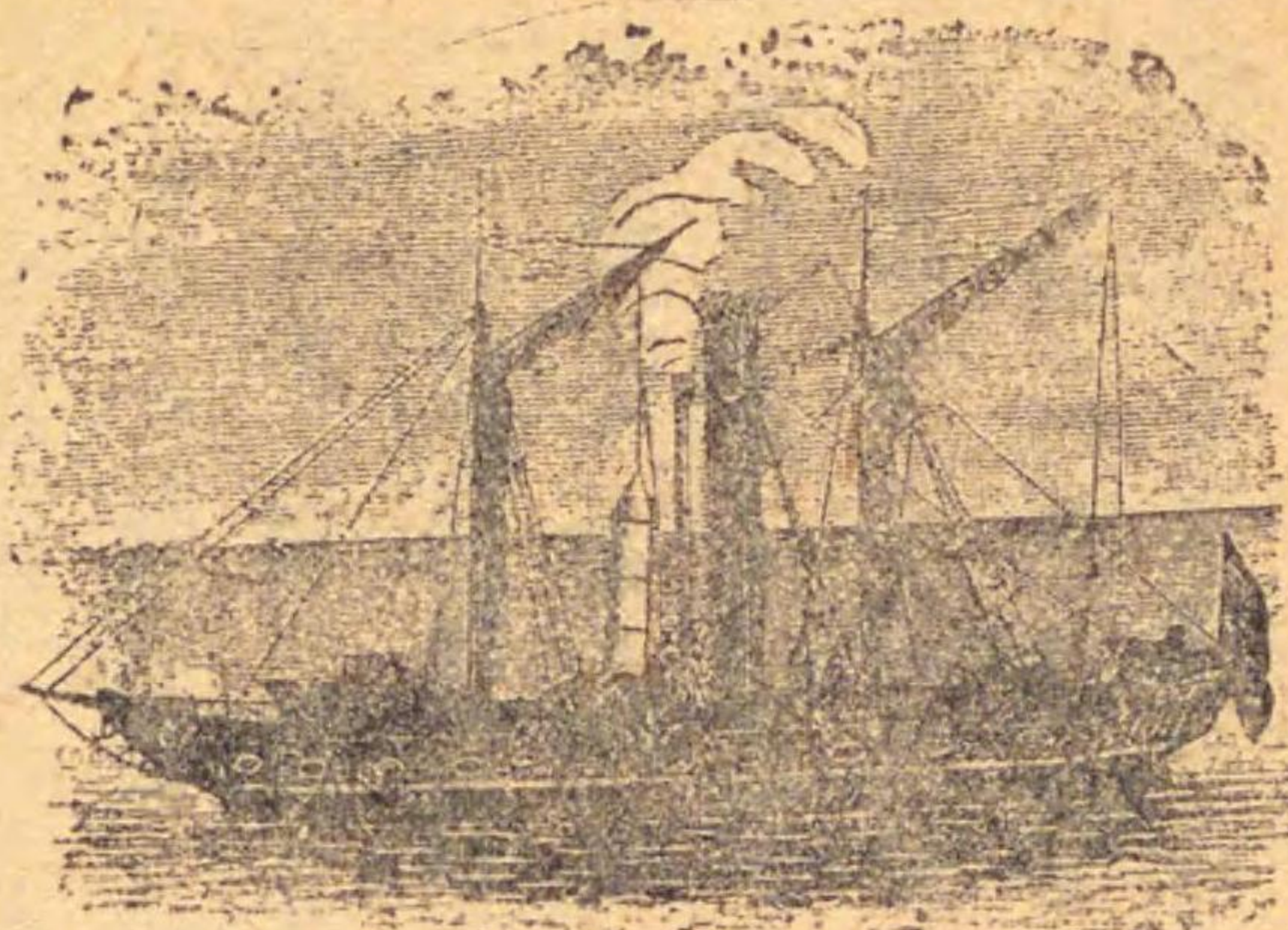
方では、そのため、手さきで少しずつ紡いでいた家内工業の人たちは、この機械のおかげでしてとを奪われたと怒りまして、この機械をぶつこわしたり、作業のじやまをしたりしました。それにもかかわらず、この機械に蒸氣力を用いてさかんに動かすようになる、こんどはいくつもの機械と、おおぜいの働く人をおいて、ずつと多くの生産をするようになり、大規模な工場があちにも、こちにもできました。

すると、たくさんの量の綿糸が、これまでより安くでつくられると、こんどはこれで綿布を織るしかけも進歩せねばならなくなりました。これまでは、一枚の布を織るのもたやすくならなかつたのが、一七八七年に、ケントといふところの坊さんのカートライト博士(一七四七—一八二三)は、たいへんな苦心をしてじぶんで動く(自動)力織機を發明しました。一七八七年のことです。これはアークライトの紡績機械が發明されて、綿糸のできが多すぎる(生産過剰)にこまつていたのをきいてのことでした。カートライトがこの機械に蒸氣機關を應用したのは、それから四年のちです。さらに綿織物を白くするのに日光に數箇月もさらしたのが、酸を用いて一日でするようになります。一人でせいぜい五ポンドか六ポンドを織つたのが、今では一千ポンドも織れるようになります。それでイギリスに外國から輸入された生棉花は、一七六四年四百萬ポンドであつたのが、

五十年ののち、一年五億ポンドになりました。イギリスのランカシャー、マンチエスターなどは綿糸、綿布の、世界の本場となり、外國に輸出した額は驚くべきで、イギリスは世界一の生産地となり、輸出品の第一となりました。イギリスの富は、これによつてますます大きくなつたのです。合衆國で奴隸戦争のおこつたのも、南部地方が棉花のおもな生産地で、棉花がアメリカの最も大切な産物となりつたからです。

つぎにこの蒸氣機關を利用した、最も重要なものは汽車と汽船とです。船や車に蒸氣機關をつけて、動かそうと考へたのは、一六一五年、フランスのサロモン・ド・ゴという人だそうです。そうすると、ワットの發明よりも百五、六十年も前のことですが、これはどんなものであつたかわかりません。それから百年ののち、第十八世紀のはじめに、フランスのデニス・パパンと水揚ポンプの發明者イギリス人のニューコメンとが、蒸氣で動く小舟をつくりましたが、それは泳いでいる犬のようなものだといはれました。やくにたたなかつたのでしよう。それからいろいろな人が考へましたが、ほんとうにやくにたてたのは、アメリカのロバート・フルトンという青年が一八〇四年頃、パリのセイヌ河に小船に蒸氣機關をつけたものを浮べた時からです。この時も、おそくてのろくて、あんまりばかげていて、子供のおもちやのようなので、みんなが笑つて、こ

の船を「フルトンのばか」とよびました。ばかでも何でも、とにかく蒸氣力で船はすすん動きだしました。フルトンは笑つた人たちをみんな笑つてやりました。これが、クライモントという



第 26 圖 1833 年頃の汽船

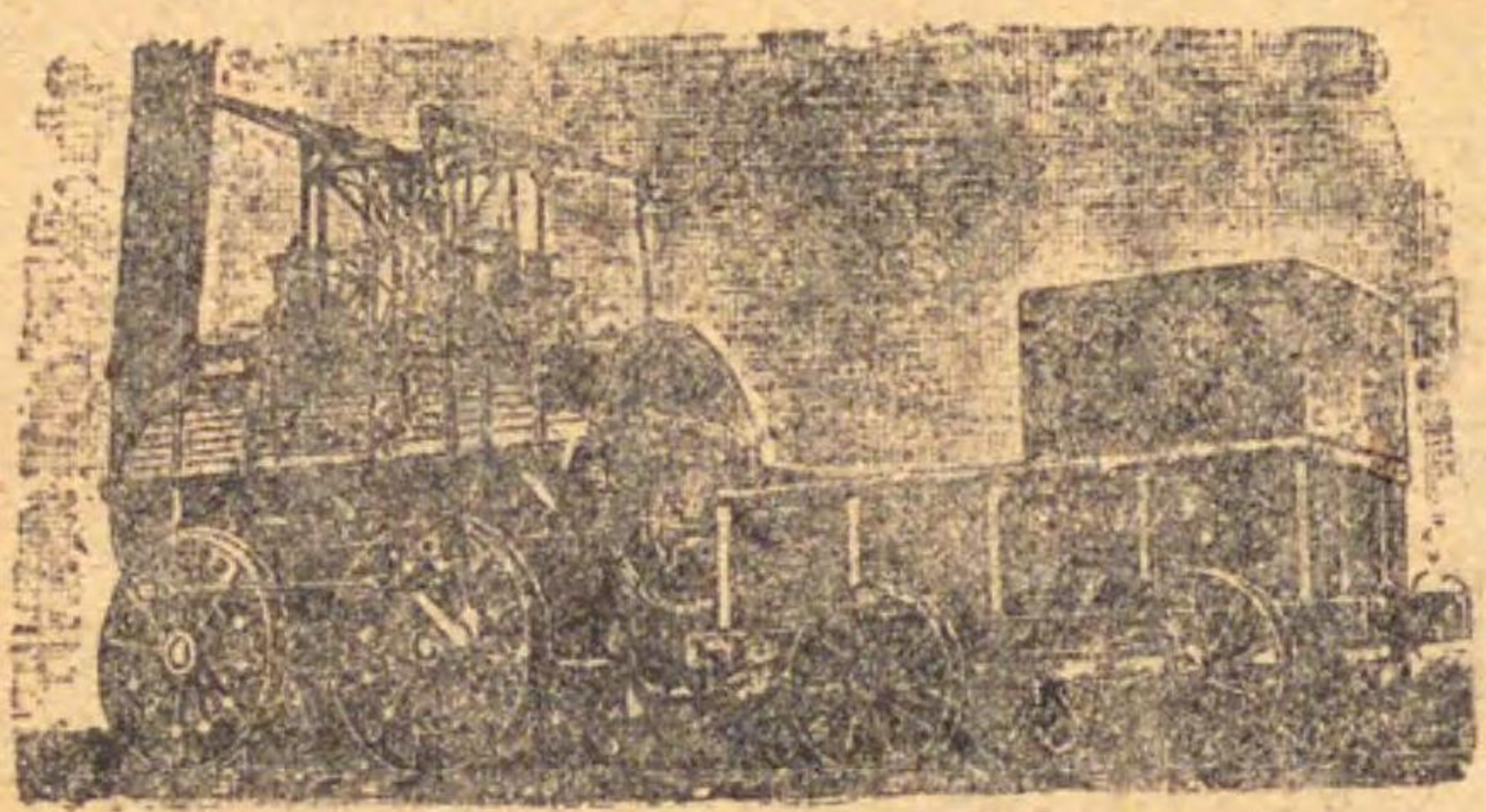
世界最初の汽船です。かれはまもなく合衆國にかえり、スクリー（螺旋推進機）を研究して汽船にとりつけて、ついに大西洋を横断する大汽船のもとをつくりました。しかしまだ帆と兩方を用いました。帆がまつたくいらなくなつたのは、一八八一年のことで、今から六、七十年前です。汽車も、最初はフランスのクノーという人が、自動車のような小形の車にとりつけたようですが、まだやくにたちませんでした。同じような車に汽罐をとりつけ、客をのせてロンドン市中をはじめて走つたのは、一八〇二年です。鐵道の上を走らせたのは、その二年のちだそうです。しかし今のようになつた機關車は、おもにジョージ・ステイヴンソンが考えました。初めて動いたのは一八一四年で、それから十一年のち、この機關車に人をのせた客車や、貨物の車をひかせて、實際に走らせてし

ごとをはじめました。このあとときにステイヴンソンは、機關車の研究を専門にしていろいろ發明しました。それが、今見るような、大形の、りつばな機關車のはじまりです。とにかく蒸氣力を應用して革命的な變化があらわれたのは、まず紡績機械、織物機械、つぎに汽船、汽車においてでした。

15 ラデイオまで

つぎには電氣の應用の話です。

合衆國の獨立した時、フランスに使したりなど、たいへん活動したフランクリンは、雷の鳴る時に、針金の通つた糸で紙をあげて、空中の電氣が針金に傳わることを知りましたが、第十九世紀になると、これを應用して電信を發明した人があります。これも合衆國の人で、モールズといいました。かれは、こつちから、あつちへ針金をひつばつておいて、あつちの端に鐵の片をおき、こつちの端に電氣のしかけをして、その電氣のボタンを押して、あつちの端へ電氣を通じると、その通じるたび毎に、あつちの鐵の片が、こ



第 27 圖 イギリス最初の汽車

つんこつんと音のするのを知りました。そしてこの音で、文字やことばの代りに合圖ができることを應用して、それから電信の機械を考えだしたのです。これは一八三七年のことです。のち、一八七六年には、グラハム・ベルという、學校の先生が、耳のきこえない子供に物音をきかせようと試みたことから、ついに電話を考えました。そこでこれまでのように合圖や符號でなく、人間のことばがそのままでも、どこでも針金によつてきかれるようになりました。それからまた三十年ばかりたちました。その時はもう第二世紀です。一九〇四年になつて、イタリヤのマルコーニという人は、針金なしに電信でも電話でも通じられる發明をしました。これが發達して、ラディオになりました。

つぎに電氣であかりがともされるようにしたのは、合衆國のトーマス・エディソン(一八四七—一九三一)であります。この人は、魔法つかいといつてよいくらいに、いろんなものを發明しました。かれはもと貧しい少年で、町に立つて新聞紙を賣つていました。かれはいろんな工夫をすることが何より好きで、少年時代から、ひとりでさまざまな新しいことを考へては試みました。青年の頃、すでに數十の發明をしました。そのうち最も有名なのは、蓄音器であります。それから活動寫眞、つまり映畫であります。また電燈があります。かれは、ふとしたことで、竹の焼けて炭に

なつたものを電線の上におきますと、この炭が非常に光つて、あたりがばつとあかるくなりました。それからだんだん研究をして、真空の球のうちに、炭素またはこれに似たものをおくと、たいへん強い、あかるい光をだすことを知り、これで電球を發明しました。

最後に、一ばん新しい、一ばんおもしろい發明の一つは、空飛ぶ機械です。つまり飛行機です。これを考へた人は、昔からずいぶんたくさんあります。有名な畫家のレオナルド・ダ・ヴィンチもこれを考へて、その圖をのこしています。とにかく、これで飛ぶことのできた最初の人は、やはり合衆國のライト兄弟でありました。かれらによつて、世界最初の陸上飛行が成功したのは一九〇三年のことです。それから四十數年間の、飛行機と飛行機との進歩は、まことに驚く外ありません。飛行機は今や時代の一切を支配しています。飛行機は、動力となる發動機がおもなしかけで、翼でとび、プロペラで進め、舵で方角や高さを定めるのです。だから發動機の研究が、飛行機を成功させたもとです。そしてこの發動機は、蒸氣や電氣による力とはちがつて、ガス體(ガスやガソリンなど)が強い力で爆發するのを應用したものです。この爆發力は、火藥、爆彈、その外、いろいろに應用されますが、ことに、推進力としてこれからますます研究されるでしょう。原子力の最近の應用も、この爆發力の應用なのです。

その外、現代の科學の研究として忘れてならないのは、イギリスのチャールズ・ダーウィンの進化論。それと似よつたイギリスのハックストリト、ドイツのヘッケルの研究。ドイツのマイヤーとヘルムホルツのエネルギー不滅説。それから同じドイツ人レントゲンのエックス光線。フランス人キューリーとその夫人のラジウム。また醫學ではフランス人パストゥール、ドイツ人ベテニコフ、コッホ、エールリッヒ、ロシア人メチニコフの細菌學。メンデルの遺傳法則。天文學ではフランスのラプラス、ドイツのハンゼン。最近の理論物理學ではドイツのアインシュタインなどです。

今、これらの、文明にてがらのあつた世界的な人間を、尊敬するために、ノーベル賞金というものができています。この賞金をもらつた人は、世界の人物といふことができるのです。これはスウェーデンのアルフレッド・ノーベル（一八三三—一八九六）という人が、數千萬圓という、非常にたくさんのじぶんの財産を、死ぬる前に遺言して、全部寄附したものをもととして、その利子を、人類の最大幸福に貢献することに關與した者」にわけあたえることに定められました。この利子は、五分分されました、一、物理學、二、化學、三、生理學、醫學の各方面で最も重要な發見、または發明をした者、四、文學の上で最もあきらかなてがらのあつた者、五、人間世界の平和をすす

める上にてがらのあつた者、こんな人々に分けられるのです。これは世界の代表的な人々の意見をきいて、十分考えた上、毎年十二月十日、スウェーデンの首府、ストックホルムの大音楽堂であたえられます。今、これをうける人は、世界で一ばん名譽ある人とされます。だから、これを與えられた人々と、そのしごとを知つたならば、第二世紀の、文明と、それにはたらく人々とのことは、最もよく知ることができます。

16 産業革命

さて、こうして今日は文明のきわめて進んだ世の中になりましたが、最後にもう一つ、まだ解決のつかない、非常に重大なことがおこつてきました。それは働かせる人と働く人との関係のことです。

皆さん、話が少しむずかしくなりました。大切な話ですから、よくきいてください。

昔のギリシャ、ローマ、中世、またイギリス、フランスで、國王、貴族と、人民との間、また金持と貧しい人との間に、争いがたえずくりかえされました。これは階級闘争といひます。はじめは、國王、貴族、金持などが、貧しい人、使われる人などをいじめることがもとで争います。

最後に、人民が貴族や金持をたおして、勝つたのです。このことは、どこの歴史も、くりかえしてあります。日本でもそうです。ところで、今、一ばんはげしい階級闘争が、やはり金持と貧しい人たちとの間に行われています。資本家（ブルジョア階級）と、働く者（プロレタリア階級）との争です、資本主義と社会主義との争です。

さつき産業革命の話をしました。第十八世紀の終り頃から、科学の進歩、蒸気、電気の應用などによつて、貧しい人々も、いなかの農民も、すつかり、生活のさまがかわりました。古ぼけた、陰氣な、うすぐらい家庭から、昔の紡車がなくなり、布を織る機がなくなりました。電燈がともり、ガス管、水道管、下水管が通じました。汽車、電車、自動車、汽船、モーター・ボートが走ります。飛行機がとびます。あかるいガラス窓、白いカーテン、スポーツ、映畫、蓄音機、ラデオ、新聞紙、雑誌、靴、コオモリ傘、ハンドバッグ、鞆、万年筆、愉快な學校。いろんな機械があります。ボタン一つ押せば何でも動きます。こんなりつばな文明世界になつたのは、百年このかたです。そして、これはみな産業革命のおかげです。すべての人間のための、すべての幸福が、すべての人間によつて、つくりだされつつあるのです。

産業革命は、まずイギリスから。イギリスの紡績、はた織機械から。つぎに蒸気、電氣から。

そしてまたイギリスの石炭と鐵とから。それは一八一五年、ウィーンで平和會議が行われた前後からです。それからのち、イギリスでは、たいへんな速度で、機械がふえました。それが蒸汽機關で動くようになりました。この世紀のはじめ、數百臺あつた紡績機械は、約五十年のち、十萬臺となりました。織機も數萬臺となりました。そこに働く人は、數百萬人になりました。おくらで發達したフランスでさえ、工場で働く人々が、百萬人になつたのです。そのため、イギリス各地に大工場がさかんにできました。大工場で大機械をたくさんそなえ、たくさん人間がそこで働きます。工場、機械、糸など原料買入れのため、非常にたくさん資本金がいらいます。貧しい人に、そんな金はありません。工場はみな、大金持がつくりまします。だからこの人たちが資本家となります。工場が大きくなり、しごとがさかんになると、一人の金持の金で足りないで、多くの金持が金を出しあつて資本にします。そこで一つの工場、一つの事業は、多くの資本家仲間、會社になります。株式會社になります。それでも資本が足りない、金を貸せる専門の、銀行から借ります。これを金融といひます。銀行家もみな金持です。だから、しごとが大きくなればなるほど、銀行からたくさん金融されます。これを金融資本といひます。そこで、大事業は、投資、經營する資本家と、金融資本家とが、じぶんたちの利益を得るためのしごとになります。

これが、紡績、織物などの大工業組織のもです。そして、原料になる棉花を、エジプト、インドなどから積んできて、さらにそれで織つた綿布を、エジプト、インドへ積み出して賣るため、多くの汽船がいます。大きな汽船の会社がいくつもできます。イギリス国内でも、多くの人が乗つたり、貨物を運んだりする汽車、電車を走らせるため、大きな会社がたくさんできます。これが産業革命です。こんな大工場、大事業の生産会社が資本家によつて、つぎつぎとできます。そして昔の小さい家内工業や手工業をおつばらつて、これにかかります。つぎにもう一つ大きな産業革命の話があります。

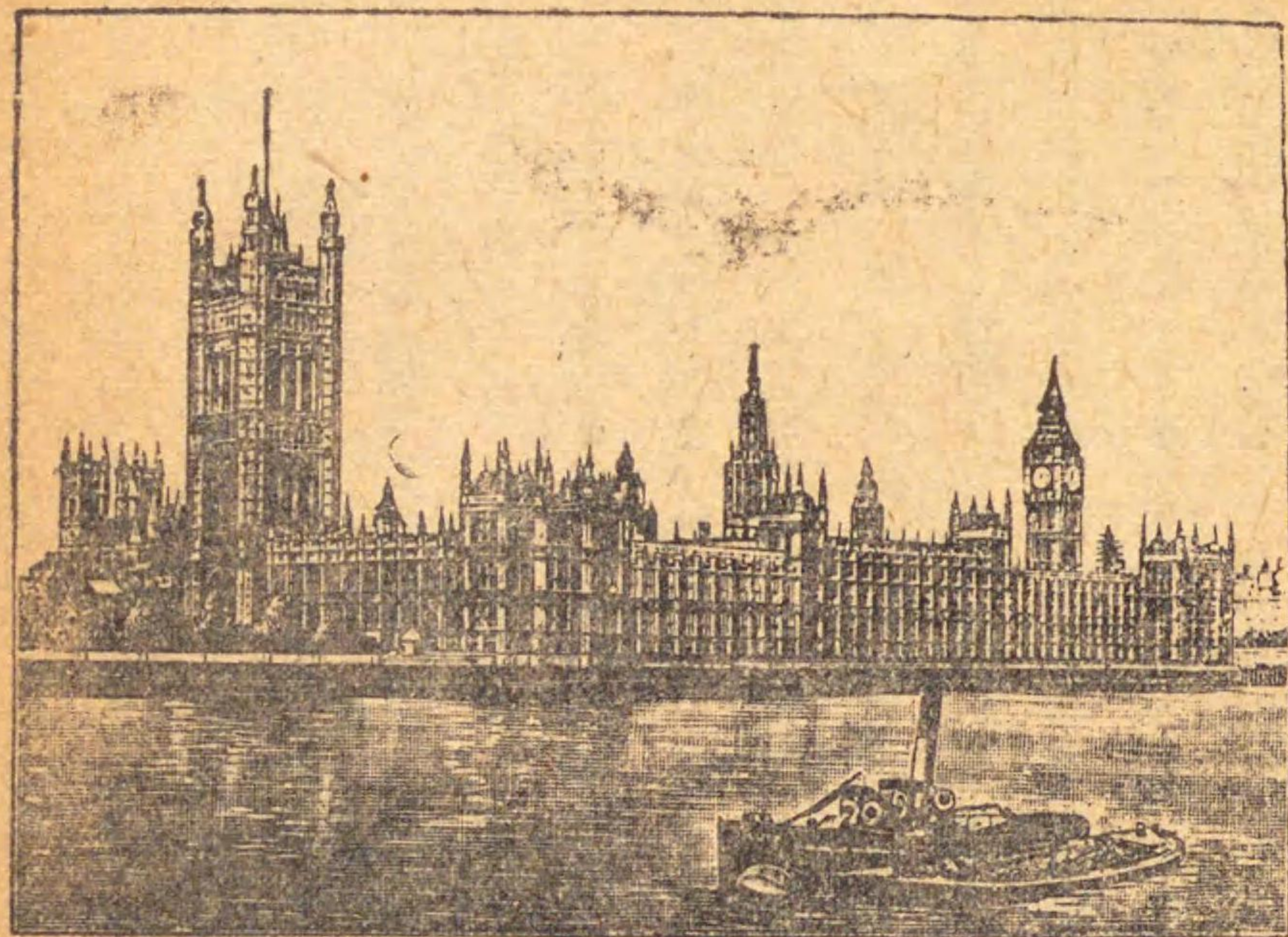
それは鐵と石炭のことです。資本家は、大きな、じょうぶな工場を建て、たくさんの大機械を備えつけ、汽船、汽車、電車をつくり、鐵道を通じたり、しごとのため、大きな十階も二十階もある事務所をたくさん建てます。合衆國のニューヨークには、百數十階もある、すばらしく大きな事務所のビルディングが、たくさんあります。ところで、こんなものはみな鐵でつくつてあります。昔の家、船、車、機械は、たいてい木で造りましたが、今はそうではありません。それでは大きい、じょうぶなものができないからです。しかもその鐵も、ただの鐵ではありません。これまでは鋭い刀などにだけつかつた、とてもかたい鋼鐵です。この鋼鐵が、産業革命がおこつて

から、すばらしくたくさんあります。建物の内外のすべてのもの、橋、電柱、みな鋼鐵です。(今、鋼鐵よりもかたい高速度鋼など、いろんなものがたくさん用いられます) 大昔は石時代、つぎに銅時代、青銅時代、近代は鐵時代、さらに現代は鋼鐵時代とされます。鐵は、山から掘りとられた鐵鑛石を、きわめて高い熱の熔鑛爐でとかりつくり、さらにその鐵をもつと高い熱で炭素などをまぜて、鋼鐵とします。だから、鋼鐵は熱の力でできるのです。ところが、その熱はすべて火をたくのです。火は、鐵をつくるには、木炭をもやしたのですが、今は石炭をもやします。そのため石炭が非常にたくさんあります。それに、蒸氣をおこしたり、電氣をおこしたりするためにも、非常に多くの石炭をたかねばなりません。そこで、産業革命のため、鐵と石炭とが最も必要で、非常に多くあります。鐵と石炭とのないところでは、現代の産業は發達しないのです。イギリスは、鐵と石炭とに最も富んだところす。今、世界で鐵と石炭の一ばん多いところは合衆國です。ドイツ、ソ聯などにもたくさんあります。けれども、第十九世紀頃には、イギリスが一ばんこれらにめぐまれました。またエジプト、インドなどが、イギリスの自由になり、その棉花をたくさんもつてきて、綿布をつくり、それをまた同地方へ高く賣りつけ、イギリスの資本家は利益を得たのです。イギリスの産業の發達はそのためでした。

ところが産業革命によつて、大問題ができました。すべてのしごとには、天然資源と、勞働力と、資本と三つが必要です。天然資源はもともとねうちのないものです。人間が生活上必要として利用するから、價値ができます。鐵でも石炭でも、棉や麥や豆をつくる土地でも、水力電氣の水でも、空氣と同じように、もともとねうちがなく、また誰れの所有物でもなく、自然のままに存在しているのです。(土地もそうです。それを土地の所有權を定めたりするのは、まちがいです。)ただそれを利用し、加工し、作業して、人間の生活にやくだつようにすることは、人間の働きです。石炭や鐵を掘り、石炭からいろいろの藥などをつくり、鐵鑛石から鐵や鋼鐵をつくり、また棉をつくり、その棉花を紡ぎ、織るようなことは、すべて生産といいますが、この生産は人間の勞働力でやるのです。だから勞働力がなかつたら何もものもできないのです。ただそれを助けて、しごとをしやすくするいろいろのことに、別な費用がいります。たとえば石炭や鐵鑛を掘る道具だとか、運ぶ入れ物だとか、紡織の機械だとか、工場の建物だとか、いろんな施設がいります。その費用をだすために資本がいります。ところが資本家は、さらにその上に石炭の産る山、

鐵の産る山、棉をつくる土地などをじぶんのものにして、他人にかつてに掘らせたり、つくらせたりしません。それから工場や機械もじぶんのものですから、そんなところで石炭をほり、鐵をとかし、綿をつむぎ、布を織る人は、かつてに働くことができませんから、資本家につかわれて、その山や工場ではたらく外はありません。産業革命になるまでは、そんなことはほとんどなかつたのです。働く人たちは、まずしいながらも、じぶんの家とか、小さいしごと場とかで、じぶんの道具をつかい、じぶんだけで、綿をつむぎ、布を織りなどして生活したのですから、他人につかわれたり、やとわれたりして働く必要はなかつたのです。けれどもこんどは、大規模な工場で、安くてよいものがたくさんできるようになると、そんな家内工業や手工業ではいきいていけなくなりました。そこで、これらの人々は、すっかり貧乏になつて何もものもなくなつた上に、生きるためには、新しく資本家のつくつた工場や、資本家の持ち物である炭山、鐵山などで働らく外はないことになりました。こんな人が、つぎつぎにたくさんできます。工場が大きくなり、資本が大きくなり、品物がたくさんできればできるほど、これまでの中小商工業者はどしどし、しごとがなくなつて失業します。失業した人たちは、生きることができないからどしどし、資本家の工場へおしかけて、働こうとします。ところが工場では、これまで數百人の人間のしたことを

一つの機械がやつてくれますから、たくさん働く人はいりません。また働いても、機械の働く方が安くつくのだから、機械と競争をして働こうとする人間は、働く賃金がだんだん少なくなります。そこで働く人々の少い賃金ではなかなか生きていけません。資本家はそのために、ますますじぶんの都合のよいことを考えます。できるだけ少い賃金をあたえて、できるだけ多くのしごとをさせ、できるだけ多くの利益をえようとしています。そして働く人たちを、工場のそばにおくため、そこへむきくるしい、とても人間の住めないような長屋をたくさん建て、豚を飼うようにして、労働者たちを住ませます。できるだけわるい食物や着物でがまんするよりしかたがないほどわずかな賃金をくれます。工場では、長い時間働かせます。まるで昔の奴隷よりもひどい生活です。だから、工場労働者のことを工場奴隷といえます。こうして、何も所有物のない貧しい人々は、ただだから一つだけで資本家の工場などで働きます。労働力を資本家に賣ることの外に、生きる方法がないのです。そしてともともと労働力でのみ生産が行われ、生産の利益がとれるのだから、その利益から、資本をひいたあとの大部分は、労働者の賃金として與えられるべきですが、資本家は決してそうはしません。かれらはじぶんの利益と都合とで、まずもうかつた金の大部分をとつたあまりを、かれらの計算において、労働者に賃金としてくれます。だから労働者は八時



第28圖 イギリス國會議事堂

間働いたとしても、そのうち三時間分の賃金は資本家のために搾り取られ、のこりの五時間分の賃金だけ與えられるのです。しかも、もしそれでいやならば、その工場で働くことをやめる外ないのです。やめたのでは、そのあくる日から、じぶんだけでなく、妻も子供も、食べられません、家もありません。生きていけません。だから機械や動力がよくなればなるほど、働きたいものが多くなればなるほど、労働者の労働条件はわるくなり、賃金はさがり、そして資本家の条件はよくなり、もうけが多くなるのです。そこで、労働者と資本家とは根本からの考えがちがつて、對立し、争わねばなりません。

つぎに、これまでは、紡いだり織つたり、そのほかのしごとは家内工業、手工業であつて、いめいの家庭で女や子どもたちが、らくにできるしごとが多かつたのです。その上、女はおもに家事をやつたり、子供をそだてたりしました。ところが産業革命で家内工業、手工業がだんだんなくなつた上に、主人の働きだけでは生活ができませんから、女や子供たちも生活のために、外へ出て働かねばならなくなりました。そこへまた、紡織機械などはだんだん機械でしごとをするにたやすくなり、女や子供でも、らくにしごとができます。百本の糸の紡げる機械に、ただ一人か二人の女か子供がついていて、時々ぎれた糸をつないだりするぐらいで、けつこうなのです。だから、鐵工とか造船とかの重工業は別として、輕工業で働く人は、男から女や子供へと、ずんずんかわつていきます。今ではどこでも、男より女の方がずつと多いのです。イギリスの紡績工場で、一八九一年までの五〇年間に、男は五三パーセント増しているのに、女と子供は二二パーセント増したそうです。そして賃金は、男と同じしごとをして、女や子供がずつと少いのですから、それと競争をすると、男はやはり賃金をさげられるか、やめてしまう外はありません。そのため男と女、子供とのしごとのねうちにちがいがなくなりました。

そこで、女や子供のしごとがたいへんふえたところへ、家の内にいる必要もないし、またそれ

では生きていけないから、みな工場に行つて、女工、工員となります。工場では、家庭の生活とまるでちがいます。工場の規則と、工場長の命令で、働く者は同じに、しごとをはじめ、しごとをやめます。しごとは、ちやんときまつて、外のしごとをしたり、休んだりはできません。単一の作業、単一の生活です。何の變化もありません。何のおもしろいこともありません。つまらぬたいくつな、長い時間の働きで、身も心もぐつたり疲れます。夕方、うちに歸つても、ただ寝て疲れを休める外には、何もできません。そしてあくる朝はまた早くから出かけて、同じしごとをくりかえします。

イギリスでは、ナポレオン戦争ののち、長い間、たいへん不景氣であつたところへ、産業革命のため、生活はきわめて困難でした。そこで貧しい人たちは、ますます貧しくなり、賃金はさがる、失業はする、男たちさえ働く職場がないのに、女や子供はずんずん工場にくる。賃金はますますさがる。資本家はますます搾取する。九歳以下の子供が、一日十二時間から十五時間も働かされたそうです。イギリスの人たちのうちで、これはたいへんだと、やかましくいいたしました。イギリス政府でも、これは人道問題だと、いろいろ考えました。まず、國會の選舉權を擴張して、労働者の代表を國會におくり、こんなわるいことをなおす法律をつくらうとしました。し

かし、その頃、労働者たちは、もうそれぐらいでは満足しませんでした。労働者たちは、労働問題は、労働者の力で解決すると思えたのです。

そこでイギリスの労働者たちは、労働者だけの組合をつくりました。労働者は労働者の働く力の外に何ももつてはいない。だから資本家の金の力と戦うには、労働者の働く力がみないつしよになつて、團結して、その力で戦う外はないと思えたのです。こうして労働者は、じぶんたちの組合をつくり、團體をかためて、それで労働運動をはじめました。イギリスでは、はじめこの組合と、その運動とをやめさせました。労働者が賃金を高めるために團結して資本家にあたることは罪悪だとされ、そのため労働運動の指導者たちは、刑務所に入れられたり、追放されたりしました。けれども一八二四年に、組合はみとめられることになり、それから急に組合員がふえしました。しかしイギリスでは今でも組合運動は、あまり自由にできません。ただ、五月一日のメイデーの行進などは、すばらしくさかんなものです。メイデーは、「國際労働日」ともいわれ、毎年五月一日に「労働階級の國際的協力をしめし、また階級的團結をかためるため」の示威運動デモンストレーションです。一八八九年にパリの労働者によつて定められ、そのあくる年から行われました。この日は世界じゆうのおもなところでメイデー・デモが行われます。イギリスの國會には、労働者に味方する

る労働黨が、早くからあつて、今もなかなか有力です。

18 第二十世紀の文明

皆さん、文明の進歩のあとをたどつて、人類のおこりから、最近までの、おもなことを語つてきました。そして、第十九世紀から、とうとう第二十世紀もなかばとなり、今年は一九四八年です。そこで、この百年ばかりの間の、文明の進歩をかえりみますと、まことに驚くべき、すばらしい、えらい進歩がつきつきとおこりました。これらには、あまりに重大で、あまりに複雑なことが多くて、みじかくお話しするわけにいきませんから、おもなことをだけを、ざつと話しましょう。くわしいことは「現代文明史」として、別に語りましょう。

まず、フランスでは、一八四八年に、二月革命がおこり、再び共和政治となり、ルイ・ナポレオンが大統領となつたが、野心家のかれは、一八五一年にクー・デ・ターを行つて、その翌年、とうとう皇帝になりました。クー・デ・ターとは、権力のある者が、人民の意志にかまわず、暴力により、無理に自分かつての政治をすることです。かれは、フランスの人民が、大革命このかた、大きな犠牲をはらつて民主共和國になつたのを、また専制帝國にしてしまいました。こん

な、文明の進歩のじやまをする政治を反動政治といひます。

その頃から、イギリス人とフランス人とが、さかんに東洋の方で活動しました。イギリス人が、中國との阿片戦争によつて、香港を占領したのも、またインドの最後の皇帝を島流しにしたも、この頃です。アメリカ合衆國に南北戦争がおこり、大統領リンカーンによつて黒人奴隷が解放されたのは一八六三年です。ロシア皇帝が農奴を解放したのが一八六一年です。ナイティンゲールらの力によつて英國赤十字社のはじまつたのは一八六四年です。

また一八六七年に、オーストリアとハンガリヤとが、一つの帝國となり、イタリヤが統一されて、獨立國となつたのが一八七〇年です。この年、フランスとドイツとが戦争になり、フランスがまけて、ナポレオン三世が降伏して、フランスはまた人民の共和國になりました。(しかし、まだほんとうの人民の國になつたわけではありません。)その翌年、ドイツが帝國にまとなり、皇帝がパリのヴェルサイユ宮で位につきました。一八七六年にはイギリスの女皇がインドの皇帝をかねることになり、一八八一年にはロシア皇帝が革命黨のために暗殺されました。一八八六年には、イギリスが、インドの東のビルマを占領し、すつとのち、一八九八年には、アメリカ合衆國とスペインとの戦争で、合衆國が勝ち、合衆國はフィリッピンを占領し、またハワイ島をも併合

しました。その翌年から、イギリスは南アフリカの小さい二つの國と戦争をして、とうとうこれを併合してしまいました。その間に、一八九四、九五年、日本は中國(その頃の清國)と戦いました。その講和の時に、ロシア、ドイツ、フランスが横やりを入れ、間もなく、ロシアは滿洲の一部(旅順、大連地方)、ドイツは膠州灣(青島地方)を中國から借りました。

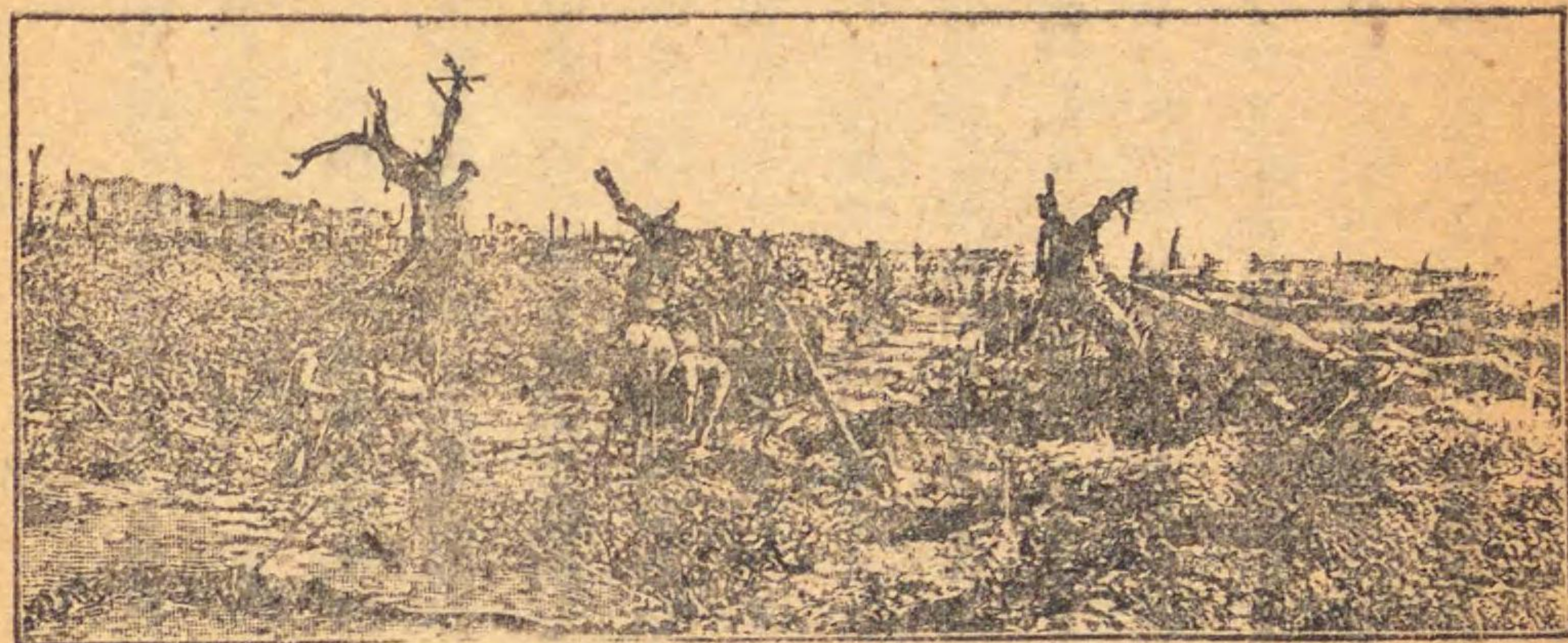
こうして、第二十世紀になると、まず一九〇一年には、イギリス領のオーストラリヤ(濠洲)が、これまで六つの植民地に分れていたのが、聯合して一つにまとなり、ついでイギリスは、イングランド、スコットランド、アイルランド、インド、オーストラリヤ、カナダ、そのほかすべてのイギリス領土をひとまとめにして、大英帝國(ブリティッシュ・エンパイヤ)の皇帝と稱することになりました。その翌年、日本はイギリスと同盟しました。その一方、日清戦役の頃、ロシアとフランスとが同盟し、ロシア本國からのシベリヤ鐵道が遠く太平洋の岸に通じ、朝鮮、滿洲、日本をおどかす形勢となりました。一九〇二年にドイツとオーストリアとイタリヤとが、中部ヨーロッパで同盟しました。これらの國々とロシアとは關係が深かつたのです。その翌年頃からアメリカ合衆國が、南アメリカと北アメリカとの間にパナマ運河を開いて、大西洋と太平洋との船や軍艦の通航をたいへん便利にしました。アジアとアフリカとの間を通ずるスエズ運河は、

かつと前からイギリスが管理しました。そしてイギリスは本國からジブラルター海峡に入り、地中海を通り、スエズ運河をぬけ、紅海からインド洋に入り、インド、マレイ半島、香港、中國、日本へ達する、世界で最も大切な航海を、ほとんど獨占していました。その航路の途中の、ジブラルター、マルタ、スエズ、アデン、コロンボなどをはじめ、最も重要な港や島を占めていました。

一九〇四年から翌年にかけて、日本とロシアとが戦争をしました。ロシアの艦隊は、遠くアメリカの南から、インド洋をまわつて日本海に來ましたのを、日本の艦隊が沈めました。日本は陸でもロシアに勝ちました。その平和條約はアメリカ合衆國で、大統領の仲裁でできました。それと同じ頃、日本とイギリスの同盟はさらにかたく結ばれました。その翌、一九〇六年、ロシアは専制政治をすてて、國會を開きました。

これにさきだち一八九八年に、ロシア皇帝によつて、世界じゆうの平和會議が提唱されました。それから間もなく戦争がつすいて、とうとうロシアが日本と戦つたのですが、一九〇七年に第二回平和會議がオランダのヘーグ（ハーグ）で開かれました。世界各國の争いは、これからの會議で相談をして裁こうということになりました。世界じゆうの人間はこれでもう、いやな戦争はなくなるだろう、とたいへんよろこんで、安心しました。ヘーグには、りつばた平和會館もできました。

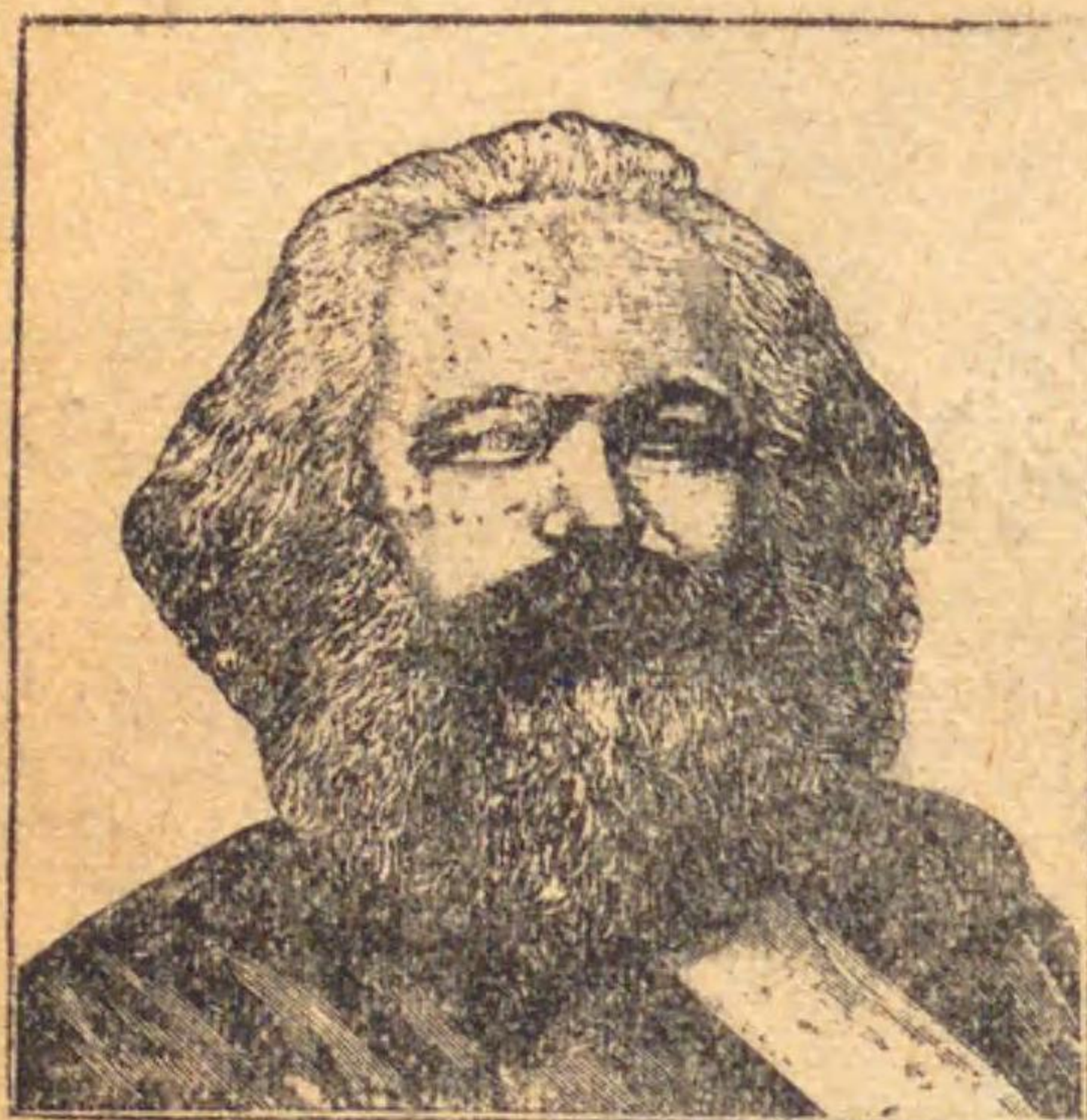
この頃から、日本とアメリカ合衆國との間に移民問題がやかましくなりました。一九〇九年には合衆國西部で、排日運動がありました。日本の移民にも、反省すべきことが多かつたのです。日本と合衆國とは紳士條約を定めたりしました。またその頃から、ドイツとロシアとの間で、トルコ、ペルシヤそのほかのいろいろな問題がおこりました。ドイツの皇帝は、ヨーロッパの南東部からトルコ、ペルシヤ、インド方面への鐵道を計畫して、イギリスの海上航路に對抗しようとしてきました。ドイツ、オーストリア、ロシア、イギリス、フランス、イタリアなどの、國際上の利害關係は、たいへんもつれてきました。世界のおもな國々は、力のかぎりをつくして、戦争の準備ばかりしました。とうとう一九一四年夏、世界大戦がはじまりました。ドイツ、オーストリア、ハンガリア、トルコなどに對し、ロシア、フランス、イギリス、日本、イタリア、のちにはアメリカ合衆國などが戦いました。おもな戦場はヨーロッパの中部でした。海でも戦いました。すばらしい大きな大砲や、また長距離に彈丸のとどく大砲もつかわれました。飛行機、機關銃、潜航艇など、新しい兵器などがさかんにつかわれました。一九一八年秋、四年半の戦争のち、



第29圖 第一次大戦のあと

休戦となり、米國大統領の意見にもとづき、その翌年、フランスのパリのヴェルサイユ宮殿で、講和條約の調印が行われました。この戦争を、第一次世界大戦といえます。ドイツは皇帝が退き、共和國になりました。そして米國大統領主唱のもとに國際連盟ができました。

なぜ世界大戦はあつたか？ これにはいろいろなわけがありますが、最も大きいわけは、帝國主義と軍國主義ということ です。ヨーロッパでは、近世になつて、ヨーロッパ以外の、植民地と、商品を賣る市場とすべき土地をもつことに競争をし、奪いあいをしました。ことに、イギリスの産業革命からのち、綿布、機械、日用雜貨などがずんずんさかんにできるので、それを賣りこむことと、その原料を手に入れることのために、植民地、市場の獲得競争がますますはげしくなりました。そのため國が富み、強く、大きくかたまつて、おた

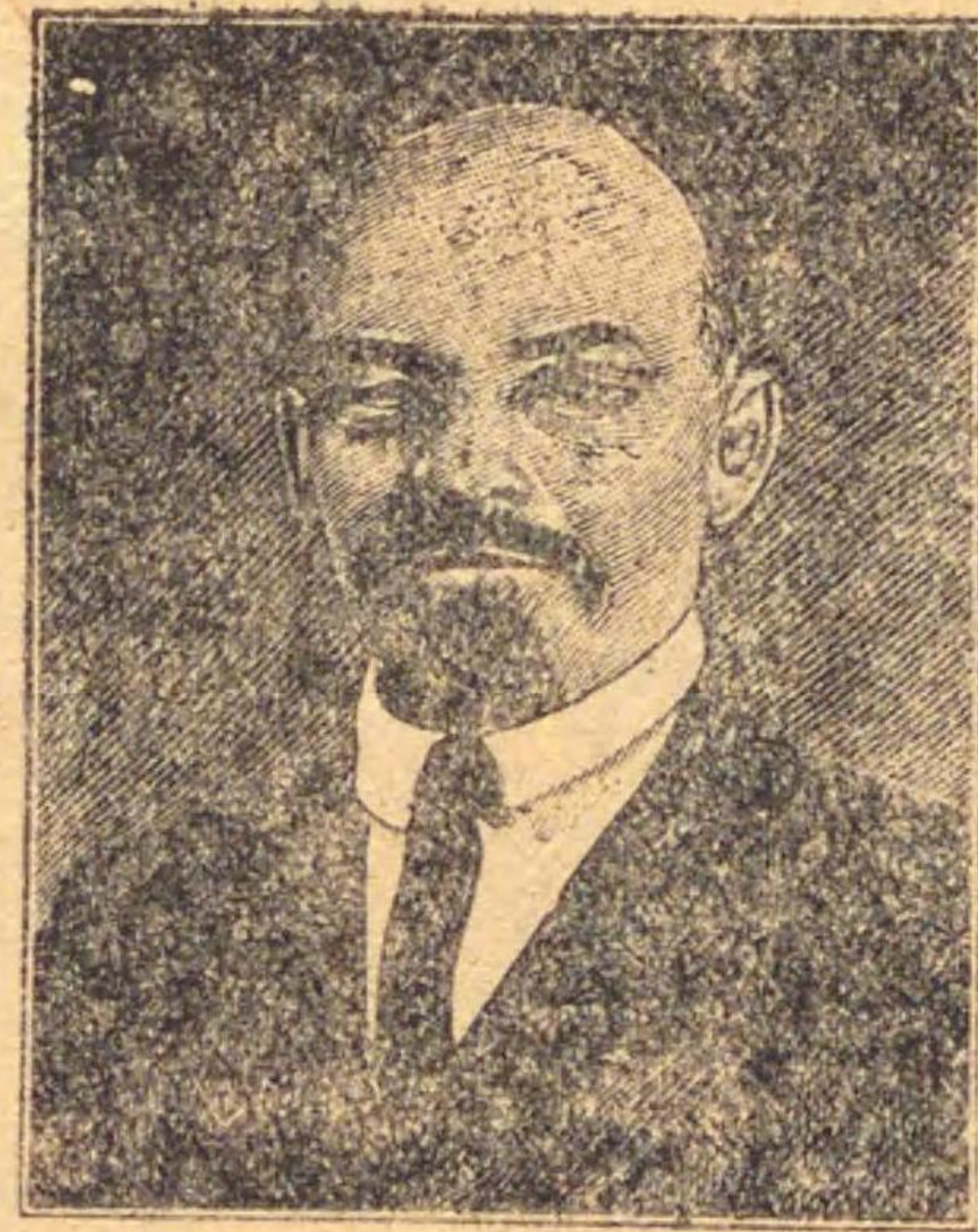


第30圖 マルクス

がいにつつかるようになりました。その上、資本主義が發達して、資本家が世界の富を支配しようとするようになったので、ますます増長しました。これを資本主義的、商業主義的、帝國主義といえます。帝國主義は、資本主義制度が、國家主義の形をとつて、おたがいに戦いあつたのです。それが、戦争の形をとつて、多くの人民たちを、殺し、苦しめ、生活を奪つたのです。

この大戦の間に、一九一七年春、ロシアに革命がおこりました。ロシアはドイツとの戦争で、だんだんまけていきました。ロシアはまだ民主主義の國になつていませんでした。百年も、もつと前から國內に民主主義革命がおこりかけたけれど、いつも弾壓されて、死刑になつたり、シベリヤに流されたりしました。しかし日本と戦つてまけた頃から、革命派の力がだんだん強くなりました。ついに、革命派がたちあがり、皇帝をやめさせて、新しい政府をつくりました。それは、數十年來、ドイツのカール・マルクスが、エンゲルスなどと主張してきた共産主義による社會をつくることでした。マルクスらによれば、こ

うです。人間の生活は物がもとである。物は労働者と農民がつくりだすのだが、これまでは、権力者、支配階級が、いつも労働者、農民の手からそれを搾取し、奪いとつて、じぶんたちの欲望をみたし、生活をゆたかにするためにつかつてきた。そこで、これまでの世界は、支配する階級と、支配される階級とに對立して、階級闘争の歴史であつた。そこで、働く労働者、農民だけが



第 31 圖 レーニン

上へと、だんだん代表者の代表者をだして、相談をする機關をもうけ、その相談によつて政治をする組織です。そして資本家をなくし、人民が人民の手で、人民のためになるしごとを計畫し、實行し、分配していく社會を實現しようというのです。これは大ロシアだけでなく、ウクライ

ナ、白ロシア、コーカサス、その外、いくつものソヴィエツト共和國があり、それがいつしよになつて、ソヴィエツト聯邦をつくつています。この組織を世界じゆうにひろげて、共産主義世界ソヴィエツト聯邦をつくり、資本主義をなくして、働く人民の世の中にしよというのです。

しかし、世界はなかなか、すぐにはそんな理想どうりにいきません。それからのちも、せつかくのけつこうな平和會議も國際連盟も、ただ紙の上のしごとにとどまつて、實際のやくにはたちませんでした。イギリス、米國、日本をはじめ、フランス、イタリヤ、ドイツ、ソ聯など、しきりに軍備をさかんにし、帝國主義戦争はやみそうにもありませんでした。それから日本、米國、イギリスが二度も軍縮會議を開いて、戦争の害をとめようと努力したりしましたが、そのうちにイタリヤにファシズムがおこり、ドイツにナチズムがさかんとなり、日本にも軍國主義者の力が強くなつて、ついに、一九三二年の滿洲事變の頃から、戦争の機運が動き、第二次世界大戦という、悲しむべき、いとうべき戦争になりました。日本はその最後まで戦つて、原子爆弾を投げられた國です。しかし皆さん。今、日本は世界でまつさきに、戦争を放棄して、永久に戦わぬ、平和の國であることを、憲法の上に、人民によつてはつきりあらはした國です。世界でたつた一つの平和主義の國です。そして、文明を進歩させ、世界じゆうの人民の幸福のためにのみ働